# 第三號

August —— 1936

# 東京商科大學蹴球部誌

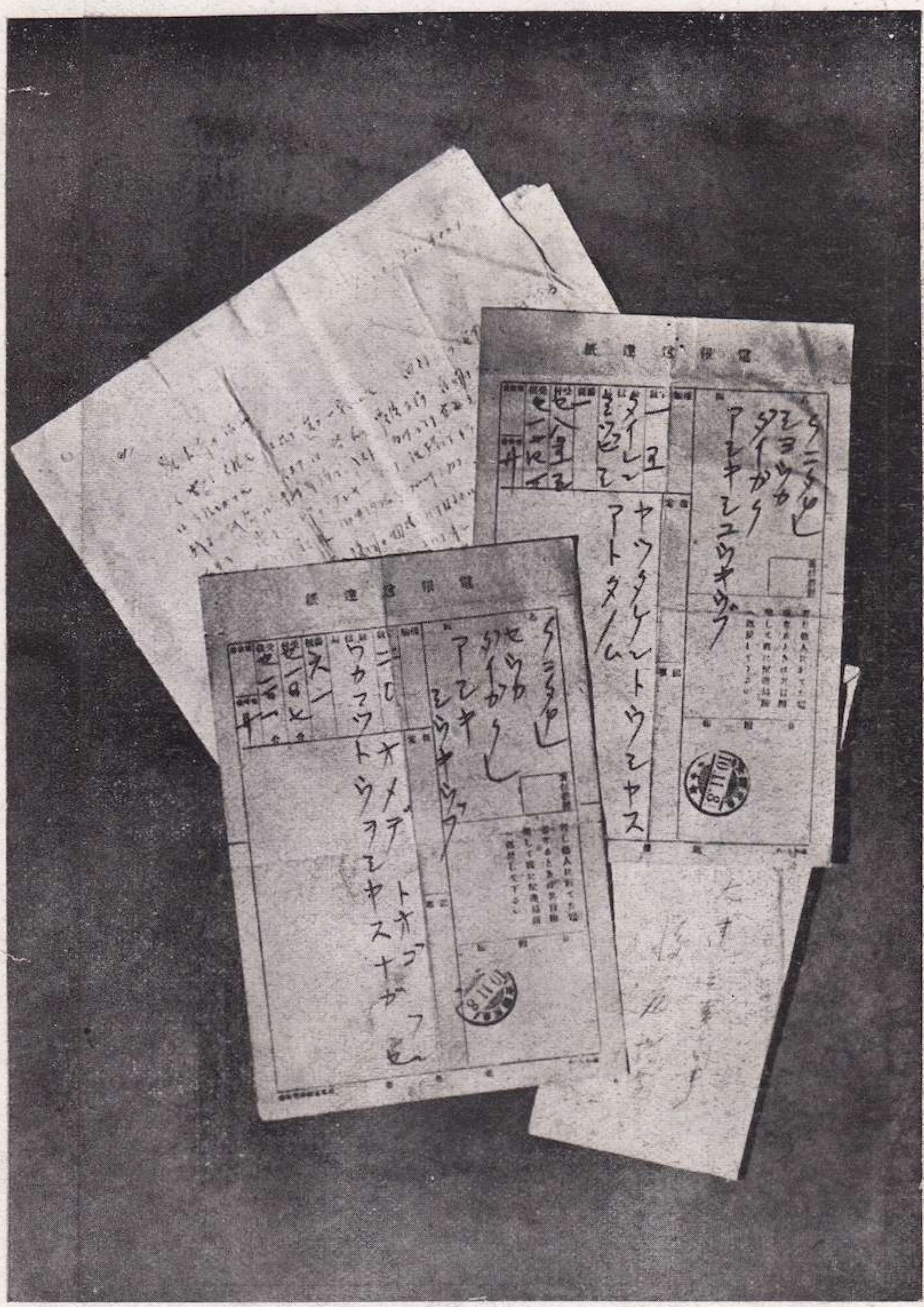
潑溂と早瀬に躍る若鮎の如く
颯爽と野に嘶く若駒の如く
若人の生命は躍動する
惠まれたるかな、吾等
一橋蹴球部、幸にして若し

（輝美）

大任果して學窓を巣立つ

水島（左）　神野（右）　二兄の記念撮影

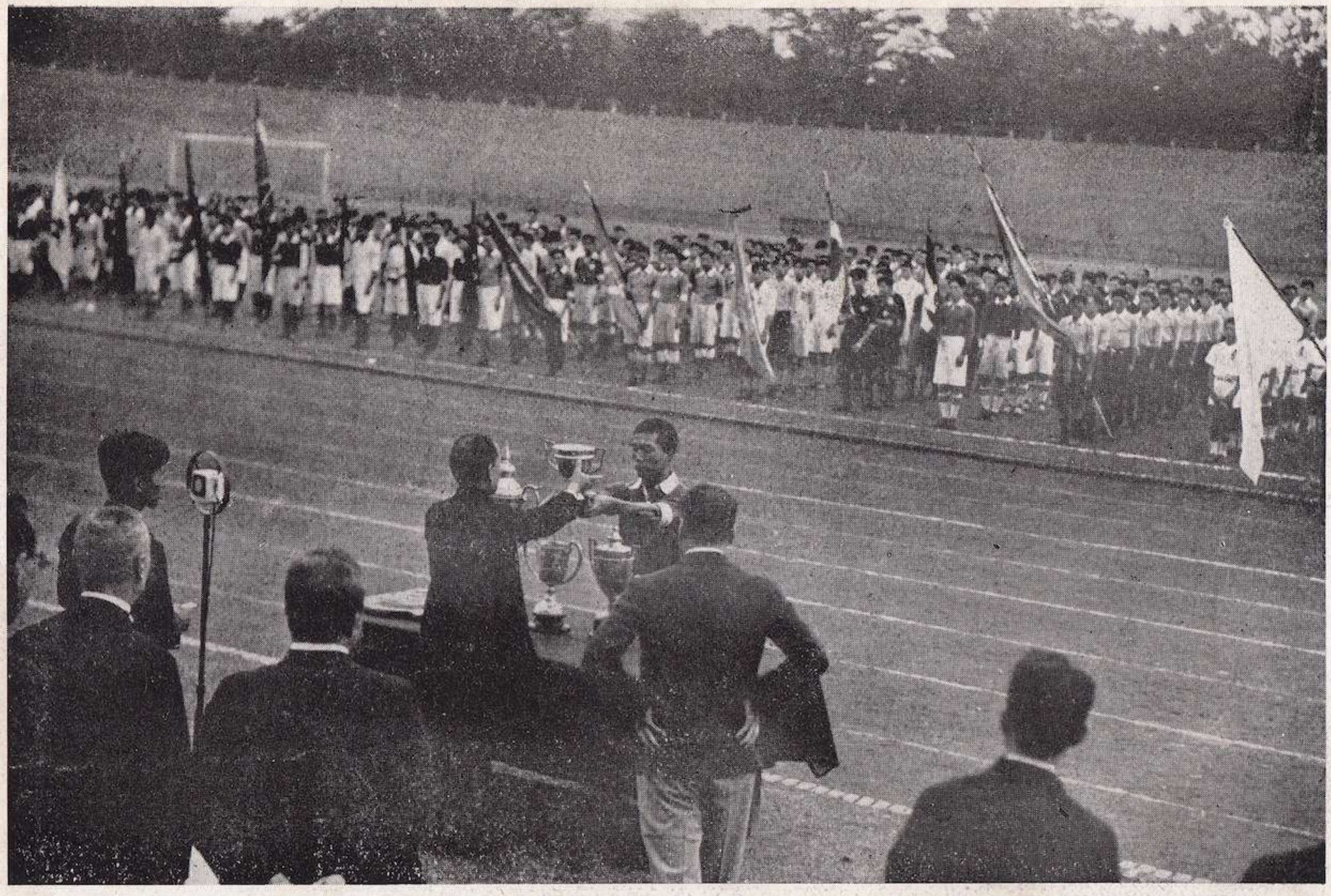
# 背後の力




先輩の喜びは激勵は
我等に熱戰を爲さしむる背後の力なり　（輝美）
（昭和十年十一月七日立教ヲ敗リシ時）

# 昭和十年度豫科記念撮影

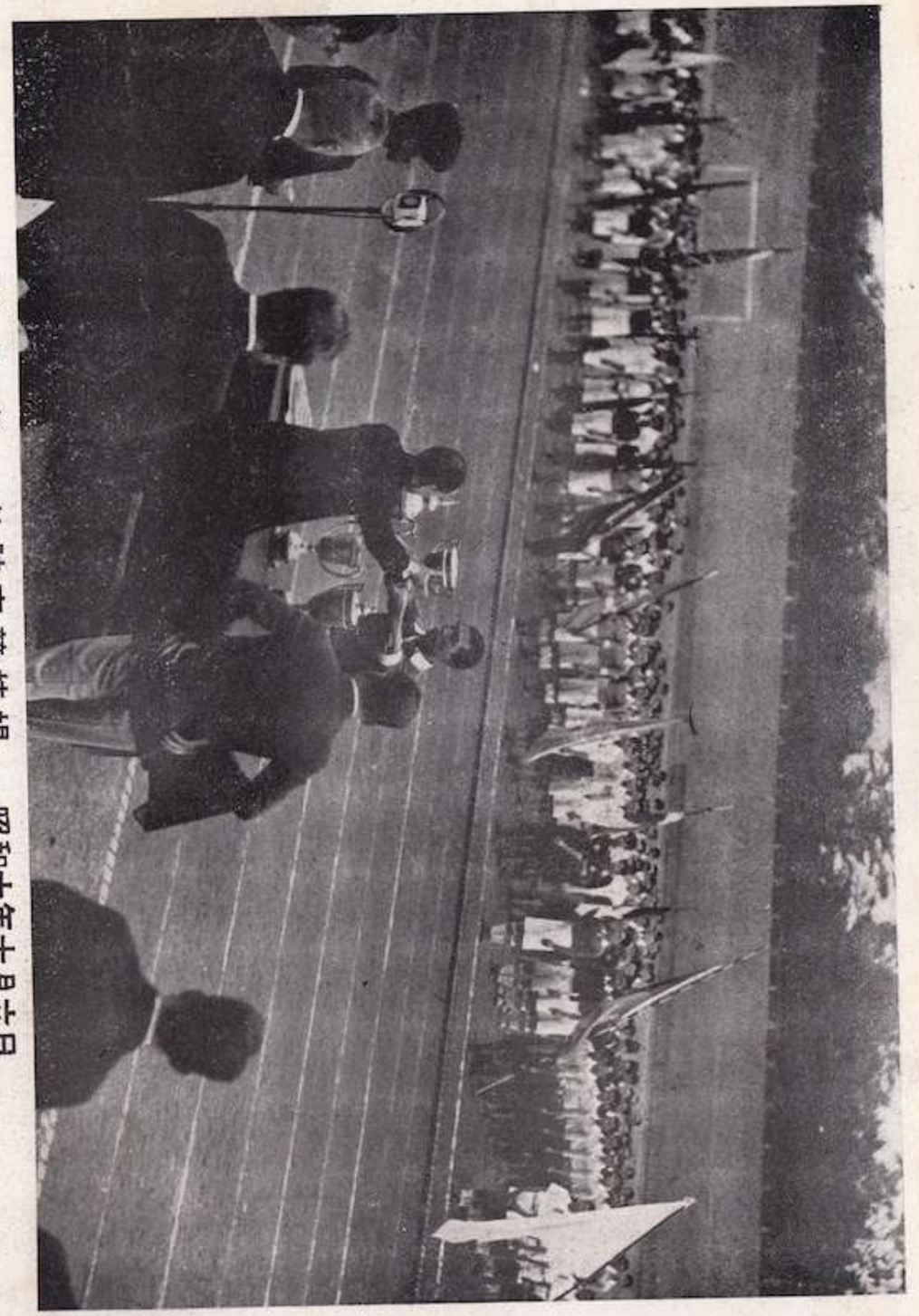
前列左より　岩崎、後藤、小西、熊澤（以上豫科卒業）米山　中列左より　吉澤、山田、清水、金井、早野、池尾、二階堂、堀尾　後列左より　狩森、高橋、菅瀬、石割



蹴球祭　於神宮競技場　昭和十年十月六日

中央ハ一部昇進ノ優勝カツプヲ返還スル神野兄

右ヨリ七ツ目ノ斜メニヤヽ傾キタル旗ガマーキユリーノ赤旗。旗手●角田



蹴球祭　於神宮競技場　昭和十年十月六日

中央ハ一部昇進ノ優勝カップヲ返還スル神野兄

右ヨリ七ツ目ノ斜メニヤヽ傾キタル旗ガマーキュリーノ赤旗。旗手・角田

## 逝きし栗山健三氏

在學當時の面影

略歴

大正十五年三月　横濱二中卒業
大正十五年四月　商大豫科入學
昭和七年三月　商大本科卒業
昭和七年四月　嶺岸慶藏商店勤務
後病ヲ得テ療養中
昭和十一年七月二十七日　午前六時半　逝去
住所　横濱市神奈川區宮前町七

## 故栗山氏追悼の辞

本三田島輝重

突として貴兄の訃を聞く
悲しみに耐へず
貴兄在學の當時
悲運に沈みし蹴球部
今や興隆の意氣熾なり
謹みて哀悼の意を表し
併せて今秋の活躍を
貴兄靈前に誓ふ。

昭和十一年八月二十三日

# 蹴球「第三號」目次


とびら……輝美
寫眞……
卷頭言……浅枝彦太郎
収穫……本三　森田昭之……（一一）
蹴球部生活……本二　重見敏之……（一三）
愚言……本一　岩崎寛貞……（一六）
先輩よりの書翰……（二篇）……（一八）
部員漫評……有志數名……（二三）

**追想感想集**

蹴球隨想……本三　荒井文雄……（一〇）
寸感……本二　鈴木彰……（一三）
蹴球部生活回顧……本二　村井恒典……（二三）
自分に言ひたい事……本一　後藤虎雄……（一八）
若葉の蔭で……豫三　二階堂晴三……（二九）
感じた事……豫三　菅瀬十朗……（三二）
所感……豫三　狩森正雄……（三三）
彼岸……豫二　吉澤貞雄……（三四）
感想三題……豫二　高橋道太郎……（三五）

初めて蹴球をやつて……（七篇）……豫科一年生……〔三六〕

✽送別文集

送別の辭……主將……淺枝彦太郎……〔三九〕
神野・水島兩兄を送る……本二……大掛隆久……〔四一〕
兩兄を送る……豫三……二階堂晴三……〔四二〕
水島・神野兩兄の思ひ出……豫三……米山大三……〔四三〕
ヴアリエテ……本一……熊澤博文……〔四五〕
豫科新二年生『名物男』……田根宇麻……〔五〇〕

✽特別寄稿

軍隊教育に就て……二階堂謹司……〔五五〕
會社の窓から……水島茂……〔六四〕

九州旅行……本二……村井恒典……〔七一〕
先輩訪問感想雜記……本一……熊澤博文……〔七四〕
春季合宿日誌……〔七八〕
豫科「日誌」より……〔八五〕
昭和十年度試合記錄……〔九二〕
一橋蹴球部部員名簿錄……〔九八〕
編輯後記……〔一〇六〕

# 巻頭言

淺枝彦太郎

今秋リーグの日割も既に決定した。

一身を賭すべき十月も、目睫の内に迫つた事を痛感する。四月以來の部員の眞劍なる練習の結果が數旬の後には展開されてゆくのだ。

最後の合宿を如何に活かすか。一人一人の精神が大切だ。

「熱い暑い」と思ひながら練習する位なら……引張られて動く位なら……

勝つ！勝つ！この語の中にこもる最大要素は、精神的要素でなければならぬ。技術の練磨といふも、それは戰に臨む氣持を一人々々が把握してゐてのことだ。レギュラーもサブも殘らず、各々が戰の氣持を作つて欲しい。言ひたい事はたゞそれだけ。

（文責在記者）

# 一橋の歌

一

空たかく光みなぎり
照り映えてさゆらぐ公孫樹
白雲の湧きたつところ
そこそは輝く聖地

これぞこれわが母校懐しのふるさと
その名讃へてここに集ひつ
その名ささげて永久に變らじ
あゝ一橋われらが母校

二

希望燃え生命あふるる
若人が赤誠き力に
建て築き繼ぎきし誇り
そは高く輝く文化

これぞこれわが母校懐しのふるさと
その名讃へてここに集ひつ
その名かかげて永久に進まん
あゝ一橋われらが母校

三

われ愛すいまぞ輝け
力充ち眞溢るる
意氣の子が榮ある行手
ヘルメスの導く學府

これぞこれわが母校懐しのふるさと
その名讃へてこゝに集ひつ
その名守りて永久にたゆまじ
あゝ一橋われらが母校

# 收穫

本三　森田昭之

美しき菊の花こそは晩秋の霜枯れの日に人の目を樂します唯一の花である。菊を作る祕訣は夏の暑い日光とたゆまざる丹精が要るのであり、一人では五拾株以上は作れないのである。何らの偶然的因子はない。努力が即ち結果に現れる。何でも眞劍な努力なくしてよい結果は得られるものではない。何かの本で讀んだのだが松竹の撮影隊が箱根にロケーションをして禿頭に赤とんぼを止らせる場景を撮る爲に生きた赤とんぼを捕へやうとして數時間を費した。けれど僅か一こまか二こまの場面の爲に斯んなに努力してもそれがファンには少しも認められないし活動屋は淋しいとあつたがもしそれが詠歎的の意味であつたにせよ又自慢と解しても何と彼らは世の中を甘く見て居る事か。斯んな風だから邦畫には相當なレベルの作品は出來ても藝術的に社會的發展表現手段として世界的レベルをぬきんずる作品が殆んど一回も出現しないのである。もつとも我國の文化に於て世界を指導すると云ふ樣なものは余りないけれどもそれに對して努力のあとが看られればそれでよいのだ。又我國の洋樂が相當の歴史を有し乍ら世界的音樂家とも云はる可きは僅かに二人と云ふのは一寸天才とか何とか云はれるとすぐ宜い氣になつて精進を止めてしまふからだ。單に嫁入道具や自分の趣味を滿足せしむるのみで先人未踏の境地を開拓せんとの意志を有せざる哀れな音樂學校の生徒よ。我が商大蹴球チームの今秋の戰蹟を看て世人がどう思つたか分らぬけれども、五戰四敗一勝のみとは云へシーズン後半の善戰は東に商大あり

と認めしめたとせば部員の春の合宿から夏の炎熱下の合宿の現れである。早稲田の優勝に潜む努力は一部の者にしか分らず、多くの者は結果のみを冷酷に批判する。世の中の事は皆さうであり又それでよいのである、努力せぬ者は沒落する。そしてつばもひつかけられぬ、素晴らしい結果が生み出づるにはそれだけの苦みが背後にあり、不斷の精進が上手いプレーとなつて現れる、僅かの努力を投じて認められぬなどと云ふは自分以外の者は遊んでゐても居ると思つて居るのであらうか。立教ラグビーチームが今シーズン大躍進を遂げたのはラグビーを樂しむ部員を陶汰したからださうだがさもありなん。鳩山氏のゴルフならいざ知らず、蹴球は樂にやらうと思へば必らず敗けて許り居る事は眞理である。嘗て四部に落ちた時は蹴球を自分の趣味としてやる氣風が存在した。之を淘汰して三部に上つたのである。我が部も豫科生は多士濟々で實に頼しき限りであるが、技術は如何に上手くとも蹴球を自分の樂しみと思ひ出したらそのチームは衰亡の淵に臨むと云ふ事をよく憶へて居て戴きたい。人間は又そう考へる弱點を有するものであるから、試合に當つては自分が守らなければ敗ける自分が上手くチャンスを作り自分が入れねば勝てぬと云ふ强烈な責任觀念と學校を愛する心が各メンバーに缺けて居たら勝利は永久にそのチームの上に微笑まないであらう。以上は僕が本シーズン三試合によつて得た精神的收穫である。

# 蹴球部生活

本二　重見敏之

現在の本科生が未だ豫科時代で在つた頃、四部だ、三部だと蔑まれた蹴球部も部員一同心を併せて常に新なる希望に燃えつゝ精進した結果、一昨年遂に待望の二部制覇が達せられ、昨年度は第一部のチームとして、他の强豪に列し堂々と戰ふ事が出來た。

而してこの蹴球部を導く指導精神なるものは部員一同の團結と部に對する確固たる信念であり、此の精神を以つて我々は過去四ケ年戰つて來たのであるが、最近商大チームは「若い」とか「單純なる戰法しか知らない」等諸々の批判の聲を耳にするが、之は正に肯綮に當つて居ると思ふ。元來商大チームは組成分子が他の大學と違ひ、全然中學時代部生活をなさない人々が大部分を占めて居る。之は實に大なるハンデイキャップだ。其故に個人プレイに於いて他の大學に劣つてゐる事、及昨年の對帝大戰の時の樣に最善を盡して練習し全力を盡して戰つても猶敗北した事は實に之に歸因するのである。

近年、年と共に部員の數は激增して來た。新しいグランドも出來た。最早數の過少とグランドの狹小に惱された石神井時代は遠き想ひ出となつた。狀態はかくまで惠れて來たのであるから、他の事は一切忘れてチームの缺点を除去する

爲に最善の努力を拂はねばならぬ。先づ個人プレイに注意する事である。そして毎日の練習中常に新しい攻撃、防禦の方法を生みだすべく努力しなければ、部の技術的向上は望まれない。

練習及練習試合は勝敗より以上に技術的向上に心懸けねばならぬ。結局之が練習試合に於ても勝を得る要素となるのであるが……故に新方法を行ふために失敗しても構はない。しかしこの失敗を有意義なものと爲す事が最も肝要である。その失敗を他のプレーヤーより責められる事を恐れて、徒に事勿れ主義でただ機械的に練習を續ける事は最も拙劣なやり方であらう。

更に前述のハンディキャップを征服する第二の道は部員の團結と、自省とにある事は云ふ迄もない、商大蹴球部は以前は量を問題とした。しかし之からは質を問題としなければならない。但此處に云ふ質とは、技術の上手下手に在るのではない。眞に蹴球を熱愛し、よく統制に服して眞面目に練習する者を云ふのである。

嘗つては蹴球部は團結のチームと云はれて居た。しかしまだ〳〵強固にする必要がある。

昨年の秋十日間の部員の練習に於ける出席をとつて見た所、六八パーセントの結果を得て、思はず慄然とした。勿論リーグ戰最中の爲負傷者が多數あつた事も此の原因ではあらうが、まだまだ部員中には部の精神に就いて、よく分らない人が居る樣に思はれてならない。

更に最近目に付いた事は部員が、我儘になつた事だ。石神井時代は毎年制覇と云ふ大目的に追はれた爲か、グランドが如何に惡くとも不平を云つた者がなかつた。その他自分の心に滿ち足りない事があつても、ただ默々として練習したしかるに最近少しグランドの狀態が惡いと文句を云ふ。又身体にホンの一寸した故障があつたり、別に重大な事とも思



へない用事があれば、これ幸とばかり練習を休む。この樣な事は皆自省心の缺如であり、斯樣な部員が相當居る事は正に蹴球部の危機を形成するものであらう。「量より質へ」我々の急務は蹴球部を眞に思ふ人々のみにより組織するべく努力する事である。この目的を達する爲に少數部員の淘汰は免れない事であり、其等の人々には御氣の毒であるが危機を切拔けるには最も至當な方法だと思ふ。

昨年度は初めて一部に昇進したばかりで、勝手がよく分らず、所謂足踏みの時代として一年を過した。しかし斯る時代は最早過ぎ去つた。今年こそ堂々一部制覇を目指して進まねばならぬ。

待望のシーズンは巡り來つた。我々は大いなる抱負を以つて練習を行はうではないか。

（一一、五、七）

（話の泉）

昨秋のリーグには商大はどの試合にも必死の覺悟で戰つて來たのだが、特に立教戰に於ける神野、水島兩兄の胸中は察するに餘りある。神野兄などはその日家を出る時家人に〔今日負けたら家へ歸らない〕と告げて來られたさうだ。實際それ程の決心があつたからこそ勝てたのだ。しかしあの時もし負けたら神野兄は何處へ泊る積りだつたらう！それが見たかつたとは後での話

# 愚言

本一　岩崎寛貞

日頃、此の世の中で最も幸福なるものは馬鹿と狂人とぢやないかと考へて居ります。己の思ふまゝに振舞つても周圍はたゞ苦笑で片附けてしまひますし、周圍の嘲笑、噂、苦樂、悲哀などにも無關心であり、心の動くまゝに行動して行けますし、すべて其の言行が周圍に制約されずに行はれ、發せられてゆく事も出來るからです。

そこでこの馬鹿や狂人のすべて周圍を無視して己の心の方向に進んでゆく、外から何ら具体的に制約されぬといふ点を正氣な良心的、意識的な色彩で塗り、そこに此の世に生を享けて進んで行く自己の方法、覺悟を決めて行つたら如何だらうと思ひました。

それは、馬鹿、狂人の倫理的社會的方面の缺陷を正氣の自己意識、價値判斷の能力などで置き換へて、いはゞ外から何らの影響を受けずに、己の欲する所を、己の信ずる所をやつて行かうといふのであります。しかし如斯くに總ての事をやつて行つたら、實際の所が社會生活團体生活は成りたちません。我々がこの社會の一人である以上には、その社會に調和して行く必要があります、いや義務があります。それには己を殺して所謂馬鹿になつて周圍に包含されてゆくが全く己が周圍に殺される樣な事はいけません。周圍から働かれて馬鹿になつてはなりません。自分自身の方から先づ己を殺して周圍に向つて行かねばなりません。つまり、前の場合では全然生の價値は見當りません。後の立場を出發してこそ、そこに己の眞の人間たるべき道も開らかれる樣になるのではありますまいか。それには修養を積まねばなりませんで而して一歩一歩自己完成へ進まねばならぬのでせう。

修養の方法、己を完成する手段は澤山あります。宗教すべての信仰など勿論その一つでせう。亦蹴球をする、それも立派な自己完成への手段方法でありませう。一旦蹴球に足を踏み入れた以上、其處に意義と希望とを見出し、一路精進邁進人格完成の目的理想に向つて歩を進めて行かねばならぬのではないでせうか。

（春の合宿を明日に控へて）



（話の泉）

○炎天下の夏の合宿練習。昨年の思ひ出は數々ある。田舍ボリのお巡りに、半裸で体操中を「おいコラッあーん」とやられた掛さん。

○その時「監督は統一上どう思ふか」と聞かれた神ケン禀然と答へらく「そんな形式的些細な事は一向構ひません」

○雨がたゝつて枝村、荒井が捻挫して休んだ事がある。合宿で練習出來ぬ程つらい事はない。二君長大息して曰く「せめてもう二人ケガをすればなあ」彼等は何をするのだらう。

# 先輩よりの書翰

## その一

蹴球部の諸君　よくやつて呉れた。これで先づ一安心した。四對三の電報を見た時本當に嬉しかつた。スコアは諸君の最後までの奮闘を物語つてゐる。殘る二試合に樂な氣持でベストを投出して立派な意氣と力を示して呉れ給へ。堂々一部のプレイヤーとして活躍して貰いたい。

四月お別れして以來御無沙汰しつゞけてゐる。が東京からの來信や來連の人々により、諸君の健闘が物語られて遙かに喜んでゐた。若さと意氣をもつ事は此まで屢々報いられて來た。意氣と力は充分既製一部を壓到してしまつた。春の合宿に、講習に、夏の合宿に常に共同一致多數の出席を見て、大いに苦しい練習を續けられた事を思ふとき、今日の勝利には涙が出て來る、電報にもある様にこれからだ。確實に一部のものになる日が待ち遠しい。頑張りを續けて呉れ給へ。去年も一部は大分もめて農大が落ちてゐる。

何は兎もあれ嬉しい。當地にあつては、何處に電話をかけても新聞社は東京のリーグ戰は報じてくれない。電報が入らないのだ。早大慶大に健闘した事も東京から切抜を送つて貰つてやつと知つた。實際よく頑張つてくれた。一点でもとつてくれた事は嬉しい。メンバーも僕の考へてゐたのと異つてゐたのに驚いた。フォワーヅに角田の名の見えないのはどうした事だ、体でもこわしてゐるのではないかと心配してみたり、新聞だけ屢々林田と去年やつた様に借りてゐるのかなと考へたりした。ハーフに水島主將自らの出陣、攻防に活躍をつゞけてゐる事であらう。小西のセンターの初陣、元氣でやれ、先は長



いぞ。バックは長身ぞろひ、枝村がやつてくれてゐるので心強い。鈴木と二人で頑張つてくれ。田島のキーパーは一部きつてのチビだらう。色々急がしい事が多いと思ふ。

皆から時々便り受取り、又先般は雜誌を送つて貰つたりして本當に御無沙汰してすみません。

僕の生活もすつかり變つてしまひました。太陽と土地がなつかしくてなりません。今でもすぐ裸になつて地べたに寢轉んでみたい様な氣がします。大連に來た當座は球が蹴りたくつて仕方がなかつたが、會社が終るのが六時七時となるのでどうにもならなかつた。けれども六月になつてからは滿鐵蹴球部に席を置いて毎日練習をやつた。しかし學生時代と異つて、明日會社へ行かなくてはと思ふとけが一つ出來ず思ふ存分やれなかつた。約二月ばかり蹴球部の生活が續いたが、秋のシーズンに入つてからはとう〳〵一度も練習に出られなかつた。滿鐵はリーグ戰に優勝したけれども、僕はグランドに行く事さへ出來ず、試合も見ずにシーズンオフしてしまつた。

この一週間急に寒くなつて、部屋にはスティームが通ずる様になつてゐます。會社は面白いことも苦しい事もあります。ひどい時は十二時の夜業が一週間も續きます。早い日が七時。八時九時はざらです。やつてゐる仕事が大バクチなので家へ歸つてもなか〳〵安心出來ません。大豆油と植物油の原料の賣買をやつてゐるのですが、自分一人で取引所へ行つて支那人に混つて賣つたり買つたりするのは、丁度試合をやつてゐる様なものです。殊にこの十月の末から最近にかけては、取引所始つて以來ともいふ位の大事件で、取引停止が一週間も續き大混亂を呈してしまつたので、今後かたづけで大いそがしです。丁度一点勝越されてタイムが殘り五分と言つた時の様な氣持で始終居ります。

蹴球部で永らく鍊へられた意氣と力とをもつて仕事に當つてゐますが、隨分役に立ちます。今では會社の中で相當(ハデ)に仕事をやらせて貰へる丈でも嬉しいです。四月に來てから既に机が二つ上りました。僕が上つたのではなく上が皆他所へ轉勤してしまつたのです。けれど後へ誰も來てくれないのでトコロテン式に上つてしまつて、朝から晩まで苦勞の種です。が會社中で一番面白い

支店であり又その中で一番面白い係でせう。儲かつたかと思ふとすぐ損をしたり、大きなことで見當がつかないのです。

甲種合格したので、内地に十一月に歸れると思つて喜んでゐました。皆と一緒にリーグの閉會には飲める豫定にしてゐた所歸れなくなつてしまつたのです。來年の三月からは滿洲の兵隊さんになります。公主嶺獨立歩兵第一聯隊附になりました。さつぱり面白くありません。しかしお國の爲です。第一戰に立つて働くのも又男子の本懷と思つて居ります。

何れにしても諸君とはしばらくお會ひする機會を失ひました。四五年内地には歸れさうもありません。幸ひ元氣に働いて居りますから御安心下さい。それから相變らずキーキー聲で會社中どなり廻して居ります。何の因果か此ばかりはなほりません。

諸君も元氣で頑張つて下さい。先づは御喜び旁々日頃の御無沙汰お詫びまで。

昭和十年十一月九日　　大連にて　後藤博基

○之は昨秋一部としての最初のリーグ戰に於て、連戰連敗の憂き目を見んとした時部員一同の團結と、神野水島兩兄の必死のリードに依つて前年三位の立教を敗つた、その打電に感激した後藤兄がその夜直ちに筆をとられて我が部に寄せられたものであります。

## その二

重見君

御手紙有難う、小生こそすつかり御無沙汰して失敬、兎に角會社員になると學生さんの樣に呑氣に春を樂しむといふ樣な結構な事は望まれず、朝から晩まで殆ど自分の時間といふものがないので御無沙汰するのも無理はないのです。どうか惡しからず。商大蹴球部の活躍ぶりを殆ど知り得なくて物足りなかつた所へ兄から精しい便りを戴き然かも春から仲々素晴しい活躍をして居られる事を伺ひましてすつかり嬉しくなつてしまひました。新入部員も仲々多いとの事、いよ〳〵大世帶となつてサゾ賑かな事でせう。あの小平のグランドが狹く感ぜられるとは實に盛んですな。でもそれだけに上に立つて纏めて行かねばならぬ兄等の御苦勞もなか〳〵の事と思ひます。



どうかしつかりやつて下さい。

大阪へ來てから五十日は過ぎ、今日二度目の月給日です。東京に居れば兄等の十人や二十人にたかられてもビクともしないですが殘念ですナー、と離れてゐれば大きな事はいくらでも言へますが實は安ロ給で淋しいです。朝寢坊も出來ないで毎朝六時半から七時の間に起き出でて（君の樣な寢坊さんには凡そ眞似が出來ない藝當と思ひますが……之は内しよ）ヒゲをチヤンと剃つて（ヒゲといふと高橋の顏を思ひ出すが）カラーもワイシヤツも二日目に一度位は代へて、實に身なりだけは一人前ですがいざ會社へ行きますと社員でなく見習のつらさ。出勤簿も普通商業出の若い連中よりもあとの頁をめくらねばならぬ……あてがはれる仕事は商大出の學士樣の腕前を示すには一寸物足りない事ばかり。然し之もツトメぢやと文句も言はずコツ〳〵やる所、流石は蹴球部で鍊へた精神だ。箱根土地のグランド迄何十回も走つた者には兎に角何クソといふ意氣だけは持ち合はす事が出來るもので、時々は上の者からドヤされても平氣で朗らかに仕事をやつて行く事が出來るのは有難いです。然しこう云つたからとて會社の仕事がそれほどたやすいものばかりとは限られてゐない。殊に手紙は苦手だ、候文や英文の手紙を書かされる時は全く途方に暮れるよ。それから次に弱るのは英語の會話だ、此の間神戸の外人商館へ出張を命ぜられて毛唐と押問答をして來たが、小生のブロークンイングリッシュには大分頭をひねつてゐたよ。でも押しの一手で圖々しく交渉してどうやら一つ商賣をして來て愉快でした。

僕の係は綿布の商談で、毎日外國の支店から電報が入る。之を譯す（暗號だから）のが第一の仕事だ、それからその注文に從つて内地の綿布問屋や機屋に交渉する。だから毎日朝から晩まで電話は鳴り續け、商人は出入するさながら戰場の樣で、此の上ない活況です。もう此の頃は電話にも大分慣れて來ましたが、未だ大阪辨がギゴちないです。「マイドオ、キニ」「ソンナコトイフタカテ、アキマヘンワ」なんて仲々すら〳〵出て來ませんナ。

寮は西宮の香櫨園にあります、仲々いゝ所で夏には海水浴で賑ふさうです。部員諸君の中で暇な人は夏にでも來る樣に奬めて下さい。六甲も近くですよ、日曜の度に六甲方面へザツゾウとバイギングにデガケマズ。

では部員諸君に宜敷く。大阪のイトはん達もヨロシウイフテキマツセ、あんたハンも元氣でヤンナハレ　早々

五月二十五日　　水島　茂

# 部員漫評

## 紹介者　有志數名

### 本科三年

○淺枝彦太郎（廣島一中）　問はれて名乘るもおこがましいが、生れは藝州廣島の瀬戸の海邊に遠からぬ、ニックネームは海賊と呼ばれちや居れど船ならぬ、球の間を馳せめぐる、ムッツリ彦とは俺の事　C.F主將

○角田　昇（府立五中）　さてその次に控へしは、センチメンタルその聲（戀…）も、人を惹きつく猫撫や、通ふ千鳥は伊勢の海の、鳴く音に人はカクデンと、おいらを呼んでゐるんでい。　F.W

○田島輝重（府立四中）　又その次に連るは、色は黑いが月の眉、王手先手やハーモニカ、少しは秀でたこともある、おいら澁谷のターさんぞ。　G.K

○森田昭之（府立一中）　續いて後に控へしは、聲は出さねど氣は強く、多摩湖電車の驛員を木魚の如くたゝいたる、森田昭之江戸育ち。　L.H

○荒井文雄（埼玉松山中）　さてどんぢりに控へしは、聲はひねもす夜はよもすがら、バイの音には耳たこの、バイバンなどゝ人もいふ、氣は優しいが荒井文雄たあ俺のこつた。　F.W



### 本科二年

○鈴木　彰（府立一中）　氣が強いせいか殺生なことが大好きとある。曰く魚釣り曰く鐵砲打曰くスツトバシ等々。麻雀は最初浮いたら必ず沈まず、最初沈んだら先づ浮かず　F.B　としてのドッヂングは先づ日本一だらう。

○大掛隆久（高師附屬中）　中學校いや小學校から蹴つてゐたせいか足は仲々器用です。ボートでゆがんだ左の胸を黄さんの爲にへこまされてしまつた。左といへば心臓に近い、その胸をふくらましてくれる人もあるらしいとは夏は暑いです。　F.W

○村井恒典（府立一中）　皆が朝鮮人〳〵といふが僕にはどうしてもさうは思へない。隨分日本人に似た朝鮮の人もあればあるものと感心する。日本語も中々上手だ。日本語で萬才をやる所など日本人はだしだ。まあ精々あのひげは無精しないで剃る事だね。　F.W

○重見敏之（神戸一中）　入學當時はなかなか勉强家で大掛其他の人々へノートを貸してゐたのに、最近は鈴木等から借りる身分となつたとは。一橋蹴球部マネジャーとしてオートバイ事件や定期事件に活躍してゐます。最近人間が出來て來て、部員にどん〳〵おごる樣になりました忘れないぞ・・・

○林田　毅（青島日本中）　リンデンキではありません、ハヤシダツョシと申します。エキゾチックなプレイをする人。デカイ頭と尻を振り〳〵足の何處かで蹴る球は特性の球だ。○○の中

に蛋白が混ざるとかで味噌汁がのめないと消耗してゐた、やはり日本人だ。御安心々々々。

○淺田英三（京都一中）　一人で三つの名前を持つてゐるためか人の三倍もモテるさうだ。京都は東京より暑いでせう。萬才の素質は確かに持つてゐる。只線が細すぎる、ライオン式勉強法は本二隨一でせう。

## 本科一年

○小西正夫（廣島府屬中）　所謂海賊だけあつて、その不撓不屈の頑張りは正に蹴球部の華、練習後空腹のためノビたといふ物凄いエピソードの持主です。地方人特有の純情は我々の等しく敬愛する所であり、その蹴球部に對する熱情は我々を常にリードしてゆく大きな力である。柄にない良い聲で我が部きつてのテナー

○熊澤博文（埼玉松山中）　勉強家であると同時に雄辯家であり、その委員長としての手腕は定評があり、力強いたのもしい性格の所有者（オゴレ）、アミイを作る名人で常に我々をひがませる点は玉にキズ、好漢惜むべし。

○岩崎寛貞（府立二中）　雄辯は銀、沈默は金を確信してゐる様に見えるが、寸鐵人を殺す警句を連發する所萬更さうでもないらしい。巧味のある粘り強いプレイは默々たる精進の賜として吾々の範とするに充分。要領のよい事、勝負事の強い事、鈴木兄と共に蹴球部の双璧。

○後藤虎雄（湘南中）　名をつける時には余程注意を要する。トラヲなんて名をつけたから飲むとちきに虎になる常習犯だ。サッカーでもちつと呪んでゐて猛烈なスライディングタックルをやる様は商大隨一で、まるで虎が獲物に飛びつくのにそつくりだ。綺麗好きでお人好しだから勝負事には弱い。君はこの頃消耗してゐるが住み給ふ所がいけないのだ。新宿は二丁目〇〇のちき傍、名は虎でも人間である以上はねえ君。赤い襦袢（以下十七文字削除）

## 豫科三年

○二階堂晴三（廣島一中）　主將として兄さんの後を受け大いに頑張つてくれます。豫科の間は勉強なんかしなくつていゝと言つてゐる所、勉強は余りお好きぢやないですな。麻雀は近頃旨くなつた様です。酒の方は大分いけます。醉ふと無暗に抱きつくです。F.H

○米山大三（府立五中）　凡そ名前とは緣遠く体は小さいですがいつまでも子供ではないですぞ山椒は小粒でもピリッと辛いとね。今年は豫科委員長で浮世のシンサンを經驗するです。

○菅瀨十朗（府立五中）　仲々これでも隅におけぬ男。趣味は音樂、映畫レヴュー新宿の喫茶店は大抵知つとるです。安田靴店が近くのため忙しいです。御苦勞様。C.F

手くなりました。

○池尾隆二（府立五中）　新入生は先づ君の足の太いのに一驚し次いで物凄いシュートに驚きます。おとなしいが飲むと雄辯になります。津田の方へはよく御散歩の様です。L.Iをやつて居り

ます。

○狩森正雄（上野中）　將棋のシンラツな助言者として有名です。助言は優勢の方にすることに決つてゐます。從つて旗色の悪い方は彼を恐れます。食ふ事にかけては右に出る者も左に出る者もありません。　G.K

## 豫科二年

○早野廣太郎（府立五中）　凡そ都會的な所のない奴である。一本氣な情熱的な野人である。彼から蹴球を取去つたら彼の八〇％は無くなつてしまふだらう。大きなキツク、大きな體、大きな……兎に角種馬（タネウマ）とはうまく言つたものだ　F.B

○高橋道太郎（府立五中）　F.Bとして早野ト名コンビである。なか〳〵勉強します、色々な方面を。あの特色ある聲はモテさうな聲です。（別稿參照）

○吉澤貞雄（飯田中）　果敢なプレイは眞似出來ません。一本氣で興奮し易いです。驛員とスツタモンダやつて遂に寮入りとなりました。綽名はタコださうです。彼が醉つて向ふ鉢卷した時よく似て來ます。（別文參照あれ）

○山田秀雄（府立四中）　とても氣のいゝ男だ。同級生はみんな君を恐れてゐるさうだが、秀才の悲哀だね。何事でもやり出せば一生懸命になつてくる。夢中になる。此頃メツキリ上手くなつたし何か眞劍に考へてやつてゐる所が見られます。敬服します。



○石割知之（開成中）　眞面目に努力した人だから此の頃はメキ〳〵上達してきた。尙一層頑張られたし。彼の趣味は映畫。「スター」といふ安い雜誌を創刊號から全部持つてゐるといふその道の通？

○金井雄吾（神戸一中）　あんまり呼ばれないがアダ名はキートンだ。もう一度彼の顏を見直してくれ。オツチョコチョイなることは自他共に認める所。

○堀尾貞一（神戸一中）　お孃さんタイプの人、それでライトハーフを頑張るから不思議、無口だが心の中では部を思ひ、他を思ひ自ら絶えず叱咤してゐる立派な人です。誰ですか？「無口だが心の中では○を思ひ○を思ふ」なんて言つてゐるのは、失禮ですぞ!!。

○吉田富彦（神戸一中）　オボツチャン、だが何時までそんなこと言はせてはいけません。御尊父おなくなりで悲しいでせうが元氣を出して頑張つて下さい。

○清水睦（府立八中）　もとは睦美と書いたのですがねえ。何時も眞直ぐに歸宅したことがないとはいやはや。新宿澁谷と闘所が二つありますからねえ。だがそれは昔の事（之は弟さんが讀まれてもよい樣に書いて置いてあげます。辯護料さへ下されば何時でも本當のことを言つてあげます）えッ？本當のことを言はれると困るつて。

○荒川守之助（宇都宮中）　彼の顏を見るとパイパンのタンキを思ひ出します。立派な體だからキツクとストツプをしつかりやつたらよい、何でもよいからしーかりがーんばつてくーれ（之

を彼の口調で言つてみて下さい）

## 豫科一年

○鈴木英二（一中）酒もいけるしファイトはあるし、一中出身には珍らしいしつかり者だ、サッカー部に來る一中出はみんなマンザイだねえ。

○折下　章（四中）おとなしく色白く堀尾の向ふを張るお嬢さんタイプだらう。病を得て療養中早くよくなることを祈る。

○茂木利孝（五中）野田の醤油屋の息子だと。成程醤油の様に使ひ方がよければ旨いものに出來上らう。とても熱心な人だ。

○丸山好勝（神戸三中）外には表はさずとも君には燃ゆる様な熱のあるを知る。今後大いに頑張つてくれ

○片山光夫（廣一中）体格もキックも立派で頼もしい。今後の行き方でスゲエのになる。

○大上戸幸登（廣一中）名前の如く大酒飲みでもない。廣島の人は皆素性があるのだから大いにやつてくれよ。

○渡邊　健（神戸一中）記念祭を見てから、どうも君は喜多さんに見える。器用なプレイに今後はつつこみをつけ給へ。

○櫻井孝次（神戸一中）蹴球が好きで商大へ入つたといふのだから嬉しい極みだ。野球もなか



〳〵上手だ。

○松岡義彦（八中）清水の弟で兄貴より上手だしシャンだし、酒もいけるし而もおとなしいと言つたら、兄貴くやしがつて「あれはムツツリ何とかさ」

○高木正治（廣一中）頼もしい何事もハツキリした男である。練習にもつと出て來て先輩の後をしつかり引受ける様でありたい。

○宮崎豊治（二中）本一岩崎さんの後輩といふが、凡そよい對照である。右のキックはなかなかヨロシ。

○松本信喜（五中）キーパー志望です。丈が少し足りないが体はよいから一生懸命やると上達します。

### 話の泉

○早野君は皆もよく知る通り畜産組合から最優秀の折紙をつけられてゐる。

○豫科リーグ野戦大戦の後で金井君がステンコロリ。とたんに番臺でメッチエンがイコレたと。

○林田君吉田君と御尊父を亡くされて御同情に堪えぬ。又角田君菅瀬君は御母堂が御悪くてこゝの所部員は不幸續き、而も四君は人一倍頑張つて呉れました。

# 追想感想集

## 蹴球隨想

木三　荒井文雄

飽く迄も禍する大いなる力を反撥し乍ら、蹴球部の苦境を切り拔けて水島神野兩兄は學窓を去つた。兩兄の跡をしのぶ時、失禮かも知れないが「出來ない事をやりとげた。」と言ふ氣持がしてならない。一の歷史を作つた兩兄に滿腔の感謝を捧げる。と同時に、之から、襲ひ來る如何なる運命の下にかてても之をやりとげたいと思ふ。

★　★

世の中にある物は皆下らないもの許りだ。蹴球だつて下らない。然し下らぬ一つの物を色々な觀點から眺め、整理し組織立て一の學問と言ふ製品にする所に學者の尊い所があるのと同樣に、蹴球を守り立て價値あらしめる所に我々蹴球部員の男らしき姿があるのだ。

★　★

電車の向ひ側の座席で「まあ、何て汚い男だらう」と思ひ乍ら凝視する彼女の視線を、其の男は臆測して「アイツ、俺に惚れて居るな」と思ふ、とかく世の中には臆測の多い社界が多い。眞のものを摑まない臆測は社界に濃い暗影を投ずる。

蹴球部丈は臆測のない社會としたいものである。

球を追ふ無心な氣持には、學内騷動の暗影も又成績の事も浮ばない。蹴球の法悦とでも言はうか？斯んな氣持を一瞬でも味へる事をしみ〴〵嬉しく思ふと同時に、圖書館の隅のうらなりに斯んな氣持を味はせてやり度い。



「出稼ぎに行つて歸らぬ茜吾さんに
　お光はすまぬと　野良で泣いて居た。」

此の和歌を讀んで目頭の熱くなるのは私許りではあるまい。此の質朴な姿、質朴味のある所には、潤ひがある。口許り利口になつて行く世の中に、質朴味のある社會を作り度いものだ。

★　★

野球の人氣に比べて歷史の古い蹴球は人氣がない。然し人氣が蹴球するのでもなく又スタンドが蹴球するのでもない。

蹴球は常人に解せない本來の味で終始すべきだ。營利手段に迄落ち込んだ野球から、眞のスポーツマンシップが生れようか？

★　★

我田引水論とは次の如きものか？

「蹴球は、智慧が足の爪先迄廻る樣な人でなければする事も理解する事も出來ない。其の意味で蹴球する樣な人は常人よりも智慧がある。」

★　★

當てられはしないのかと、ビク〴〵し乍ら聞き嚙る教場の隅の講義の味か。

堂々と大地を踏んで黑球を追ふ男心。太陽に描き出された勇姿!!　何れに男一匹の生き甲斐ありや？

★　★

「カルメンが蹴球した」なんて言はない限り嘘も辯解も一應は其の場を糊塗出來る。然し乍ら、嘘や辯解は一時的の產物であり、眞相が永遠の存在である限り、時がすべてを說明する。

「お腹が痛いから練習を……。」

と言ふ言葉は、然し乍ら、常に眞相である。

★　★

近頃の暑い氣候に稍々もすれば崩れさうな元氣、蹴球部諸君!!　暑さに負けないで行かう!!　蹴球部と言ふ城は酷熱の砂漠にあるのでもなく、又打ちひしがれた古城でもないのだ。若い血潮を乘せて、元氣で行かう!!

然も、ゴールポストに衝突し、人事不省に陷り「一點」だと言ふ聲に蘇生して九〇分の試合を戰つた淺枝を主將

と仰ぐのではないか。苦しい時は城の石垣に塗られた先輩の血と涙を思へ!!

（一九三六、四、三〇）

## 寸感

本二　鈴木　彰

又今年も春が來てグラウンドの土は長い冬の桎梏から逃れてその黑さを增し、周圍の樹木も日增に綠を濃くし始めて來た。くつきりと引かれたラインの上をボールをドリブルしながら、ゴールポストに向つてシュートを放つた刹那、ボールはバーの上をいつもの如くオーバーして遙か後の林の中へ消えて行つた。あゝ又かとしぶ〳〵柔かな黑土を踏みしめながら拾ひに行く時、俺は近頃は殊に昔の蹴球部の姿を頭に浮べて何んとも云へぬ氣持になる、俺は今でもあの石神井のグラウンドのでこぼこした雜草の生ひ繁る、半分はラグビーに占領された豫科の時の自分から離れることは出來ぬ。いつでも〳〵漠然とした、何をしてゐたのかわからなかつた時の事が懷しくてたまらぬ。

現在の商大蹴球部又自分の立場と云ふものをふつと考へると、目の前に練習の始まるのを待つ間、無心にゴールシュートをして樂しんでゐる豫科の卅人餘の色とりどりのユニフォームを着た若人の姿を見る時あゝ俺も隨分古くなつたなあと思ひ、又自分の豫科の時七八人の部員が貧弱な身体で而も來シーズンの昇格を唯一の慰安として無理に元氣を出して互に勵まし合つてつらい練習をして來た時と、現在の殆んどグラウンドの半分を埋め盡す若々しい張り切つた豫科生を見る時、細心のリードを以てするなら如何なる爆發的の强さが生れ出るかわからぬと云つた、昔の唯、精神的の結合を唯一の武器とした時とは一面異つたスケイルのとてつもなくでかいものが出來てくる樣なある陰然たる力强さがひし〳〵と感じられる。

而して目前の四十人餘の全部員の汗みどろの姿を見る時、先輩の殘されたこの貴重なる結晶を、肉体的にも精神的にもより强固ならしむることが唯一の俺に殘された



重要なる課題であることを深く感ずる。

この三四年の間に卒業された先輩の懇切なる指導に報ゆるたゞ一つの道は吾が蹴球部を眞面目な强き血と汗の結晶体として保つ事、それだけで充分滿足していたゞけると思ふ。

どうか部員諸君、俺も、もうすぐ學校を出なければならなくなつてしまつた。この殘されたシーズンの間は心命を賭して頑張る積りだから君達も大いに練習をはげんで呉れ給へ。

## 蹴球部生活回顧

本二　村井恒典

小生商大蹴球部に入りて四星霜、五年が將に始まらんとしてゐる。蹴球部再興時代の人々はどん〳〵學窓を出て行かれる。そして私もトコロテン式に所謂上級生になつて了つた。この邊で、再建時代の蹴球部の空氣を殘し我々が部員として絶えず考へて居る可き態度について反省するのは必要な事だらうと信ずる。以下思ふ儘に雜文的に書く。

蹴球部生活は團体生活である。之によつて大學生活に往々にして流れ易き個人主義的惡傾向を矯正す可きである。具体的に言ふと自分に都合のいゝ事をしてもし餘裕あらば團体人としての部生活を行ふと言ふのでなく、先づ部員としての義務を果して而る後自分の仕事を行ふのである。勿論人は各々異つた條件を持つてゐる。何でもかでも練習に出ろ合宿に參加しろと言ふのではない。併し一旦練習又は合宿が極つたら自分一個の萬障を排して協同行爲を行ふ可きである。勿論練習其他に關して自分の意見希望はどし〳〵發表す可きである。併し一旦定つた事に對してはたとへ自分は個人として反對でも部員としてベストを盡してその事に臨む可きである。之恰も議會政治その他に似てゐる、團体生活はかくあらねばならぬ。

今自分は修養中である。もつと肚の出來た人間にならねば駄目だ。今僕の考へてゐるのはこの事だけである。肚之は從來我部のモットーであつたと思ふ。又山口先生

もかく仰言つてゐる。肚！　人間の行動は肚から出發したものでない限り眞の意味の行動は出來ない。又肚のない人間に安心して責任をまかしておけない。去年の學内事件の時にも僕は肚が足りなかつた。もつと〳〵よく考へて肚を作る可きだつた。當時よく考へてゐたつもりだつたけれど混亂した頭で考へた事だから良い加減なものだつた。あの時はもつとしつかりした考へが出來て善惡の信念が立てば肚からの行動が出來た筈だつた。八方に調子を合はす事を考へるより自分の正しいと思つた事に直進す可きである。この肚を之から養つて行くつもりだ。あの時しつかりした肚が出來てゐたらリーグ戰であんなみぢめな姿をさらさなくてすんだのだ。今までの俺と之からの俺と大分變つて來るだらう。又變つて來なければならぬ。いつまでもふら〳〵と糸の切れたたこみたいな風にしてゐる可きでない。

正月に長瀨さんの所に皆集つた。その席上で商大蹴球部員として品格を下げる樣な行爲をしてはならぬと云ふ事を長瀨さんは言はれた。このとたんなんとなく心の中で思つてゐてしかもうまく表現出來なかつたもや〳〵したものが非常にはつきり彼によつて言ひ表はされた樣な氣がした。ジエスキツト的考へ方は誤つてゐる。目的と手段と兩方とも正しくてこそその行爲は正しいのであるスポーツマンとしてこの考へ方でしつかりした氣持をもつてゐたらスポーツは墮落せりなんて言はれるはずはない。昔の武士道は之と同じだと思ふ。宮本武藏的やり方は確かに誤つてゐる。敵が組討ちと言へばこつちも武器を捨てゝ大手を擴げると言ふ氣持ちで居たい。勿論敵に卑屈であつてはいかんが。

背後に商大と言ふものを考へて活動する時我々は非常に神聖なものがある樣な氣持になる。學生の本分と言ふものは總ての講義に席を有すると云ふ事のみではないと思ふ。第二の國民としての心身を鍛錬しておく事も學生の本分だと思ふ。いや〳〵乍ら講義に出て居眠りをしないまでも上の空で聽いてゐては如何もならぬと思ふ。居眠りをしてゐてもよいから出席をした方がよいと言ふのは本を忘れ末葉に走つた考へ方だと思ふ。出席するからには充分身になる樣に聽いてゐなければならぬ。講義をされる教授連にしても只名前だけの出席者が數百人居るよりか眞劍に聽いてゐるものが數十人ゐた方が遙かにうれしいだらうと拜察する。もしさうなつたら講義に出るものがなくなるだらうなんて事は杞憂にすぎない、もしさうなら大學をやつて行く必要はなくなる。だから單に出缺を取るから出なければならぬと言ふ考へ方は間違つてゐると思ふ。商大の名を背負つて活動する。この事に我々は或種のうれしさを覺える。この氣持が大切なのだと思ふ、將來社會人として活動するのに、日本なる名を背後に持つて活動するのと同じであらう。我々は個人であると同時に商大生であり日本人である、と言ふ事は筧博士以前に於ても眞理である。

グラウンドに出たら蹴球部員は皆平等だと思ふ。上級生を上級生として尊敬するのは結構だと思ふ。たゞ單に上級生たるが爲でなく自分より何年か先に生れた人で自分より秀れてゐる點を持つてゐる人として尊敬するのである。但し之は平素の場合でグラウンドでまでこの樣に盲從的御機嫌取り的態度でゐる事は禁物だと思ふ。少くとも二三年前はグラウンドでは上級生でも何でも恰も喧嘩の如く取扱ひお互ひに張り合つてゐたものである。たとへ上級生でもさぼつてゐるものがあれば遠慮なく「しつかりしろ」とどなつた樣に記憶してゐる。遠慮してゐたのでは結局お互の爲にならない。グラウンドでは如何に張り合つてもユニフオームを脱げばさらりとして友人としてつきあつて行く。こゝに運動部員のうれしさがありむしろグラウンドで張り合ふ程親密になつて行くものである。之からも益々名手が入部されると思ふ。常に上級生に引づられてやるのでなく元氣の點ではむしろ彼等を引づつて行く樣にやつて欲しい。

僕が二年の時だつたか、當時の練習は猛烈にバツクとフオアードと張り合つたものだ。だからフオーメーションの時は實際「この野郎」と思つてやつた。今のフオーメーションはその元氣はない。お互にねらつてあいつをすつとばしてやらうなんかと考へてやつてゐるものは餘り居ない樣だ。俺みたいに氣の小さいものはその方が有難

いがそれでは實戰に役の立つ練習ではない。之からせい〳〵強引になる可く努力するつもりである。諸兄も益々強引になられん事を望む。ファウルにならざる範圍で。

長瀨さん初め代々の主將マネジヤーは馬鹿になつてやれといはれた。「馬鹿になる」と云ふ事は仲々六ケ敷い事である。充分によく考へて結局何も考へずに練習すると云ふ樣な事になるらしい。蹴球をやつて間違ひないと盲信してしばらくやつてゐるうちに蹴球の有難さが解ると云ふ意味らしい。實際練習中他の事を考へてやつてゐて は上達しない、無我夢中でやつてゐてこそ上達する。勿論練習以外の時は種々考へるのは有益な事である。練習が濟んだ時などに種々の點について意見を交はすのは最も有益だと思ふ。近頃電車の關係からか練習が終ると歸る事許り考へて我勝ちに歸る。お互に考へてゐる事が仲々通じない筈である。相互の考へが通じないから誤解が起る誤解はスランプの本であるとも云へる位だ。練習の終つた時が一番相談のしやすい時だと思ふ。

最後に蹴球部の美點は氣分の一致であると思ふ。皆が練習に出て一緒に語る事にあると思ふ。この點で時々は不一致を來しても終局的に一致す可きものである。いゝ加減な氣持で部に席を置いてゐるものがあると部の破壞の一歩である。その昔十三人位で固つて年中集つて話をし氣を一にしてやつてゐた時の氣持を何時までも我部の中に殘して置きたいものである。

世の中は何でもそうであるがベストを盡したら成功しなくとも滿足すべきだと思ふ。特に運動競技に於て全力を盡すと云ふ事は絶休に出來るものではないと思ふ。だから出來るだけ全力をつくすやうに努める可きである。敗戰の後には必ず大きな目で考へるとあそこをあゝしたらと云ふ事は浮ぶと思ふ。そして次にその缺點を直すと同時に他の缺點が目につく。恰も一國の政治における如く、完全に思ふ通りに何等思ひ殘す事なくやつたと云ふ事は出來ない。出來るだけ全力をつくせる樣にするのが平素の練習であると思ふ。よくベストをつくしたが負けたと云ふけれど、その言葉の裏にはもしあそこがあゝだつたら勝つたらうにと言ふ後悔は殘る。なるべくこの後



悔を少なくする樣にしたい。試驗の場合にも似た氣持のする事が有るかもしれぬ。充分に準備して、又答案も最善に書いたつもりが檢査官の方が良い加減に見たか又は其他の事で案外惡い點をつけられたとする。この場合には致し方ないと思ふ可きだと思ふ。自分が眞に出來る丈けの事をしたならそれだけで滿足す可きだ。答案を書くのは自分の仕事だが調べるのは彼等の仕事だから。併しベストをつくすのは仲々六ケ敷いものだ。

去年の帝大戰の時我々は前々からよく一緒になつて練習して來た。而るに彼等はまとまつて練習したのは一週間前位からださうである。だのにその結果は負けた。全く不可解な事である。結局彼等一人々々が我々よりずばぬけてうまかつたか我々の練習法に不備があつたかどちらかである。之は前者の方だと思ふ。口惜しいけれど、だから練習しない方が良いと云ふのは間違つてゐる。もし我々が練習をしなかつたらより慘敗したらう。よく考へて練習する外はないらしい。そうでないと絶對に彼等に勝てぬ事になるから。どうも練習の結果が試合に完全に應用出來ない全力が盡せない。何とかうまい方法はないものだらうか。結局各自よく考へて練習す可しと云ふ外はないらしいが。

近頃よく精神力と云ふ言葉を聽く。或る大學の運動部では座禪をしたさうだ。併しそれも一方だが練習の時に養ふのが一番よいらしい。座禪と云ふ形式をふんでもその心がなければ駄目なのだ。その心があれば練習又は日頃の立居振舞の裡に充分養へるものだと思ふ。

結局種々考へて見ると何事も當人が心から肚から考へてやらないと能率は上らない。他人に膳立をしてもらつてゐてはだめだ。各自個人的に氣を付けないと駄目だ。目上の人に云はれる事を只やつて行くなら機械と同じで人間の機能はなくなる。遲時き乍ら近頃つく〳〵悟つた之から皆と一緒にこの「各自肚を極めて」やつて行く事にしよう。以上は最近に特に自分で氣をつけてやつて行かうと思ふ事である。

# 自分に言ひ度い事

本一　後藤虎雄

「豫科の部員と本科の部員との間に、どうも未だ遠慮がある樣だ」とよく言はれるのだが、言はれる度に此の言葉は自分にも非常に痛く響くのである。サッカー部に入つてから既に三年間、今更遠慮でもあるまいと何時も自分に云ひ聞かせるのだが、矢張自由に、拘はらずに、振舞ふと云ふ態度がとれぬ場合が多い。別に遠慮してゐる譯ではないのであるが、上級生とか目上とか考へる故か固くなる時があるのだ。

例へばレギュラーの練習に自分が拔擢されて、加はるとそれが單なるフォーメーションであつても、何となく固くなつて周圍の人とのコンビネーションがスムーズに行かない。況んや試合に於てはその感が深い。大切な對校試合に於て、チームの中に、此んな不調和があるならば恐ろしい缺陷が生ずるのは當然の事であらう。

之は唯自分一個の場合であるにせよ、我々が蹴球部に入つて同じ目的に向つて出來る丈の努力をして行くと云ふ以上、部員相互の親睦を計ること、否更に進んで理解に迄到達する事は我々にとつて最も必然的なものでなければならない。即ち、部員相互の間に尙多少の遠慮が存するなどと云ふ事實は同じ部の中で生活し、同じ目的に向ひ、同じ精神を体して行くべき吾々にとつては不可解極まる事實ではないか。團体生活をして居ると公言する我々の恥辱ではないか。と何時も自分自身を叱りつけるのである。我々は自分の殼の中に閉ぢこもつてしまつてはならない。自身の赤裸々な姿を相手に見せるべきだ。さうして、お互に相手を本當に理解し盡し、お互に影響し合ひ、感化し合ひ、より全きものに向つて進み、同一の目的に向つて驀進してこそ吾々蹴球部員としての意義があり、又青年としての眞の青春を味ひ得るのである。我々相互の融合一致、切磋琢磨と云ふ事は我々に許されたる大きな特權ではないか。

要するに、是からは蹴球部の本當の力を示すべき時であるから各々が本當に融け合ひ、理解し合ひ一つの力强い彈丸となつてゴールに飛び込まうではないか。



# 若葉の蔭で

豫三　二階堂晴三

誰が何と言はうが俺は生きてゐるのだ。

俺は一個の人間だ、俺には俺の自由がある。

馬鹿だと罵りたくば罵つて呉れ。

逃避だと嘲ひたくば嘲つて呉れ。

俺は、己が死の瞬間まで俺の信念に、自由に生きて行きたいのだ。

俺は愉快だ、悦んでゐる。今が 今が 嬉しいんだ。

★　★

小平のやうな僻陬の地にゐると、こんな事しか考へられぬのも、我が生活のあらゆる急轉換が兎に角入部以來今日に及んだからかも知れない、この文は諸先輩からは或る小さき者が伸びんとする一つの段階にある事を知つて頂くとし、豫科一年生諸子には、部員の一がかゝる行き方でゐるといふ事を以て參考にまでして貰つても良いし、不馴れのペンの走るまゝに斷片的に書いて行く。

さて思ひ出して見ると、一年の時も二年の時も、今でも唯その繼續に過ぎないが、無意識にボールを蹴つて過ぎた樣に思はれる。これといふ變つた事も起らず、足を傷めた時は見學した。然し練習を無理由で休む事は、學課を休む事よりは確にひどく良心を咎められた積りだ、他の部員がどれだけ自分を殺して練習に、部生活にある事を敢てしてゐる所以を考へたとき理屈を云ふ前にどうしても練習にだけは出ようと思つた。一年生二年生と無意識裡にボールを蹴つた事それ自身は、何と云つても動かせない事實で、「自分は一年間はボールを蹴つた」と云ふ事だけは感覺してゐるらしい。二年間の取得は先づこの位だらうか、さりとてそれ程不足にも思つてはゐない。

では蹴球を何故やつてゐるか、蹴球部が苦しんだ時代我々が窺知しやう、体驗しやうとしても既に過ぎ去つた苦闘の時代には、樣々論議された題目だ。本三の方等は隨分思出深い事と推察するが、今日の自分も差當つて訊ねられたとすれば、先づ第一にかう答へる「ボールを蹴る事が好きだから」と。蹴球部に就ては、あらゆる事は

言ひ盡されてゐる。しかしそれ等もボールを蹴ると云ふ所に總て出發點を持つてゐるのだ。ボールを蹴る事が嫌ひでゐるやうな人はない事と思ふが、余り好まないやうな人は無理しないで何か別に或るものを求めねばならないと僕は考へてゐる。綾球であれ、速球であれ、インステツプに完全に當つた時の快さ、それを得るまでは容易な事ではない。だからボールを蹴る事を好まぬ人は何か別に求めなくてはならない。

商大蹴球部員は色が黑いので有名だと云ふ。別に何も感ずる譯ではない、必然的にさうなるからには、現實として受け容れるのだ。小西さんのやうな色を見るとき、吾人の出發點はもつと强化される。唯黑いと感じた時、次に何か感じたら、それが又ボールに對する氣持を導いて呉れるやうな氣がする。色の黑白は先天的だ、何も感じない、くだらないとする人は又その行き方がある。何と云つてもボールを蹴る事だ。一年、二年、三年、長く蹴れば蹴る程味はどこからも湧いて來ると觀じた。

學校の中から世間、見渡せば限り無い人間がうよ〳〵してゐる。學問を生命として生きる人、學問を鼻にかける人、人類幸福に命を捧げる人、刑務所にゐる囚人、それ等の人が自然の推移と共に、僅々五十年ばかりの命でこの世を去つて行く一つの事實として死ぬと云ふ事に於ては、誰もが苦しさを持つてゐる。畢竟個人は自分に歩むより他は仕方がない、今自分のしてゐる事に漠然とでも滿足を感じてゐたら少くとも幸福だ。尙その所以を知つた時はその人は極樂にゐる人だ。ボールを蹴つて土まみれで、それで悅んでゐるものは、うよ〳〵してゐる人間の中で不幸を知らない部類に屬する人だ。自己を僞らねばならない生活を持つてゐる人は辛いだらう。然し自由な立場にあるときは早く清算すべきだ。豫科から本科へ外觀から云へば、圓帽が角帽になる位のもので、その人は何時までもその人だ。自分の考へに不正直な人は卒業しても心殘りがするだらう。

何はさて置き、勝つた時は、自づと眼頭が熱くなるし負けた時だつて同樣だ。それで蹴球してゐるのだと云つても良い。勝つた時負けた時僕の体驗した眞新しいもの



は、「純粹」と云ふ言葉だ。僕は或る信念に歩む人、卽ち人間らしい思惟を續けてゐる「純粹な人」には抱きつき度い樣な感情を持つてゐる。その純粹と云ふ意味があの刹那にほのかに囁いて來る樣だ。「あゝあ、無意識にボールを蹴つたとは云へ、蹴球部に入つて來た事は何よりの事だつた」と思ひ込むのもその時だ。

「個と全体」とか、陳腐極る例の「勉强と運動」の事に就ても、我々は今の範圍に於ては少くとも自由なのだから矢張り自己に僞つてはいけないと知つた。何の先生でも說く如く、學校は學問の道場だ。我々はそこへ入門してゐるからには、學問しなければならないつとめがある。他人に强ひる必要はない。我々は何に當らうとグランドに立つた時の氣分と寸分違はないものでゐたい。「日常生活を推知するには、その人のグランドに立つた時の一擧手一投足に依り容易だ」と云ふ言葉も深い意味のあるものではなからうか。

とまれ、蹴球部は大きくなつたものだ。四十人も練習してゐる光景は、部誌一號二號を手にして、實に今昔の感深いものがある。我々は一部で優勝しなければならないのだ。大日本選手權を握らねばならないのだ。一橋の文化も、力を得る事は必定だ。總てが調和するのもその時であらう。

× × ×

浮々と筆まかせ、思つた事を唯書いた。淺い狹い個性が、宙に懸つて彷徨つてゐるのかも知れない。しかし僕のまはりは、今若葉が滴るばかり、雨空は靜かに晴れて、淨雲が和やかに流れて行く。郭公が啼く。そよ風は綠の香を籠めて木の間を縫ふ。消えて去る雲の跡には靑い空が淸く澄む。總てが今初夏の陽光に照らされて、渾然融和して靜寂の調和の世界だ。この天地に、暫しの後にボールを蹴る音が傳る。

限りなく續く空の涯に、伸びて行くこの土の彼方に我々の明日を何物かが待つてゐる。我が搖籃の蹴球部に心から愛着の念を覺へるのは今だ。實に心底よりの落ち着きを得た。これからは只管向ふ所に行くだけだ。この秋の成果を祈りつゝ。

（一一、六、六）

# 感じた事

豫三　菅瀬十朗

人は何事をなすにもサブジェクチヴにしなければこの世の中は住みにくゝなります。自分を主にするのであつてオブジェクチヴにしては駄目です例へばAとBと居ます、この二人は友達です。Bはいつでも Aにおごつてもらつてばかりゐて、金をいつも持つてゐません。菓子を食ふ場合には十あるとするとその中七位Bは食つてしまふ、手の早い男です。かういつてみるとBはAにとつて何の利益もない男です。然しAがBにつきあふのは、何もBから利益を得やうとしてつきあつてゐるのではありません、唯Bとつきあつて愉快に感ずれば好いのです。又甲・乙二人居るとします。甲は乙に活動へ行かうと誘つた。その時乙は明日試驗があるとします。その場合に乙は試驗の勉強するより甲とつきあつて一所に活動へ行けば試驗なんてかまはずその日は甲と一所に活動をみて樂しく過すのであつてサブジェクチヴであり、つきあひのよい男になります。もし乙が試驗があるといふので行かないで試驗に好い成績をとらうと勉強するとオブジェクチヴな男になつて、目的を主にするやうになります。かういふ方は面白くありません。又小さい女の子が人形を抱いて（人形ぢやなくてもふとんでもまるくして人形のやうにして）その人形に話かけます。「〇〇ちやん、おなかゞすいたでせう。お菓子をあげませうか」なんて言つてゐることがあります。こんなのは自分が食べたいから、こんな事を人形に話しかけてゐるのです。つまり人形も自己の一部に入つてゐるので、自己を主としてゐるのです。

蹴球をするにもこのやうに自己を主としてサブジェクチヴにやつてゆけば樂しく六年間やつてゆけると思ひます。運動部へ入つてゐれば就職の時、何もやつてゐない人よりも好い所へ行けるなんて考へてやるやうな、目的を主としたオブジェクチヴなやり方はいけません。ボールを蹴ることをその瞬間々々に樂しんでゆけば好いと思ひます。



# 所感

豫三　狩森正雄

僕が蹴球部へ入つてから既に二年の歳月は夢の如く流れ去つた。豫科の最高學年になつてみると、一・二年の時には別に氣にも留めなかつた事をも考へる樣になつて來る。兎に角豫科蹴球部の盛衰は一に我等の雙肩に懸つて居るのである。それだけ我々の責任も亦重大である。豫科はオール一橋の原動力なのである。豫科の意氣盛んなる時は、オール商大の意氣も盛んになり、豫科が完全に一致する時、商大は完全に一致し勝利の榮冠は頭上に燦として輝くのである。商大チームを強くするも、弱くするのも一に豫科に負ふ所大である。

僕等には技術は勿論必要だが特に意氣と熱が必要である。豫科の間は理窟なんか不必要である。馬鹿になり切つて、只我武者羅に本科の指導者達に從つてゆけばよいのだ。そして一致團結し只意氣と熱とを以つて他チームにぶつかつて行けばよいのだ。

僕等には蹴球部の熱と意氣、感激の生活、これだけで滿足なのだ。負けて悔涙に咽び、勝つても嬉涙に咽ぶあの若人の感激こそ實に我等の求むべきものなのではある。「涙」それが本當の僞りのない心を表はしてゐるのだ。涙程尊いものはない。涙を流して、お互に慰め勵まし合ふその感激、友情をこそ我等は求めてゐるのだ。涙を流してお互に語り合へる友達が蹴球部員以外にあるだらうか？　僕はこんな立派な蹴球部に入つて本當に心から感謝してゐる。

今の豫科は元氣がない等の言葉を耳にするが、これは全く僕等の責任だと誠に濟まなく思つてゐる。豫科部員がもつと元氣を出すためには、本當に完全な一致團結が必要である。もつと豫科一・二年の諸君が僕達に一身上の事、家庭の事など何もかも打明て僕等を兄貴とも思つて話相手、相談相手としてほしいのである。意見などがあればどし〳〵言つてほしいのである。かくして胸襟を開いて語り合ひ、眞情を吐露して、豫科が完全に一致してこそ、プレイの上にも表はれ、オール商大が一致し、

勝利は輝くのである。

今や豫科リーグは目捷の間に迫つてゐる。大いに奮起して蹴球部のために努力しやうではないか。豫科がオール一橋の原動力だといふ事を忘れないで。

兎に角豫科は意氣と熱だ。ファイティングスピリットだ。何糞の精神だ。只それだけでいゝのだ。理窟なんかはいらないのだ。馬鹿になり切つて一意ブレイに專念すればそれでよいのだ。

吾人屁理窟を知らず、幸にして元氣あり。

# 彼岸

豫二　吉澤貞雄

私は中學時代から蹴球には特別の愛着を感じてゐた。蹴球を見る者は誰でも感ずるであらう所の、なんとなく漂ふ、堅實で地味な雰圍氣はこの愛着を益々深くして呉れた。受驗中「パスすれば、存分に球が蹴れる。」と思ふ事が自分が商大突破に懷く憧憬の一つでもあつた。端なくもその、チャンスを掴んだ私は、蹴球部が旭日の勢で一部に躍進したといふ事實よりも、部内の空氣が豫想外に眞劍である事に二重の喜びを感じた。

毎日グランドへ出て球を蹴つてゐる間、又上級生の一寸した會話などに、折に觸れ眞劍な氣分を感ずる度にどんなに嬉しく、又氣を強うしたかしれない。

斯くして、私は幸福な環境に一年間球を蹴つて來たが、今振返つてみると、只のんべんだらりに引きづられて來たといふ感じが深い。これは最下級が知らず／／の裡に陷り易く、又落ちても自覺し難い穴かも知れない。然も私はお多分に洩れず、この穴の中へ落ちこんでゐたのである。

私は蹴球部に漲つてゐる眞面目な雰圍氣を感じた。そしてお目出度くなつて、この眞面目な潮流に身をまかせてゐたのである。私は、積極的に自分で漕いで彼岸に驀進する事を知らなかつた。いや忘れてゐたのである。

潮が目指す彼岸に向つてゐる間は、それでいゝかも知れない。然し潮が停滯した場合どうするか。いや潮が逆に流れ出す事も考へられるのである。



さうなつたら、この舟は惨である、獨力で進む事は出來ない舟は逆流にまかせて彼岸より遠ざかるのみである。自分は漕がなければならない。幸にして今は潮は順である。この潮に乘る事に滿足せず、更に滿身の力で漕いで／／漕ぎまくり一刻も早く彼岸に到達する樣心懸ける事こそ必要なのである。

されば最も強い漕力は何か？　蹴球部なる大船のために出來る限り自分を殺してゆかうとする精神ではなからうか。これが所謂「蹴球部の精神。」ではなからうか。

そして、部員全部がこの精神を完全に、体得した時こそ、商大サッカー部が彼岸に到達したと言へるであらう。斯く考へると彼岸はまだ／／遠い樣な氣がする。吾々は漕がねばならぬ。へばりに負けず、自分を殺して、只漕がねばならぬ。漕ぐにつれて入江に居て彼岸近しと己惚れて居た舟が大海に出て眞の彼岸を遙か彼方に望む樣な悲劇も起るかも知れない。然し吾々は漕がねばならないのである。

自分は、この度二年に進級した。その事自身はなんでもない事である。然し自分は、今まで引きづられてゐたが新に白紙の新一年生を迎へてこれを引きづつて「蹴球部の人」にする義務を負つてゐる事を考へれば大いに考へねばならないのである。

自分はもつと／／積極的にならなくてはいけない。

# 感想三題

豫二　高橋道太郎

自分は最近「足技のみが蹴球ではない。」といふことが、解りかけて來たやうな氣がする。

× ×

いやしくも試合をする以上、「人事を盡して天命をまつ」などは卑怯な言ひわけに過ぎぬと思ふ。

× ×

僕は蹴球が好きだ。

# 初めて蹴球をやつて

## その一

上級生と下級生とが混然として融合した力強い運動部それは蹴球部だ。殊に上級の方々が私達を親切に御指導下さるに非常に感銘致しました。唯、若い我々學生ですからもう少し元氣を出してやつて行きたいと思ひます。と申す私が最初の練習で熱を出してしまひましたが、久しぶりの運動だつたからです。之からも熱なんか平氣で一生懸命やつて行きます。

——豫一　鈴木英二——

## その二

僕は今蹴球部に入つたことを非常に嬉しく思つてゐる。勿論練習をするとへばる。然し練習を終へて部室で先輩の人々と少しの間でも笑談を交へる時の愉快な氣持、蹴球部は大きな家族だ。この樣な明朗な團結を持ち又斯くも眞摯な氣持で覇業に邁進する部は容易に得られないだらう、と思ふ時自分の最初の見解の間違ひでなかつたことを喜ばしく感ずる。此の樣な立派な部を作り上げられたる先輩諸兄に對して、私達は眞面目な氣持でやらなければならない。

——豫一　茂木利孝——

## その三

蹴球の練習……現在の自分の生活の中心は之より他にはない。否、將來六ケ年間の生活の一大中心だ。私は商大合格と同時に蹴球部へ入部したことを心より歡んでゐる次第です。まだ部生活に余り馴れないから、之といふ特別の感想は持たないが、感じたまゝに卒直に申しますと、

一、一般に選手に元氣がないこと。例へばチャージが猛烈でないこと、ボールを見捨てゝ追はないこと、休當りをしないこと。

二、練習中は上級生下級生の區別なく互にプレーに就て遠慮なく意見し合ふこと。之は重大なことだと確信します。

三、昨日熊澤さんが忠言された如く、本科の人は氣のついた事はどし〳〵怒つて戴きたい。さうすれば發憤するでせう。

下らぬ事を羅列しましたが、何卒お赦し下さい。私は二階堂さんの如く熱と意氣、血と涙を以て蹴球道に邁進することを固くお誓ひします。

——豫一　片山光夫——

## その四

感じた事

一、部の人凡て明朗快活なる事。

二、お互に融和して常に和氣靄々なる中に強き團結の精神のこもつてゐる事が伺はれる。

三、他の部に於て見る如き、強制的壓迫的行爲は些かも見受けぬ眞に樂しい部であると思ふ。

四、僕等新入生に對して誠に至れりつくせりの親切であること。

希望すること

一、時々懇談會の樣なものを開き一致團結の精神を養ふ必要はございませんか。

二、應援歌を作つて意氣を擧げてはどうですか。

——豫一　丸山好勝——

## その五

僕のサツカー部から受けた第一印象は部全体の空氣が張切つてゐるといふことでした。と同時に物足りないと云ふ感じを抱きました。それは活氣がないといふ事がさう感じさせたのかも知れません。

——豫一　大上戸幸登——

## その六

「蹴球部はよい部である」と言はれてゐますが實際その通りで本當に喜んでゐます。上級生の方も皆私達新入生に親切にして下さいますし、一軍に漲るスピリツト、後輩鞭韃の熱意には頭が下りました。私もこの部で磨かれて立派な人間になる樣に努力します。

——豫一　渡邊　健——

## その七

對早高の試合を見て本當にこの部へ入つてよかつたと

いふ事をつく〴〵感じました。今まで入部したものゝ、部の精神を摑む事が非常に困難だつたのですが、その惱みを一掃させて呉れました。

私が商大へ來る動機がそも〳〵蹴球が目的だつたのです。然しそれは蹴球といふものを單に運動競技といふ方面から見てゐたのでした。それ程蹴球を愛好してゐます。所がその上に、運動部といふ精神的に考へる要素が加つた譯です。私の商大へきた目的も豫期以上に達せられたわけです。

私の希望としては技術方面の練習をみつちりやつて欲しいのです。キツクの機會をなるべく澤山作つて頂きたいのです。

——豫一　櫻井孝次——

（話の泉）

○十年度豫科委員長なりし熊さん或日食堂で部費滯納のオーソリチー虎さんが旨さうにケーキを食べてゐるのを見つけ「ケーキがよささうだね。ついでに部費をたのむぜ」と言つてゆくと、虎さんニヤ〳〵ッと笑つて舌うちしながら「部費は出さねど高揚子」にさすがの熊さんもギヤフン。

○多摩湖線も此頃少し頭がよくなつたので、本科生が時々引かゝります。森田君もやられました。國分寺の驛員の前でたゞ彼はエヘラ〳〵。それでは話にならん所を鈴木君がうまく？　まとめたです。

○狩さんが驛夫をおどかしたことはあまりにも有名ですなあ。

○勝負事なら何でも蹴球部は好きです。マッチの競技なんてのまである。寛ペイさんは斯道ではプロフエショナルのNO1である。

# 送別文集

## 送別之辭

一年又一年。積み上げられて來た汗と血と涙の結晶。久しく望んで止まなかつた一部での決戰。自他共に最大の期待と希望との裡に始まつた昭和十年度の建設も終つて、今年も亦我々の蹴球部から水島、神野兩兄を送り出す。實に感激無量である。

飛躍又飛躍。基礎工作の時代を經て漸く完成に近づかんとする時に際し、全軍を一の坩堝に化し得た水島兄。周到なる用意、精密なる計畫、事に當つて爲さざる所なき神野兄。部の非常時に當つて兩兄を失ふ事將に部員一同の痛恨である。

顧みれば四月。春季合宿以來、細心の企圖の下に始められたリーグ第一部への挑戰準備も何物をも敢へて恐れざる水島主將、周到何物をも餘さざる神野監督の下に部員一同一塊となつて唯秋へ秋へと進んだ。然し始めて体驗する世界には我等の想像に絶する障碍あり、險岨横はつた。よしんば技術の拙劣あるとも、我等には兩兄により培れたる理解、信頼、感謝とから成る絶大なる團結の力

があつた。思はざりき!! 建設の第一歩にて躓かんとは。

リーグ第三位。之も必らずしも夢ではなかつた筈である。然し我々は立教戦に於いて部の一大事を見た。この一戦は我々に何を教へたか? 過渡期々々と叫ばれる蹴球部から今愛部心の權化たる水島、神野兩兄を失ふ事は動もすれば我々を不安の淵に陷れる。然し兄等の長い蹴球部生活を通して殘された多大の足跡は強く〳〵部員の胸裡に生きて居る。

幸ひにして部員一同健在なり。我等一同責任の重且つ大なるを痛感し、兄等の努力、精進を生かさん事を誓ひ、唯部の建設に邁進せん事を誓ふ者である。

最後に兄等波浪多かるべき大洋に出發するに際し、先つ健康を希ひ、一段の飛躍を期待して止まないものである。

昭和十一年四月

昭和十一年度 主將

淺枝彦太郎



# 神野・水島兩兄を送る

本二　大掛隆久

昨年三月二階堂、後藤兩先輩を送つて早や一年は過ぎ去り、此處に再び神野、水島兩兄を、吾が商大蹴球部より送るに當り萬感胸に迫るの思ひを禁じ得ません。

兄等が目出度く螢雪の功を積まれ、光輝ある學生生活を終へられ卓き人格と極み無き學識とを兼ね備へられ、勇躍實社會へ巣立たれる事は御同慶の極みであり、又吾等は均しく兄等の御將來に對し、非常な期待を有ち、絶大なる祝福を捧げるものであります。

顧れば吾が商大蹴球部が未だ四部にあつて重なる悲運に打ち挫がれ、存亡の危ふきにあるに際し、長瀬先輩の偉大なる努力に依つて悲運は見事克服せられて輝かしい進展への基礎は確立せられ、續く二階堂、後藤兩先輩の涙ぐましい奮闘も報ひられ、長年の希望であつた一部躍進は遂に實現し、此處に吾々に新しい世界が繰り擴げられたのであります。

「賣家と唐様で書く三代目」逆境に處するよりも繁榮に處するに難い事は否み難い事實であります。部が順調一路を辿るの時に臨み、兄等は動もすれば弛まんとする吾等の心を引締め、始めて踏む檜舞臺に萎縮せんとする心を奮ひ立たせ、事に處するや愼重、機に臨むや果斷、小事を忘れ高遠なる理想に邁進され、以つて一意專心部の發展に盡力せられ、此處に三代に亘る部の基礎は確立されるに至りました。

昨シーズン怪我人續出し幾度か危機に直面し乍らも、能く之を克服し得た事は、どうして單なる偶然として看過し得られませうか。

時既に三月、吾が蹴球部の柱礎たる神野、水島兩兄を送るに當り惜別の情を禁じ得ません。

されど尙、淺枝、荒井、田島、角田、森田の諸兄健在なり。吾等專心本三の諸兄を補け一致協力兄等の遺訓を体し、兄等の遺された偉業を受繼ぎ、光輝ある商大蹴球部の歷史の一礎石たらん事を誓ひ、以つて送別の辭と致します。

（昭和十一年三月）

# 兩兄を送る

豫三　二階堂晴三

## 水島さんへ

初めて一部の檜舞臺を踏んだ我が蹴球部の主將としての最初の御挨拶は、あの本郷バーの二階と記憶します。後藤さんの紹介で立たれた時のあの顏――あのお顏が僕には思出深く描かれるのであります。

三月の合宿以來の春の練習、何時も秋の事ばかり心では考へられてゐるやうでした。さうして僕達豫科生として最も濟まなかつたのは、あの浦高戰の引分けでした。池尾君のシュートがなかつたらどうなつてゐたでせうか、何とも申譯がありません。

秋はサブとして、戰ひ振りを見せて頂きました。五試合を通じて、何時もおのが「つとめ」を意識されて鬪志物凄くされたプレイの中には、我々が學ばねばならなかつたものがあつたと思ひます。商大蹴球部が氣分で經らなければならない所以が益々以て分つたやうな氣がしました。立教戰に勝つたとき、神野さんと喜び合はれた光景は誰にも感慨深く思出される事と思ひます。

一部の學校として商大がどんな一歩を踏み出すかと云ふ大問題に、我々はこゝに第一年目の解答を得ました。これからは先輩として、常に我が部の動向に關心を持たれてゐる事と存じますが、我々が自分と云ふものと大きな蹴球部との間に、あるものを摑んで恥しからぬ部員となればそれで良いと考へます。

駄言を連ねて御挨拶にかへます。

## 神野さんへ

その昔、荒井さんが長瀨さんに一年落第するやうに申されたと聞きました。僅か二年間の交りが僕にもそれと同じやうな事を感じさせる今日、三年四年の交りにあつた諸兄には尙更の事と思ひます。

神野さんと申せば、少しばかり個人的關係になりますが、あの小倉を思ひ出します。長瀨さんを訪問した、神野さんと小西さんに僕の四人が一晩水たきを圍み、長瀨さんの心からの熱辯を傾聽した時であります。「神けんの今年の秋に對する苦勞に、小西も晴坊もベストを盡せ選手を奮起せしむるものはよりよきサブからだ」と長瀨さんの心に喰ひ込むやうなお言葉、一時間餘りの間感激の涙で一杯だつた神野さんの兩眼、あの晩は本當に感激の嵐に遭つたやうでありました。さうしてあの立教戰に勝つた時、この一年の苦勞で瘠せられたやうにさへ見えた姿を併せて見た時、サブの自分には必然的に胸を衝かれる思ひがしたのでありました。

秋の練習の時々、グラウンドに神野さんの笛の聞えないとき、本科の人に聞けば「神けんは東伏見に試合を見に行つた。」又「代田橋へ」等々。そして又合宿の時、何時も眠いのに早くから「起きようぜ」と言ひ廻はれる等、この一年の間でも數へ切れないものが僕の心には浮ぶのに、過去六年間を顧みて御自身ではその夥しい思出に微笑ましく母校を去られて行かれた事と推察します。

「何も心殘りなく出て行かれる自分はどうしてかうまで幸福なのだらうか、」と申されるお言葉の中に、我々は先づ來年を迎へる覺悟を求めねばなりません。來年も今年に倍して六づかしいと考へます。淺枝さんの下に、なすべき事に向つて邁進する積りであります。

學年末に當り一言以て、御別れの詞と致します。

（十一、三、十五）

# 水島神野兩兄の思ひ出

豫三　米山大三

水島、神野兩兄の事をぢつと考へてゐると色々な事を思ひ出す。思へば兩兄には隨分御世話になつたものだ。色々御厄介になつた中で最初の御厄介を今思ひ出して見よう。

僕が此の蹴球部へ入つたのは確かな月日は覺えてゐませんが秋のシーズンの終り近くでした。法政に勝つて二部で優勝した二週間程前であつたと記憶して居ります。當時は既に優勝も略々確定し、二階堂主將を中心に全部員ものすごく張り切つて居りました。痩けた頰、ぼう〳〵とした髪、ぎよろ〳〵光る眼光、等が連日の猛練習

を物語つてをりました。かう云ふ時に僕が極く輕い氣持で部に入つて來たのです。從つて僕の氣分と部の氣分と餘りピッタリ致しませんでした。何となく一人だけ皆から離れたやうな淋しい氣が致しました。皆が蕃聲をはり上げて歌つてゐる時も僕はどうしても一緒に歌ふ氣分になれませんでした。又丸つきりボールの蹴れない、体力の出來てない僕の練習中一番樂しみにして居たのは、ロングキックでした。しかしこの時間は非常に短く僅か二つか三つ蹴ると終つてしまふのです。ロングキックが終ると大概練習試合をやりました。この時は大抵見學してをりましたが、時に人數の關係で入れてもらつても、何も知らない僕は火の出るやうな試合に壓倒されて空しく突立つてゐるだけでした。他の諸兄が汗まみれ、泥まみれになつてゐる時僕だけろくに汗もかゝずにゐるのです一日の練習がすんで皆が務めを果した愉快な氣持でグランドを去る時、川で汗を落し又歌ひながら着かへる時蹴り足りない、へばり足りない僕は何とも云へない取りのこされた淋しい感じがするのです。試合を見てゐた時等には誰も居なくなつた薄暗いグランドで一人でボールを轉して居た事も度々ありました。そんな時自分で自分が可哀さうになつて泣きたいやうな氣持になりました。そして今考へても恥かしい次第ですが、部に對して非常に不滿を感ずるのでした。

或日いつものやうにすつかり冷えた体を溫めるべく試合の終つたグランドで一人で蹴つて居りました。その時何かの用で後に殘られた神野、水島兩兄が僕の樣子を見てキックの相手をして下さいました。兩兄ともはげしい練習にすつかり疲れて居られるのです。その上グランドはすつかり夕闇に包まれて居ります。それでも兩兄は一向疲れた御樣子も見せず、僕がへばつて止める迄練習の時と同じ氣分で相手になつて下さいました。少し良いキックをすると直ぐほめて元氣をつけて下さいました。どんなにそつぽに蹴つても氣持よく取りに行つて下さいました。すつかり暗くなつて兩兄は舊弓道場へ僕は部室へと分れる時「さよなら。風をひかぬやうに早く着かへろよ」と注意をして下さいました。その時の僕の感激喜しさはとても云ひ表せません。唯部室迄飛ぶやうにして力一ぱい走つて行きました。

一時ぐらついた僕は此の事があつてから急に部に對する氣持も變つて來ました。ゴールの後でボールをひろふ氣分も又試合にあぶれて見てゐる時の氣分も從來のとは全然違つて參りました。あのまゝで行つたら或は現在蹴球部に居なかつたかも知れません。今日蹴球部で眞の喜びを見出してゐる僕は厚く兩兄に感謝致します。

勿論こんな事は兩兄のなさつた偉大な業績に比べればその一分子の一粒子にあたるやうな事でせう。しかしこの事は立派に兩兄の誠意を物語つてゐるでせう。

兩兄の部のための御努力に對し、又僕一身上の御恩に對し、唯々部のためにつくす事を報恩感謝の道と思つて居ります。

終りに臨んで水島、神野兩兄の御健康をお祈り致します。

◇　◇　◇

# ヴアリエテ

本一　熊澤博文

## ——神野・水島兩兄に捧ぐ——

### プロローグ

或時王樣がお布れを出して申しますのに、言附け通りの仕事をやり遂げた人を姫君の婿がねとして迎へやうといふのでした。さあ腕自慢の若者共がワンサ〳〵とおしかけて行つたことは申すまでもありません。ところがどうでせう、誰もが悲觀した顏で歸つて參ります。中には王樣もいよ〳〵頭が狂ひなされたなどゝ申す者までございます。だん〳〵話を聞いてみますとそれも無理がありません。實は仕事と申しますのが笊に水を山盛りにしろといふのでした。王樣の御殿の庭には古井戸がありまして鐵鎖のつるべが掛つてゐましたが、その井戸の水を全部汲み盡したところで笊に水のたまらう筈がございません。しかもそれを山盛りにしろとは本當に王樣は氣でも狂つたのでせうかしら。所が此處に一人の青年が居りま

した。彼は毎日〳〵人々の嘲笑をよそに笊に水をあけて居ました。五日もたつと井戸の水はなくなつて參りました。勿論それだつて笊に水のたまりやうはありません。然るに、最後に、粘土まぢりの濁つた水をあけますと、水の流れ去つた後に何かピカ〳〵光るものが殘りました彼が驚いて手にとつてみますとそれは金の指輪ではございませんか。それを傳へきいた人々は始めて王樣の御布れの深い意味を悟ることが出來ました。

書き足すまでもなく、その指輪は彼から美しい姫君のくすり指にはめられたのでした。

## I

學校は就職のための手段ではない。實際生活そのものであり、己が活動する準備の生活であるのだ。即ち學校生活は自分が社會に對して如何なる態度を取らんとするか、その態度を學ぶべき生活なのである。それは頭の中だけでは考へられない。頭で考へたものといふのは、實生活に比して實に貧弱な賴りにならぬもので、實際に活動せんとする時、口に出して他に示さんとする時、何ら役に立たない事を痛感するのである。日頃から考へて得たことが實際に行へるや否や、己の頭で考へたそのまゝに行動し得られるや否や、この準備生活中に充分檢討してみなければならない。

## II

數學を嫌ふために數學の不必要を言ひ、英語を嫌ふために英語の廢止を說く人を屢々見受ける。さういふ人はパンが嫌ひならパン食の廢止を言ひ、ミルクが嫌ひならミルクの不必要をさけぶ人だ。衣服の美醜をいふ人は未だ寒さを知らぬ人、食物の旨い不味いをいふ人は未だ飢ゑを知らない人、學科の好き嫌ひをいふ人は未だ無知を知らない人だ。

## III

昨秋來の學園の紛爭も愈々落着し、將來の邁進を神前に誓ふた。之に就ては種々論ずる事もあらうが、今一方面から觀察して、自分は斯う言ひたい。即ち今までの一部の人々のやうに、運動する人が勉强する人を賤しんだり、勉强家が運動家を馬鹿にしたりする樣では眞の肅正



が出來るものでない。學園を愛し眞の學問の樹立を願ふ者は自分のみではないのだ。眞の學問をする人の態度は何事に對しても大きな腹を以て眞摯に追求するのでなくてはならぬ。

## IV

眞の學問といふ樓閣は人格を土臺としてその上に築き上げられたものでなくてはならぬ。而もそれは住むためのものでなくてはならない。土臺が人格——立派なる人格である時は、當然住まずには居られない樣なのが建てられるのではある。否！ 立派な所に住みたいといふ欲求に迫られて建設するのでなければならない。

## V

眞摯にやる時は何事をやつて居やうとその人の人格は其處に現れてくる。溜をかつがうと、ボールを蹴らうと本を讀もうとその人の人格はそこにある。ゲョエテの如く、何をしようと決して後悔をしない。皿を造らうと詩を作らうとゲョエテはゲョエテだ。といふその氣持である。

## VI

分を守らねばならぬとか、本分を盡さねばならぬとかいふと、一寸拘束された不自由な氣持になる。然し自分の思ふまゝに振舞つて而もそれが程度を超えないならば却つて自由なことであらう。心の欲するまゝ、何事を行つても少しも分を超えない。この境地は孔子も六十にして初めて到達出來た所だ。

## VII

ボロを着てゐても貴族は品で解る。ニュートンが林檎の落ちるのを見て地球の引力を發見した。それは決して偶然ではない。今まで吸收してゐた彼の種々なる物理學的知識の大なる蓄積が、林檎の落下をきつかけにあの大發見をなしたのだ。林檎の落下は偶然にちがいないが、發見は彼の常日頃から頭を離れなかつた思考研究の賜である。

外人のスポーツと日本人のそれとは大いに異る。日本人のスポーツは苦しみの中にわざ〳〵己を突き落してそこに樂しみを見出すといふやり方で、外人の如く單に体

育のためとか、面白いからとかでするのではない。といふが之はスポーツの所謂同化だ。外國から入つてきた色々なスポーツをそこまで持つて行つたといふのは、それまでにする偉大なる日本人の力があつたからである。日本人の力とは日本精神である。日本精神は何千年といふ古昔からの蓄積である。

平生文相がスポーツによる精神の陶冶といふことを強調し始めたが、それは二、二六事件を契機として建てられた廣田内閣に依つて流行的に生れてきたものでないのは勿論である。

Ⅷ

或教師から「電氣とはどんなものか知つてゐますか」と問はれた三人の生徒は、何れも自信ありげに「えゝ、知つてゐますとも」と答へたが、Aは光を出す電燈を思ひ浮かべ、Bは觸るればビリツとくる電池を、Cは大規模な發電所の光景を夫々頭の中で考へてゐたのだつた。

Ⅸ

自分より上と思はれる人の言ふ事は反省して取入れるのに努力するが、自分より下と思ふ人の言は、實際得る所があつても之を取入れやうとしないのが一般の人間だ下の人の言葉や行爲からも美點を見出して何かを得るといふ事はなか〳〵尋常の事ではない。上の人の言ふ事をさへ良いかげんに聞きながしてゐるなどゝいふ人間は論ずるに足らない。

Ⅹ

盲信！　危險な事ではあらうが、一面又何と嬉しい言葉だらう。盲目滅法たゞ〳〵信ずる。馬鹿になつて信ずる。嬉しいことだ。我々は少くとも共同團体の一員としてその指導的位置にある人には、絶對の信頼を置かねばならぬ。偶々利巧な疑ふことの上手な人間がゐるから調和がとれなくなる。凡ての調和は信の一つに基いて立つてゐる。盲信は盲從となつて現れる。自分は盲從といふ言葉を愛する。善いか惡いかは最後まで解るものではない。死ぬまで解るものか。指導者が右と言つたら自分は絶對に右する。左と言つたら左する。自分はそれが大好きだ。一旦間違つたら取返しのつかぬことになるかも知



れない。然しそれでなくては大きなことは出來ない。世界に誇る強さの皇軍兵士は、その場になるまで、自分達が何のために何の方向へ行軍してゐるか知らずにゐる。

## エピローグ

タゴール翁「美と眞とは人間に依つて創造されてゐるのだ。」

アインスタイン博士「否、然らず。美と眞とは人間とは獨立に客觀的に存在してゐる。」

翁「では訊ねる。客觀的存在の美、眞を如何に說明するか、斯る美と眞との存在する理由は？」

博士「それは分らぬ。たゞ自分は客觀的に存在することを信じて疑はぬ。」

翁得たりとばかりに「そら……貴方も信じて居るだけではないか。」

博士微笑して「私は貴方よりも宗教家でしたね。」

——昭和十一年五月三十日雨の夜——

### 話の泉

◇重見委員長なか〳〵老巧になつたです。春の會では後から〳〵酒が絶えなかつたです。お陰で大分大勢ノビたです。

◇小西君の黑さは實に有名です。だからでもあるまいが夜更けて交番の前に立たされたこともあつたです。別に巡査はエチオピア人だとも思つて居なかつた樣だが。

◇多年でもあるまいが、長い間圓滑にゆかなかつた專門部との仲も、朗らかに結ばれて一稿サッカーの新しい力が延びてゆく、といふことは嬉しいことだ。

◇始めは三漫才だつたのが、今は部員みんな漫才だ。萬才々々と喜んでのみ居てよい現象かしら。

◇今の本科生はみんな頭が惡いです。頭の一番よいのは豫科二年生？　だから豫科二の話は本科生にはピンと來んですよ。

◇寮で合宿が出來るやうになつた。嬉しいことだ。有難いことだ。

豫科

新二年生

# 『名物男』

作者　田根宇麻

吾が商大サツカー部に於て、〃ヒゲ〃の事を話す場合に直ぐ頭にピンとくるのは、府立五中出身の高橋道太郎君である。中學時代に少し體を惡くしたさうだが、そんた事は屁とも思はず、春風に彼の鬚をなぶらせて入部しなるその意氣や正に絶休である。彼の鬚は熊さんのよりはピンと張がある。それだけ男性的である。鈴木さん達が〃男性NO1〃と云つたのも無理からぬ事だ。併し殘念な事に彼のヒゲを長くしたのを見た事が無い。思ふに春風位にはびくともしまい。先づ彼のヒゲを動すには、風速十米位のが必要であらう。だから武藏野名物の强風が吹く時には、流石の彼も、オーバーの襟を立てねばならぬ。でないと抵抗が强いから、ポツキリといかぬと保證は出來ないからである。（マサカ）

此の事を心配してかしないでか、彼は常にビツタリそつてゐる。江戸の眞中に住む紳士としては當然な事であらう。ショボ〳〵の營養不良の如き奴を生やして、天神樣と間違へられるのとは、譯が違ふのだ。（失禮）

彼は紳士道德上合宿にも日本カミソリを持參する。ミス・ヘツドした場合にボールをブスリとやつては相濟まぬといふ眞に美しき心根の發露である。從つて合宿で三日目毎には必ずザク〳〵と刈り入れる。安全カミソリでサラ〳〵やるよりは遙に勇壯である。又彼はカミソリの刄を損ずる事を常に歎いてゐる。うつかりすると、刄の方をそつて了ひはせぬかと傍で見てゐてもハラ〳〵する



位だ。

又彼は毛深き事の美點を力說する。夏の合宿で皆がブヨに刺されて閉口してゐる時でも彼は平氣でストツキングを下げてゐる。何故ならばブヨが好き獲物と彼の脚に喰ひ着いても堅固な鐵條毛が有無を云はさず捕へて了ふからである。彼が一つキツクする毎に、ブヨの死骸がバラ〳〵散る。だからブヨの方でも大いに戒めて昨今は余りくはぬさうである。〃ねえ、ブヨ子や、ブヨ太郎や、後生だからあの兄さんの脚だけは、よけてお通り。あの人は、お前達よりも、もつと〳〵鋭い針を持つてゐるんだからねえ、〃　とブヨの國の母親達は血氣にはやる子供達に注意するさうである。

遊ぶ事も遊ぶが根がしつかり者である。此處に彼の身上がある。男性的である一面女性的な甘い聲をひねらかす。彼の聲を聞いたものは、あらためて彼の顏を見て、何處のヒゲを引つぱつたら、此んな音が出るのかと不思議がる。そして友人達は、ヒゲと甘い聲の釀し出すカクテルの魅力を大いに憂慮して警告した。〃女には氣をつけなよ。ブヨに敬遠される奴が女にもさうだとは云へねえからな。女が寄つて來ても、ドリブルでカモツちまへよ。〃　流石サツカー部だけはある。

彼のプレーは勇壯である。組對抗試合に物凄いタツクルをやつて、友人を感泣せしめた事もある。去年の浦高戰の時、後半味方が一點入れられて同點となつた以後、彼の示した單身ドリブルの勇姿は未だに、記憶に新なる所である。危きに臨んで增々ハリきるのが高橋の特徵なのかもしれぬ。

× × ×

ハリキルと云へば同じく新二年の吉澤を擧げるには何人も躊躇すまい。彼の頑張を知らなければ確にもぐりである。部員多しと雖も彼程の者は先づ少なからう。

出身は飯田中學である。合宿の時此をメシダ中學と讀んで大いに痛快がつた事がある。合宿となると、皆飯の事ばかりしか考へられぬから、此んなアサマシイ呼方をして腹の足しにしてゐる。中學校こそ災難だ。

飯田中學といふと漱石の〃坊つちやん〃に出て來さう

な學校だと失禮な事を云つてはならぬ。長野縣にレッキとして存在してゐる。彼の話に依るとマドンナも澤山居さうな形勢である。併し東京の如くメークアップしたのは藥にしたくも居ないさうだ。氣丈な彼も時々飯田町の遙なる天に夢を走らせる事もあらん。

彼は氣も男らしく、又体も丈夫であり、酒も少しは心得てゐる。去年中野で會をやつた時、相繼いで憤死する新入生の中で万丈の氣を以て飲んだのは吉澤であり、御國自慢の一舞をやつて、やんやの喝采を拍したのも又彼であつた。醉ふと大いに舞ふ。誰か一人〃貴方と呼べーば〃と歌ふと、次に山のこだまの如く聲はり上げるのも彼である。彼はすかさず〃ナーンダイ〃と電光石火だ。其後は彼に委せて置けば安心である。彼は手拍子をとり乍ら、他人には構はず、一人で〃二人は若かーい〃迄ノス勇氣がある。少しもへバる樣子を見せない。そして又一杯やる。そして次は〃ハッチャッチャ〃をやり〃荒井式メリー、ウキドウ〃をやつて三原山の奥迄行きさうな風情をし、賑やかに〃東京音頭〃を披露する。次は少し



澁くなつて、〃花は霧島、煙草はー……〃とやり、數々を歌ひ舞つて、又〃ナーンダアイ〃に舞ひもどる。精力絶倫だ。

或寒い日だつた。冬になつて雜木林の葉もすつかり落ちて了つた頃だ。吉澤がションボリ歩いてゐた。此の寒いのにオーバーも着てゐない。此の寒いのにオーバーはどうしたんだと尋ねると、今日は無いんだといふ。忘れたのかときくと、前夜友達と飲みに行つて金が足りなくて酒屋に置いて來た。だからこれから取りに行くんだと言つてゐた。兎に角痛快な男だ。

〃どうだい、國に歸ると大いにもてるだらう〃と友達が尋ねた。〃イヤそれ程でもないがね〃とニヤ〳〵する。そして次の話をしてくれた。

彼が國に歸つて或る先輩の會に出席したと思ひ給へ。そして例に依つて大いに飲んで不圖傍を見ると美しき藝者が居る。初は酒の方に全力を注いで傍を見る機會が無かつたのである。オヤと思つて見ると何處かで見た顏である。熟慮の結果彼女は小學校時代同級だつたといふ事



が判明した。彼も木石ではない。大いに懷舊の情を禁じ得なかつた。そして俺を知つて居るかと尋ねるとホヽと艶に笑つて忘れよつたつて忘れられませんといふ風である。彼も大いに氣をよくして、ぢやあ名前も知つてゐるだらうと大いに追窮する。吉澤さんていふんでせう、と美い聲が響く。彼は其晩常より飲んだ事は勿論だ。彼は此の話をしながら當夜を思ひ出してヤニ下つた。グランドの勇士も飲むといけない。大いに警戒の必要がある。

彼の姿をグランドに見ると、大いに嬉しい。彼はキーパーを專心してゐる。矢の如く球に飛付く。ボールが「アラ、吉澤さん、そんなに强く握つちやパンクしちまふわ」と云つても、そんな事は平氣だ。彼のキーパー振りは眞にゴールを死守するの觀がある。それで練習中腕をやられて了つた。彼の意氣が商大チーム中に在る間は商大も大丈夫だ。

以上くだらぬ事を書いて失敬した。此も熊さんが兩人の善行を書いて呉れと云つたからだ。怒るなら熊さんに怒つて呉れ。明後日から合宿だ。

（特別寄稿）

# 軍隊教育に就いて

二階堂謹司

蹴球部生活を了へた一人として、今年初頭より軍隊生活に入つた。そして未知の此の世界で猛訓練を受けながら考へさせられた。

誰もが熟知してゐる如く、軍隊は戰ふ事を目的とし然も必らず勝たねばならぬ。蹴球も然り。結果に於て負ける事があつても、必勝を目指して全力を傾注し、最後の最後迄勝たんとする、負けて何になるかは誇大の言ではない。茲に蹴球の意義も生ずる。即ち軍隊生活、其は一國の運命を賭する戰であるが故に、全國家全國軍を擧げて戰勝の爲に力を致さんとし、過去に於ける幾度かの戰闘に於て今日迄に拂はれたる幾多の貴い犧牲から、又苦い經驗から、眞劍に考へ直し思ひ直して完璧を期すべく、種々教育方針を採用し來り居る今日の軍隊生活である丈に、此等の中には必らず等しく蹴球人の考ふべき數々の正しき要素が存すると考へた。茲に軍隊生活の一端を述べて一考を煩したい。

先づ參考迄に軍隊教育の中心を爲す歩兵操典並に戰闘綱要中に掲げられたる綱領の主なるものを左に示す。

第一　軍ノ主トスルトコロハ戰闘ナリ、故ニ百事皆戰闘ヲ以テ基準トスヘシ而シテ戰闘一般ノ目的ハ敵ヲ壓倒殲滅シテ迅速ニ戰捷ヲ獲得スルニ在リ。

第二　戰捷ノ要ハ有形無形上ノ各種戰闘要素ヲ綜合シテ敵ニ優ル威力ヲ要點ニ集中發揮セシムルニ在リ。



訓練精到ニシテ必勝ノ信念堅ク軍紀至嚴ニシテ攻擊精神充溢セル軍隊ハ能ク物質的威力ヲ凌駕シテ戰捷ヲ完ウシ得ルモノトス

第三　必勝ノ信念ハ主トシテ軍ノ光輝アル歴史ニ根源シ周到ナル訓練ヲ以テ之ヲ培養シ卓越ナル指揮統帥ヲ以テ之ヲ充實ス。

赫々タル傳統ヲ有スル國軍ハ愈々忠君愛國ノ精神ヲ砥礪シ益々訓練ノ精熟ヲ重ネ戰闘慘烈ノ極所ニ至ルモ上下相信倚シ毅然トシテ必勝ノ確信ヲ持セサルヘカラス。

第四　軍紀ハ軍隊ノ命脈ナリ戰線幾十里ニ亘リ到ル處境遇ヲ異ニシ且諸種ノ任務ヲ有スル幾萬ノ軍隊ヲシテ上將帥ヨリ下一卒ニ至ル迄脈絡一貫克ク一定ノ方針ニ從ヒ衆心一致ノ行動ニ就カシメ得ルモノ即チ軍紀ナリ而シテ軍紀ノ要素ハ服從ニ在リ全軍ノ將卒ヲシテ至誠上長ニ服從シ其命令ヲ確守スルヲ以テ第二ノ天性ト爲サシムルヲ要ス。

第五　（略）

第六　軍隊ハ常ニ攻擊精神充溢シ志氣旺盛ナラサルヘカラス。

攻擊精神ハ忠君愛國ノ至誠ヨリ發スル軍人精神ノ精華ニシテ鞏固ナル軍隊志氣ノ表徴ナリ歩技之ニ依リテ精ヲ致シ教練之ニ依リテ光ヲ放チ戰闘之ニ依リテ捷ヲ奏ス蓋シ勝敗ノ數ハ必スシモ兵力ノ多寡ニ依ラス精練ニシテ且攻擊精神ニ富メル軍隊ハ克ク寡ヲ以テ衆ヲ破ル事ヲ得ルモノナレハナリ。

第七　以下略

軍隊に於て、永年に亘り幾多の戰場に於て多數人の生命と莫大額の財産とを犧牲にして經驗に經驗を重ねて以て、戰

勝を最後的重大目的と爲す軍人たるべきものの確守すべき本領、卽 Essence として作上げられたるものが卽ち右綱領である。戰ふ事然も勝つ事を一切の目標と爲すべき軍隊の綱領も大小輕重の差異あれど、同樣戰ひ且勝たんとする蹴球人にとつても亦味はへば味ふ程、深く正しい味を味ひ得るものと信ず。

茲に右綱領に從ひ、經驗濟の軍隊の敎育計畫又方法に基き軍人の根本的なるもの、基礎的なるものを、精神、肉体の兩方面に亘り徹底的に鍛錬されたる、第一期間卽ち一月十日入營より四月中旬第一期檢閲の終了迄約三ケ月間、自分の爲したる、否、爲さしめられたる生活を思ひ返し顧みて、其と蹴球部生活を比較し考察して見たいと思ふ。

六ケ年間學校で蹴球を通じて鍛へられ可成り健康に自信を持ち得た身体であつたが、卒業後急變したる會社生活八ケ月間は或程度人間を Delicate, Sensitive 又青白く、都會病的なものと爲し入營に際して田舍の町役場から與へられたる軍服を着た小生に對し家人は心細さ、傷ましさを感じたる程であつた。然し無理をしても何糞と氣を張る常の習慣から「何でも來い。やる丈はやつて見せるぞ。大いに軍隊で鍛はれて來るんだ」と、相當な元氣と覺悟で入營した積りだ入營して見ると、一年間既に兵營生活をやつて來てゐる二年兵の頑强なる精神並に体格に比すれば、てんで問題でなく貧弱である。体こそ貧弱でも其の意氣たるや軍隊を征服し我がものと爲さんとする小生も、其迄相當頑猛なる要素も持合せ居る自信もあつたが、一度軍隊に入ると物の數に入らず。空威張り、空元氣の自分を見出した。

入營の翌朝から嚴寒も、又其日迄の當人の生活狀態如何も問題にせず、裸になつて室内でこそあれ乾布摩擦だ。甲種合格の各兵の体格を信用して行はれる訓練なるも、普通の思慮ある人なら夏休暇後九月一日頃から始めるべき起床後の摩擦を、嚴寒の一月十一日から始める處に鍛へんとする軍隊の强い明白なる意向が伺はれる。是は單なる一例に過ぎぬ



今冬は例年になく特に寒かつた。水道の水は凍つて水が出ない事は屢々だ。洗面して歸る手に洗面器は凍り付き、濡れたるタオルは直に氷板と化しカチン〳〵だ。室内でも雜布の水の絞りが一寸悪いと、拭いた床の跡は凍つて滑つて危い。室内に乾したる洗濯した襦袢でも掛けて置くと凍つてゐる。廣島は地勢上毎年暖かで一尺と積雪のあつた事は珍らしいのが今年等積雪一尺は稀ならず。北風吹雪は何時迄も吹き荒れて何度天を仰いで怨んだ事だらう。如何に寒くても室内の暖爐は唯名ばかり、日々供給される少量の石炭も昨年苦勞したと鼻にかけ威張りたい二年兵殿を溫め喜ばすにも足らぬ。況して初年兵の我々が採暖の恩惠に浴するなんて望むも畏多い事。寒ければ着用被服は充分なるか。否々綿ネルの襦袢二枚袴下一枚に羅紗の軍服だ。此のヒシ〳〵と身に迫り來る酷寒に、骨の中迄泌み込み來る嚴寒に、時こそよけれ「文句を言ふな」「ブラ〳〵するな」「馬鹿！」「寒けりや動け走れ」とガン〳〵怒鳴られ叱り飛ばされる。「此の位の寒さでへたばつて滿洲の同輩は何とする」「何をぐず〳〵するか、寒さうな顏をするか、よし寒いなら來い」とジヤン〳〵走らされる。集合が少し後れると、又少しボンヤリすると彼の一本松を廻つて來い、又は彼の倉庫を廻つて來いと、三百米も四百米も遠方にある其等の目標を指差して命令だ。命令であるからには絶對服從、澁々行つて同走者より後れると又もう一度走らされる。寒さつらさ何んのその、「馬鹿野郎！」だ。其も信望高き人から叱られるのなら未だしも、大した奴でもない上等兵、班長(下士官)から然も其は理窟に合つた事を命ぜられたり怒鳴られるのなら諦めもつくものを頭もない强氣ばかりの其等の人々から我武者羅に理窟も何もなくて叱飛ばされる。癪に障る事障る事。强い吹雪の中で銃を持つ手も凍つて動かなくなる。伏射姿勢の腹又膝からは冷い雪解けの水が滲込んで來る。エイー、勝手にしやーがれ！、何とでもなれ！

愈々演習も營内各個教練から野外の戰闘教練に進み凹凸の激しい山野を「早駈前へ停れ」で軍裝してジャン〳〵五百米六百米走る。而して最後の突擊は山路を駈上るのだ。走るは愚か歩けない足が動かぬ。鞭を持つた班長は後から「此の位でヘタバッテ軍人か、何をグズ〳〵してゐる、走れ〳〵、グズ〳〵してると因果を拜ますぞ」(因果應報の言葉から出たもので兵の爲したる態度の因に對して上から故意に懲罰の果を與へる。五、六百米向ふの松を指差し彼の一本松を走つて廻つて來いとか、捧げ銃して立つてゐろとかエライ事になる。不貞腐れの態度でも見せうものなら大變な事になる徹底的にノバサレル)と來る。最早其の儘死んでも構はぬ氣になる、勝手にしやがれ、我身にして我身ならず。只無我夢中でカーッとなつて頑張る。速足行進の各個教練でも同じ事を何度繰返へされた事か、速足行進の練習でも五日間位續けられると股の筋肉が痛くて階段が上れなくなる。冷い水に手を入れて雑布で床を拭く、洗濯をする、手はきれる樣で頭の先迄冷さが泌み込む。痛い感覺は通り越して無感覺になる。凍傷とヒビ、アカギレの手は心臓の動悸に調子を合せてヅク〳〵〳〵と痛み出す。一番つらかつたのは五、六貫目の軍裝をして駈足で千米は愚か二千三千米と走らされる事だ。落伍即ち因果を見せられる事だ。嫌だ、苦しい、つらいで止める事の出來ぬ軍隊だ。一日には何度えいこん畜生とカン〳〵になる事か。此處なのだ、軍隊教育の目標とする處は。如何なる大敵にぶつつかる事があつても、如何なる困苦缺乏に逢着しても此の鍛へられたる不撓不屈の鐵石心は微動だもせず、エイ!氣合諸共、半ば猪武者的にのしかゝつて行く。何ヨーの前には既に敵なし。實際に押へられ〳〵又打ちのめされて其處に勃然と生れ來る反動心、反撥心い加減優しい溫順しい人でもあの位やられるとカッと爲る。此處に軍隊教育の目的とする攻擊精神獲得が存する。必勝の信念は綱領にもある如く容易に獲得出來ず、又假設敵の戰闘力に影響支配され相對的のものなる爲、特に秘密主義の



下にある各國の戰備戰闘力を明らかに知る事困難にして、此等に應じて如何程の精神力又物質力を有すれば必勝の信念を得らるゝか困難なる問題なるも、過去の戰歴に徴し精神力が戰勝の要素として如何に强力なるものかを斷じ、一に攻擊精神を根本に有して負けるものか、負けてなるものかの必勝の信念を最善の訓練により獲得せんとす。

第一期訓練が終ると初年兵は毎日銃劍術の練習だ。殊に最近は暑中稽古となり早朝から日沒迄終日中死物狂ひの掛聲をあげての猛練習だ。ヘタバッタ、もう駄目だと言ふ態度を少しでも見せうものなら、仇になつて鍛へんとする二年兵から眞實の因果を見せられるんだ。昨年一年同樣に鍛へた二年兵は實際强い。

歩兵は行軍、射擊、突擊を最重要訓練事項としてゐるが、此の中最後の突擊こそ最後の刺止めを刺し、雌雄を決する決戰にして我軍の最も得意とする處なり。此の白兵戰に於て如何なる大敵と雖も怖れ退く事なく必勝の信念を以て敢然と突進し敵に當り得るものは一に平常より銃劍術の練磨練成に基く確乎たる自信なり。今後の戰闘に於て如何なる程度に白兵戰の機會が起るか甚だ疑問なれども、最後の突擊に對して自信を有する事は常に軍の士氣を旺盛ならしめ、攻擊精神、必勝の信念を鞏固ならしめる所以に外ならず。第一期間訓練の後は野外演習、射擊を時々加へて、終始一貫此の銃劍術に精進するのも、一方に於ては困苦缺乏に耐へ不撓不屈の頑張り精神を養成すると同時に、上述の必勝の信念をも獲得せんとするものなり。或る年には中隊でも此の銃劍術の爲に肋膜炎四五名を出すは稀ならず。内出血の打身で腕を猛烈に膨らしたり、皮膚を破つて繃帶してゐる人等ざらにある。兵隊が最も苦痛とするは第一期間訓練及右銃劍術の暑中稽古である。

一言の文句も許さず。理窟に合するや否や問題にせず。一言として慰めの言葉、優しい言葉も無く營内外を問はず、

叱り飛ばし怒鳴り散らしてがむしやらに鍛へる。寒からうと暑からうと、苦しからうと痛まうと知つた事でない。實際落着いて聞いて見ると班長や、上等兵の我々に對する言葉で優しい言葉等只の一度もなく、叱り怒鳴つてゐるのみだ。怪我をしやうと、病氣にならうと、大した事も無いと斷ずれば、憐れなものだ、慘めなものだと、同年兵の戰友位が優しく慰めて呉れる位が山だ。殆んど取合はない、又取上げて兎や角處置する暇もないからかも知れない。然し不思議に全快する。何ヲ！と氣合が入るからかも知れぬ。運が惡くて怪我から病毒が侵入、又、病氣が進んだ爲營内の醫務室で間に合はぬ時衛戍病院に入院するが、之等は全体に對する犧牲だ。何でも强氣だ。朝起床しても前夜の夜間演習で眠い疲れてゐる。毎日々々變らぬ當日の演習を考へて又今日も同じ教練かと溜息を吐く事があつても、一度床を蹴つて飛び出し氣合諸共掛聲掛けて冷水摩擦をやると、不思議に元氣が出て來て其の日の教練も無事に終る。男ばかりの世界でかゝる訓練を受けて來ると、人間も殺伐になり、喧嘩も屢々見る所だ。

軍隊は戰ふ事を終局の目的とする。一國の運命を賭して戰ひ、若し萬が一敗るれば其の國の滅亡を招來するやも計り難く大にして一國小にして一人の生死を掛けての戰である丈に真劍にならざるを得ぬ。戰場に於てはあらゆる場合に自己の意見に符同し、合理的なりと納得し得る上官の作戰計畫の下に動くものにあらず。多くの場合に上官に於て其の瞬時の情況に適したりと斷ずる機宜の處置を疾風迅雷的に神速に命令し、之を全幅の信頼を傾ける上官の言なりとして一言の文句なく、之に服從し上官の意圖を明察し時を失せず、上述の不撓にして勇猛なる攻擊精神を持し、必勝の信念を以て敏速果敢なる行動に就きがむしやらに最後迄喰下らんとする意氣こそ軍隊をして戰勝に導き得るものなり。理窟を離れ自己の命生は之を上官に預け上官の命ずる儘に水火をも辭せず無我夢中でカーツとなつて突進する。此の精神は生



優しい訓練で得らるべくも無く四六時中猛烈に、文句を言はせず、嚴寒、酷暑何んのその、唯剛健に、鍛錬に鍛錬を爲す處に獲得可能である。戰は理窟なしと言ふ。勿論指揮官に於て一の判斷の下に計畫を立つるには、あらゆる條件情況を愼重考慮して練りに練つての計畫たるべきは言を待たず。然し部下一兵卒には概して此の要なしと爲す。唯命令せらる儘に至誠以て服從し勇猛果敢に之を遂行するのみ。

戰に於て、特に科學の發達に基き如何なる武器の發明も豫想し得ざる今日の戰に於て、即ちあらゆる强力なる物質的威力の出現せんとする現時の戰に於ても尙、今日迄の幾多の戰鬪に於ける体驗の結果最後の勝利を決するものは即ち精神的威力なりと斷ずる綱領は正しいと思ふ。

威力大なる武器を有する軍の兵は徒らに其に頼り精神力の練磨を勿にし最後の生命を擲つての決戰には其弱味の爲に鋒先も鈍ると信ず。此の点蹴球に於ては技術方面の研究は相當究め盡され居り、又設備の点も相當各方面にて研究され大体より完全なるものに對する領域は究められ、極めて狹められし現狀にて、かくの如く既に物質的威力は或程度迄極限に到達し得たりと見得る世界に於ては、尙一層精神的威力を戰勝要素として重要視すべきと考ふ。

最後に戰勝の今一つの重大なる要素として軍隊の軍紀に付一考して見たい。綱要第四に明言しある如く、全軍を一絲亂れざるの統制の下に一の指揮官の命令に對しても全軍が恰も一人の人間の手足の如く、衆心一致の行動に就き得るものが即ち軍紀である。上長の命令に對して絶對且至誠以て服從する事に依りてのみ軍紀を保ち得る。既に一言した如く上長の命令とて常に自己の所信又抱懷する意見に合一する事稀なるも、如何なる命令にしろ、一言の文句なく服從すべきものが即ち軍紀なり。之を以て初めて各種階級の人あらゆる種類の人も含む二十有餘萬の國軍をして完全なる統制下

に置き一の命令の下に戰鬪に就かしめ得るものなり。而して服從の外部的表現は禮儀なり。眞劍にして眞面目なる敬禮を爲す事は一に至誠上官への服從を表はす。何時何處で會つても軍人たるからには一階級なりとも上位の人に對しては絶對的に敬禮を强要される、即ち此の人が命令を與へる以上は絶對に服從せざるべからず。之により全軍の統制が導き得るものである。故に一度軍紀に悖り敬禮を矢する者は最重嚴罰に處せらる。軍隊の生活は極めて多人數の大世帶なる故に上官と兵卒との親交充分ならず篤と長官の人と爲り、性質又性格を熟知し、以て之に衷心より至誠服從せんとするが如き情態は容易に齎らす事は不可能なり。茲に命令服從を完全ならしめん爲に上官は形式的なる威嚴を持ち概して凡々人の多い一般兵をして威服せしめる方法を採る。然るに一度蹴球部に在りては部員も左程多數ならず上下の親睦も意の如くなり眞に上の者が下の者を從へる丈の實力を精神的に又技術的に有ち得る場合は親交による眞の理解により特別に禮儀を强ひらるゝ事なくとも又威嚴を示す事なくとも命令が至誠以て服從さるる事となる。部が膨大と爲るに連れて形式的なるものを重んじて、特に禮儀を求めたり威嚴を必要とするに至る。本來なら自ら頭の下る敬禮なるべきも上下の間に間隔を生じ親しく接する事が不可能となる場合に之は容易に得られぬ。其が軍隊の如く國家的のものであり、天皇の御名に於て命令せらるゝ軍隊に於ては、誰人も抗し得ず、又皆を押へ又命ずる力を有するも、蹴球部に於ては斯くも大なる力を有せず。僅かに學校の名に於て或は傳統の下に努力すべく求めらるゝも極めて薄弱なるものなり。故に自由なるべき學生生活に於て、自己で思索し、或意義の下に蹴球を爲すべきものであらう。此の時、必らず上下相融和し相互理解し相互で不足を補ひ、尊敬すべき主將の命に部員一同一致して衷心從ふ處に强力なる蹴球部が生ずると信ず。

以上述べ來りたる軍隊生活の事共勿論學生生活の一部たる蹴球部生活と異る点、一は國家の運命を賭したる戰を終局の目的とし、一度誤れば自己の生命をも失ふ事あり、最も眞劍になるべき問題である。然るに蹴球部は蹴球する事を最終の目的と爲さず、只之に或意義を見出さんとするもの、即ち一の修練方法として蹴球を爲すに外ならぬ。第二には軍隊は皆甲種合格の比較的完全なる健康の身体の人々なる故に、之に求むるに猛烈なる訓練も可能なり。然るに蹴球部は左程完全なる身体の人々のみならず。此の点其の儘軍隊の方法を採用すべきものならず。第三には蹴球部員は各自相當思惟し得る教養ある人々なるも、兵隊は各階級の人々を集め概して教育程度低き自己意識なき人々である。茲に自ら採るべき方法に差異の生ずべきを考ふ。即ち軍隊生活と蹴球部生活は本來異る目的を有するも戰に勝たんとする点に於ては兩者一致し茲に蹴球人が軍隊生活を一考すべき必要を認むるものなり。

以上軍隊生活の一端を述べて拙筆を走らせたるも意の如く筆進まず只徒らに長文を歎くのみにて文意明瞭ならざるを悲しむのみ。判讀を乞ふ。

（一一、七、一五）





# 會社の窓から

水島　茂

會社の窓から雜然と立ちこんだ市街を見下して、だん〳〵眼を遠方に轉じて行くと市街は次第にぼんやり霞んで行つてその果ては見極める事が出來ない、大阪が廣いせいもあらうが煙の都と云はれるだけの事はあつて煙のひどいのには

驚く。

懐しい東京に數々の思出を殘して大阪へ來たのは此の春の事だつた。京都を過ぎ列車が淀川の鐵橋を渡つたのは春の朝だつた。その時も矢張り大阪の空はどんよりと曇つてゐた。然しあの時は未だ風流(?)な氣持で、大阪も春霞で煙つてゐるワイと思つて、

來て見れば浪速の街も春霞み

と一句捻つて見たりしたのだが今から思へばとんだ春霞みだつた。

煙り――之が大阪の第一の印象だつた。次は水の都だけあつて橋の多いのが馬鹿に珍しかつた。

朝阪神電車で梅田へ着いて會社へ御出勤の途中の市電はまるで橋ばつかり渡つてゐる樣なものだ。櫻橋、渡邊橋、肥後橋、江戸橋、京町橋、信濃橋、新町橋、四ツ橋(橋が四つもあるんですぞ)此處で乘換へて佐野屋橋、心齋橋、三休橋此處で下車だがあんまり橋ばつかり渡つて疲れたので一寸三休橋といふ所、然かも會社は安堂寺橋通りにあるから御念のいつたものです。第三印象は大阪に美人の少い事でした。東京で化粧の上手い麗人達を眺めて目の肥えてゐた小生には大阪の女といふ女がいかにも美しくなかつた樣に感じたです。(當りさわりがあつたら御免なさい)尤も今ではそれ程にも思つてゐないのですが。

あんまり脫線してゐると熊さんに沒書にされる惧れがありますので一寸此處で方向を轉じませう。

學生生活からサラリーマン生活へと環境に一大變化があつたのですが、何にしても未だ背廣を着てから僅か四ヶ月にしかならぬのですから、サラリーマンらしからぬサラリーマン、いや學生サラリーマンといふ樣な形です。未だ學生時



代の癖が時々出て會社へ行くといふのを學校へ行くとうつかり云つて皆から笑はれる事があります。それだけにサラリーマンの生活を比較的公平に批判する事が出來ると思ひます。

學生時代によくサラリーマン生活を諷刺する映畫を見ていかにも眞劍味を忘れた、目先きの利益と刹那的の快樂を追つてその日を暮して行く生活だといふ先入觀があつただけに初めてその生活に飛び込んだ時は實に意外の感に打たれました。それは彼等の會社に於ける態度が非常に眞面目だといふ事です。自己に與へられた仕事に對しては頗る忠實である事です。會社は朝九時から晩五時迄ですが、皆が九時前から晩は六時過ぎまで眞劍に働いてゐます。上役にへつらふといふ樣な氣持で朝早く出勤したり晩遲く迄働いてゐるのではない樣です。此の点却つて一般に學生生活の方が不眞面目の点が多いのではないかと考へられます。會社で働いてゐる位學校にゐて勉强したら優等生は間違ひなしでせう。勿論諸君は勉强する傍ら運動に眞劍になつて自己を或程度迄犧牲にしてまで母校の名譽の爲めに練習に精進されてゐるのですから、此の点文句はないのですが、兎も角サラリーマンも諸君の想像以上に眞劍に働いてゐるのだといふ点を知つてゐる事は必要だと思ひます。

會社で仕事してゐる時は無我夢中です。それは丁度猛練習してゐる時、否試合してゐる時の樣な氣持です。仕事に油がのつてどん〳〵片附けて行くのは全く時の經つのも忘れてしまつて、正午の合圖に驚かされる事が常です。一日は本當に早く終ります。學校の二時間の講義は實に長く感じたのですが、會社の八九時間は直ぐ過ぎてしまひます。

一日の仕事が終つて合宿所のある香櫨園の驛へ降りた時、やつと我に返ります。そして松並木に沿つて宿舍へ歸る途中その日一日を思ひ出して「今日もよくやつた」と滿足を覺えます。自己の仕事に意義を見出し、自己の生活の根本に

何らの疑を懷く事がない点幸福だと思つてゐます。

學校を出て會社へ入ると急に世故慣れた風をし、如才ない様に立ち廻る人がありますが、之が度を過ぎると全くいやらしいものです。こういふ人は最初は會社でもうけがいゝかも知れませんが永續きがしません、然し又一方會社では我が通りません。學生時代の様に我儘は通りません。學生時代にはあれは學生だからと、社會で特に寛大に見て呉れますが、會社ではそうは行きません。自己の主張は仲々通りません、何とか理窟をつけられて斥けられます。殊に入つた當時は新米扱ひをされ、大學出だといふ自尊心を傷つけられる事がまゝあります。然しいつ迄も自己を過大評價して變なプライドをもつてゐては通りませんから鄕に入つては鄕に從へで兎に角默々として働くより仕方がありません。此の点スポーツマンは團体生活に慣れてゐて自己の主張をまげて一同と一致するといふ氣持がありますから會社へ入つても樂だと思ひます。自分よりも年配の若い者に「こんな事が分らんのか」などと云はれて、時々はムツとする事があつてもそれを表面に表はさず兎に角專心實力養成に努める事が出來る点幸福です。

大學を出ても全く最初は役にたちません。こんな事でよくも高い給料を呉れるものだと感心する事があります。英文の手紙や候文を書かされても最初の一行からうなつてゐたり、電報の意味がサツパリ分らなかつたり、珠算の不得手は云はずもがなと來ては何處に取りえがあるのかと自己の價値に疑を懷き度くなります。大學出はよくうぬぼれて、そんな小さな仕事は出來なくとも、大局に目がつくから違ふんだとか嘯ぶきますがこういふ根本的な事務が執れなくて大局を見るなんて隨分無理な事です。サツカーでもそうでせう。錄にキツクもストツプも出來ない中から戰術を論じてもそれこそ机上の論で意味ないでせう。少くとも最初の四五年間は學士様だなんていふ事を忘れて、專ら會社事務のキツク



とストツプから習ひはじめる事です。

こういふ事をスポーツマンは朗らかにやつて行きますから上役からも可愛がられます。例へばつまらぬ事を知らなくても平氣で聞きます。上役もけつしてそれを笑つたりしません。又笑はれても構ひませんから、うるさい程質問します。最初は分らぬ事ばかりです。Make us firm offer cif New York などとあつても何が何だか分りませんでした。然し總てはその人の努力と時が解釋して呉れ、三四ケ月經つた今日では朧げながらも仕事の概念を掴む事が出來る様になつて來ました。

僕が意義ある會社生活を送る事が出來、非常に張り切つてゐる最も大きな原因は矢張り、いゝ會社へ入れたといふ事です。いゝ會社には立派な人が大勢ゐます。自づと仕事の上のみでなく處世上の教訓を受けます。此の事は之から自己の一生を其處で過ごさうとするサラリーマンにとつては最も重要な事だらうと思ひます。諸君も出來るだけ大きな立派な會社を狙ふ様に、又その資格をつくる様に今から心掛けておいて下さい。

學生時代にはよく映畫を見ましたが、會社へ入つてからは殆ど行つた事はありません。會社が六時頃に終りますから見ようと思へば見られますが、一日中ビルディングの中で働いてゐたのに、又人込みの映畫館へ入つて三時間もぢつと坐つて(或は立つたまゝで)ゐやうといふ様な元氣はありません。學生時代にはどちらかといへば映畫の好きであつた僕でさへ斯くの如き有様ですから、會社全体から見ても映畫を好む者は少い様で、ジョン・クロフオードとかジンジヤーロツヂヤースとかが話題にのぼる様な事は先づありません。

僕の係で最も趣味の共通して居るものはテニスです、之も憚りながら硬球ですゾ、畫の休みは殆ど期せずして一同が

心齋橋筋のドンバルといふ喫茶店へ一杯十五錢也のコーヒーを飲みに行きます（一日十五錢なら月に四圓五十錢、年に……なんて勘定する人は誰です。いやしいですゾ、此のドンバルの三十分が會社生活のオアシスなんですヨ）その時に出る話は九十パーセントがテニスの話ですから、テニスを語る事が出來なければ馬鹿みたいなものです。誰かゞ冗談にテニスを知らざる者は三菱マンに非ずとか云ひましたが、正にその通りです。それでデス、學生時代蹴る方ばかりでラケットを握つた事もない小生までが、危つかしい恰好で練習を始めざるを餘儀なくされた次第です。最初は相手がないので、淋しくボールド相手に練習しました。會社から六時半頃歸つて來るとそれから日暮まで三四十分一生懸命練習したのです。今からでも遲くはないで、練習の甲斐あつて昨今はどうやらコートで試合まで出來る樣になりました。一日會社で事務を執つてゐる僕等には退社後の半時間乃至一時間の此のテニスが何よりもの樂しみで、兎角運動不足勝ちになる會社生活に生々とした生活を取り入れる樣になりました。テニスの他のスポーツとしては、春秋（秋は未だ知りませんが）は六甲を後に控へてゐるのでハイキングが仲々盛です。日曜毎に三々五々寮で拵へてもらつた辨當を大事に抱へて物々しい出で立ちで出掛けます。そして安息日といはれる日曜にすつかり疲れ切つて、翌日から六日間のウイークデーでその疲れを休めるといふ寸法なのです。夏は幸なるかな寮が香櫨園といふ阪神間に於ける最も盛大な海水浴場にありますので、一同海水着一枚で濱へとんで行きます。綺麗な阪神地方の娘さん達が海水着一枚で濱をぶらついてゐるのを眺めさせて戴きますから有難いです。日曜には會社のタイピスト連中もわざ〳〵我々のゐる此の濱へ出掛けて來ますので若い連中は張り切つてゐます。（小生の如く年とつてはそうでもないです）

會社生活の唯一の缺点はどうも飲む機會の多過ぎる事で、小生の如く酒の弱い者には苦痛です。出來るだけその機會



を避ける樣にしてゐますが、それでも殆ど一日置き位にはチョット一杯といふ事になり閉口します。此の点なんとか生活を改善しなければ、體にも毒ですし軍資金も續きませんよ。

學生時代、シーズン中禁酒してゐて、祝勝會で大いに飲む樣な愉快さは到底味ふ事が出來ません。

締切期日を過ぎて、あわてゝ書いたので支離滅裂です。たゞ會社生活の偶感を述べさせて戴いたまでの事です。

―一九三六、八、一一―（小生の誕生日です）

（話の泉）

○村さん熊さんの彌次喜多旅行で遂に九州まで行つてきたが、村さんも大分お強いさうで熊さんは途中でノビちやつた。次はトラさんの番だとは口が惡い。

○長瀨先輩相變らず氣のお強い方、村も熊も煙にまかれて歸つてきました。秋の試合には見に來るさうですから大いに頑張つてやりませう。

○金井君渡邊君は神戸一中で片山君は廣島一中でボールを蹴つて居りました。

紀行文

# 九州膝栗毛

本一　村井恒典

漫文的に書かうか堅文的に書かうか迷つたが堅文的は讀みにくい、讀み飛ばされて了つては意味ないから漫文的に書くことにする。勿論三先輩のプロフキルに過ぎぬ事は斷つておく、俺はこんな〻間ぢやないと先輩から抗議が來ては大變だから。

扨十一日迄みつちり有つた講義陣は閉鎖し之以上講義を聞きたくても聞かせて呉れぬ樣になつたので十三日夜――十三の數は我サッカー部の吉數ですぞ――汽笛一聲長烟遠くたなびきて更けゆく東京驛を出發したのは淺技金井と相棒の熊公と僕の四人帝都の名殘りとホームで入り來る汽車にスライデングタツクル一つ尻の痛さも忘れ車に飛込めば車は超滿員、角田の叮寧なるお見送りとお土産に感謝しつゝ夜汽車は走る。

☆　★　☆

大船を過ぎれば車中の人も落着き各自だらしなく寢初めたので我々四人食堂車に行きてビールの滿を引く。淺技主將の御馳走だ。念の爲に若い方々に注意して置くが汽車の中でビールを飲むとビールでよろけるのと、汽車のゆれでよろけるのと二つのよろけがある。之の二つを相殺する樣に歩く事、もし反對になるとよろけ方が一層ついて轉んでしまふ。

神戸廣島と老人の齒の如く欠けてしまつて關門で刑事連に質問される頃は熊公と差向で小生が八公でなくて惜しい事をした。熊公は舌が廻らぬから小生が質問の全部に答へる始末。この話を九州で長瀨さんにしたら「僕なんか一邊も關門に引つかゝつた事はない、やはり人相だね」とこの先輩の心臓仲々强し。

☆　★　☆

戸畑につけど東も西も分らず、地圖を頼りにうろつき廻る中三菱の方に助けられ古色蒼然たる寮につく、この寮では我先輩が最古參とか。以下長瀨さんとのダイアローグのピックアップ。

リーグ戰に臨む時は優勝しようなどゝ考へてはいけない、一つ々々の試合に勝つ可く全力を注げ。四つ位勝てばやつと優勝と云ふ感じが出て來る。優勝を望んで先の試合ばかり考へず當面した試合に全力を注ぐこと。

蹴球部の生活は禮儀の生活なり。之はこの先輩の長年の持論故くど〳〵と説明する必要はあるまい。



話はスラムプに移る。長瀨さんはスランプになつたり腐つたりした事はないと云ふそんな筈はないと一時は思つた。併し考へて見るに腐るのは確かにぜいたくな事だ上に頼るべき人が居るから腐つたりする、眞にしつかりやらねばならぬと云ふ責任の地位にある人は腐つたりしてゐられない。「腐つた」と云ふ言葉は自分の下手な事の自分に對する辯解だ。確に卑きような事だ。我々は幸に頼りになる上級生がゐた。それで腐つたりスランプになつたりした。實際主將が腐つた等と云ふ事は余り聞かぬ又腐る樣ぢや本當に主將として全軍を任しておけぬかもしれぬ。腐ると云ふ事は氣の弱いものゝうぬぼれから起るものらしい、勿論例外は有るかも知れぬが。

蹴球部と戀愛しろ、之も長瀨さんのよく云はれた言葉だ。言を替へれば蹴球生活の中に我を殺した絶對境を見出す事であらう。禪を組むのも之に到達する一法なり。蹴球も沒我に到る一法なり。長瀨さんに會つたらこの事あの事色々聞いて來ようと思つたが切り出せなかつたり話をしてゐる中に解つたりして了つた。未だ〳〵謎みたいな事を云はれたが之は未だに疑問だ。

兎に角我長瀨さんが社會に出ても以前に勝る自信を以てぐん〳〵進んで居られるのを目の當り見せて貰つた。益々特色が濃くなつて來たようである。彼の東京に榮轉される日は何時頃であらうか。

★　☆　☆

四日間御馳走になりつゞけで九州を出て歸途につく。下關を過ぎてそろ〳〵大竹に着きかゝる頃熊公青い顏をしてゐる、腹が痛いと云ふ呑みすぎか食べすぎか、大竹が晴坊のお出迎へを感謝して晴坊の家に着く。熊公は相變らず腹が痛いと云ふので晴坊の家で藥を取つて頂くやら何やら大騒ぎ、夜晴坊の漕ぐオールでボートに乘つた靜かな川面を滑るや遙かなる鐵橋を汽車が通つて行く、中々良い所だつた。

次の日十一聯隊に二階堂先輩を尋ねる。營門を通つて控えに待つてゐると仲々スマートな兵隊さんが來る、よく見ると我等の謹ちやんだ。早速營門を出て町に出る。去る喫茶店でお茶を飲んでゐると淺技片山の兩君來る、六人で町を歩いてゐると四角い人が棍棒をついて來る。我商大の先輩で柔道部の主將だつた人だ、コーヒーを御馳走になつて色々學校の事を語り合ひわかれる。それから愈々舞臺は本式に廻つて來る。部の狀勢を一應報告してから一問提出「夏の暑い日盛の練習の時迎も動けない時がある。この時何くそ！と思つてやると思ひがけぬファイトが湧いて來て張り切つてやれるものである。併し何くそとも思はなくなつてしまふ日がシーズンに數日位有

るものだね」と云つたら二階堂先輩立ち所に「それはいかん。そんな數日があるようぢや修養が足りない」と極めつけられた。上には上の居るものだ。部員諸兄この事をよく參考にして味つて見て呉れ。主將の偉さはこんな所に出て來るものである。自分で修養を積んだと思つても未だ々々仲々追付けるものではない。上の人はやはり何處まで行つても上の人なんだ。

長瀬さんの自信と直進力、二階堂さんのこの實行力、この兩者にゴツさんの要領とが結びあつて商大サツカーは再建の一歩を踏み出したのだ。之だけの人が之丈出ないと蹴球部は又落ちるぞ、個人的のぜいたくを言つてゐる時でない。一人一人がしつかりやつても表面には或は現れぬかもしれぬ、併し一人でもしつかりやつてゐない者が有れば成績はすぐ落ちる。氣をつけるのは此處だと思ふ。

謹坊が歸營時間で歸られてから皆で片山の練習振りを見に行く。廣島一中の練習は暑のせいか餘り勤いて居なかつた。併し仲々うまい人達が居た。そして仲々變化の有るフォーメーションを採つてゐた。

★ ☆ ★

廣島を眞夜中に出る汽車に乘る。この前の數時間は皆と話し合ふ、我々にとつてシーズンオフの時が如何に重要なるかを教へた一刻だつた。話は部の事と九州の事に限定される。晴坊は飲んで泣いてのびて了つた。

廣島驛で三十分許り時間があつたので一寸食堂でお茶を飲んでゐたら片山がお土産を持つて來て呉れた、又一杯。

廣島の人達も好い人許りだ。この夏は去年に比べると「この秋こそ」の氣分が各自の間に滿ち滿ちて居る樣に感じられる、去年の不名譽を雪ぐのはこの秋である、ボヤ〳〵しては居られないぞ。

神戸に着いて早速金井に電話をかける、東京と違つて何千何百何十何番等と云つたらあかん、あちらでは番號は西洋式に棒讀みだ。

六甲其他を案内して貰つて西宮なる水島先輩を訪ねる九州のよりは少し新しい寮が海岸に立つてゐる、留守の間にあがり込んだのは金井吉田熊公僕の四人、窗から首を出して見てゐると遙か彼方の夕闇の中に特長のある頭がぽつかり浮び出して來た。

早速阪神で大阪は道頓堀に出る、大阪式のごちや〳〵した中で御馳走になる。僕も熊も連日の强行軍でやゝグロッキー、金井吉田の兩君は「いとはん」の如く、呑まない。

水島さんは先輩とは云へ三ケ月しか經たず學生に毛の



生えた位のものだから偉い元氣で現役やゝだぢ〳〵だつた、勿論甲種合格だらう、この會見記小生グロッキーにてもうろう体の中に居りし爲腦膜に記錄を止めず、專ら熊公の手記に待つ。阪神電車の中でサヨナラと云つたのは夢うつゝ氣がついたら金井も吉田も熊も皆居なかつたでも確かに若い連中が下から張り切つてゐなければ强くならんと云ふ事を强調して居られた樣だ。

少し殘つて神戸一中の練習を見た。皆非常なフツトワクを持つてるが何んだか同じ事許りやつてゐるやうな氣がした、余り點が入らない。

★ ☆ ★

この旅行の目的が何も景色を見る爲でなく昔の上級生に會つて昔の部の氣分を思ひ出しそろ〳〵最上級生になる未完成の僕に刺戟と暗示を與へて貰ふ爲めのものでした。そして九分通り役に立つたと信じてゐる。この旅の結果は具体的に秋のシーズンに表れる。いろんな事が分つた。併し愚筆に盡し難い、舌になら盡せるだらう、聞きたかつたらビールの半ダースも持つて聞きに來給へ、人はビールをのむと本當のことを云つて了ふから。

熊公が二日の期限しか呉れないので變なものしか書けなかつた。さぞ讀みにくかつたでせう御免々々。

# 先輩訪問感想雜記

本一　熊澤博文

長瀬さんは相變らず氣が强い。少し痩せた樣だつたが元氣に働いてゐる。もつとも、三日目に、貯炭場を見學させて貰うため社を訪れた時には目まひがするなんて言つてゐたが無理はない。僕等が行つてから毎晩飲みつゞけで一時頃床に就くのだ。僕等は朝は寢たい放だいだが長瀬さんは早くから出勤だ。「八時半まで行けば良いのだが七時半まで行くことになつてゐるのだ」と言つてゐた兄の性格をよく物語つてゐると同時に、斯うなくては社會の先頭には立てないと感ずる。戸畑の明和寮には四晩泊つたが、最初の一晩を除いて、小倉とか門司とかで飲み歩いた。門司は神ケン等をノバした有名な「たぬき」の別館だつた。最後の晩だつたので、長瀬さんもさすがに疲れたらしい。酒が廻ると横になつて高鼾だ。僕等つれ〳〵なるまゝに給仕めと話す。村さんスマートな半島の人といふわけで大もてだつた。彼いゝ機嫌でグイグイ飲んだ。「朝鮮の人はダンスが上手なものですわ、踊りませんか」なんて言はれて鼻の下を二寸位にしてゐた。所が、長瀬さん、實はたぬき寢ですつかり聞いてゐたとは

知る由もなし。村さんは口だけ生れてきたゞけあつてよく話すこと話すこと。僕の話す暇が殆どなかつた。耳を働かすだけだ。たつた一言口をきいたのは「長瀬さんの蹴球部に對する理想はどんなのですか。即ち此から部はどんな部になつて行つて欲しいのですか」といふのだつたが「それは難かしい質問だ、けれど蹴球部は代々のキヤツプテンの人格の現れであつて貰いたいだけだ」と答へた。僕は成程と思つた。この言葉の深い意味を吟味しないうちには、次の質問も無意味に終ると感じた。それで僕の話はそれつきりだつた。でも、此だけでも決して得る所は少くないのだ。色々なことは村さんが聽いたし話したし、村さんから話を聞くと面白いだらう。

僕は長瀬さんがいよ〳〵洗練され、いよ〳〵落着いて行く中にも、變らぬ闘志を以て働いて居られると觀察した。學生時代の氣分の抜けかゝつてゐるのは事實だが、それは惡い傾向だとは思はない。

兄の自信は益々強くなりつゝあるのだ。兄は、兄の人格で社全体の空氣をさへ變へ得ることを自覺した。僕は偉大だと思ふだけで、ホラだとは思はない。それは確かに易いことではないが、不可能なことではないから。

早大との試合の後で本科生が豫科生に怒られたことを長瀬さんは心配してゐた。村さんが、喜んで貰はう、豫科の元氣をホメて貰うと思つてその話をすると、長瀬さんは笑ひながらも「そんなことではこれからの部は弱くなる」と言つて居られた。先輩として無理からぬ心配だと思ふ。そして「青年將校が蹶起する樣ぢゃいけない」と言つた。この言葉は實に味のある言葉だ。

此は長瀬さんの持論の樣だが、斯う言つてゐた。「學者たるより政治家たれ。實際に物を行ふ政治家たれ」と誠に同感である。又いふ「だから創刊號に謹坊が書いた樣なことは大嫌いだ。僕はあれを讀んでゐるとたまらなくなる。此だけぢやないこれだれぢやない、と思ふのだ」と。長瀬さんとしてもつともな事。然し二階堂さんも、それは自分でよく分つてゐるのだ。

考ふべきは、自分で思つてゐる事を出來るだけ正確に全部に近きまでに發表するには何うするかといふことである。

更に言ふ、「僕は結論だけを言ひたくて仕方がない、すぐに結論へもつて行く。だから卒業論文は極くうすつぺらなものだつた」と。さうだ、兎や角いふ必要はない我々は結論だけを言へばよい。だがその結論に依つて、聞いた方では熟考せねば駄目だ。結論だけをそのまゝ鵜のみでは何にもならぬ。そこに達するまでの道程が大切なのだから。此の點卒業論文を例に引かれたのは適切で



ないと愚考する。村さんが「熊公は豫科のマネヂヤーをやつてゐるが、とてもみんなに恐れられてゐる」と言つた時「マネヂヤーはその位でなくてはならぬ。いゝ經驗になるよ」と言はれて涙が出る程嬉しかつた。

「或る娘が嫁入らんとする時、夫に最もよく仕へるには どうしたらよいかと言ふので、Aの小母さんの所へ尋ねて聽いてみると（誠を以つて使へよ、たゞ誠の一字あるのみ）と言ふ。娘には何のことを言つてゐるのか分らなかつた。そこでBの所へ行つてきいた。すると（先づ自分の事をする前に夫のことをせよ）と言つた。それで娘は成程と分つた」と言ふ兄の得意とする比喩のこの話も亦僕によき指針となつた。が此は前に言つた「結論」はそれが抽象的言辭に終るべからざることを言つてゐることも知つた。そして道程の重要さをも裏書きしてゐるのだ。

長瀬さんと二階堂さんの友情關係も實に妙なるものがあつたらしい。喧嘩をする。相談をする。そして益々親しくなり愈々互に磨かれて行つたらしい。之こそ眞の友眞の友誼、羨ましい限りだ。

二階堂さんに面會した日は、兄が幹候主計に合格したといふ翌日だつたから、その鼻息の荒いこと荒いこと。飛ばされさうだつた。聽いた話は、今度寄せられた「軍隊生活に就て」に殆ど書かれてあるから、それを讀まれゝば大凡解るだらう。軍隊と蹴球を相通じさせた所は僕の最も嬉しいことだ。絶對信賴、絶對服從は僕の最も好む所。勿論蹴球部と軍隊と全然同樣であつてはならないが、誰かゞ誤つて彈藥を落し、大勢の怪我人の出來た時怪我人まで營倉になるといふ樣な形式主義にさへ好感らしきものを感ずる僕である。軍隊生活は僕の性に合ひさうだ。軍隊では理屈を言はせない。だがその「理屈を言はせない」といふ所にちやんと理があるのだ。世の中の理屈に合はぬ理屈で苦しめられる人々を見せつけられた僕には、この軍隊式がどんなに愉快に感ずるか。

就職された時、社會の一年生として第一歩を踏まれた氣持で、軍隊でも何にも知らぬ者になりすました二階堂兄は、遂に中隊長に目をつけられ、中隊長が滿洲に渡るに際して、兄に特別の言葉を與へられたことは無理からぬことであらう。

兄は淺枝さんに「主將としての苦しさ」に就て語られ慰めてゐた。ます〳〵張切つた力强い兄の線の太さは賴もしい限りだ。村さんには此の方がハツキリするらしい長瀬さんより謹坊の方が偉いなんて言つてゐた。

謹坊も水島さんも原稿を寄せられたので、それを讀まれた方が早いが、兎に角、何の先輩にしろ、蹴球部に對

する氣持で凡てに向つて間違ひないと言つてゐる。社會の新人水島兄は獨特の觀察眼を以て、常に新しきを學びながら働いて居る。兄は小柄の体に力を一ぱいみなぎらして、グイ〳〵ビールをあふりながらいふ。「法律も哲學も何にも役に立たない。たゞ語學の力が役に立つのみ」と。蓋し勉強の出來る兄の言だから本當だらう。兄に會つたのは丁度、徴兵檢査のため家へ歸る前夜だつたが、恐らく合格して、神野兄と揃つて入營されることだらう。

先輩を訪ねて話を伺つてゐると、休に力の充ちるのを感ずる。よき先輩を持つことは幸福である。まだ書きたい事は山程あるが、時間がないので此でお許しを請ふ。

（話の泉）

○二階堂先輩兵隊さんになつて益々元氣盛です。幹部主計となつて星が三つ「カモいカモい」と鼻息の荒いこと。

○下り電車が中野驛を出て間もなく右側にキートンといふ酒場のあるのを御存知ですか。

○水島兄もなか〳〵元氣だ。相變らず飲みつぷりはお見事です。

○東京に唯一人殘留の神野兄、春の會ではみんなに抱きつかれて、一張羅の背廣（シャツレイ）を破られやしないかと心配してゐました。



# 春季合宿日誌

春季合宿の是非は各人に就いて相當意見の差がある。之を否定する者の理由としては部員の最大目的たるリーグ戰は秋季であり、春季に於ける合宿の効果は及ばない事、試驗後で相當身体が疲勞して居る事、シーズンが長過ぎる事等であつたが、三十人の部員を精神的に團結する爲に又豫科リーグ及び綜合選手に對して身体をつくる爲に是非合宿を行ふ必要を認め、部員の絶對多數の賛成を得て四月五日より十二日に亘り合宿を行つた。今回の合宿の特長とする所は個人のプレイ、即Kick, stop, heading及走力を向上さす事にある。一週間の中に之だけを完全に修得する事は至難のことであるが、大体天候に惠まれた結果、豫定に略近き程度迄なし得た事は甚だ喜ばしい事と思ふ。

合宿日記に就ては、蹴球部報に未だ書かれてゐない合宿中に覺へた事を、更に忘れない樣に文にして讀み返す事は甚だ有意義な事と信ずる。日記の受持は大体本科三年及二年の者で5,6の兩日は村井、それより、大掛、鈴木、荒井、森田、11日及12日は淺枝の諸兄に御願ひした印刷の關係から大体必要と思はれる部分だけ編輯したが此の事に就ては御諒承願ひたい。　（重見記）

昭和11年

4月5日　午後6時新宿集合、7時半新宿發、參加者、淺枝、荒井、森田、鈴木、重見、大掛、村井、小西、熊澤、岩崎、後藤、二階堂、米山、池尾、菅瀬、早野、高橋、吉澤、清水、山田、荒川、堀尾、以上二十二名。石割は通ひ練習、其の他の諸兄は種々の事情より不參加。

當夜九時五十五分の列車にて水島前主將大阪に赴任のため淺枝、重見は部を代表して送る。

合宿所一橋館に着きて先づ一室に會す、荒井の訓辭あり、大休遊ぶ時は朗らかに遊び、本科生と豫科生の氣分を一致させ、練習の時にはしつかりやらうとの事、十一時淺枝、重見歸へる。兩君よりの注意大体次の如し。

昨年の先輩をあんな不成績で送り出して非常に心苦しい、兎に角何と言つても、スポーツマンは勝たねば駄目だ、その爲に皆で之の春から一緒に苦しまふ、苦しみを皆で分け合つた後には眞の喜びが待つてゐるであらう。又昨年足をくじいた經驗あるものは最初より氣を付ける事、合宿日程は隔日に Radio 体操を行ひ、其の他の日は running を行ふ。朝は七時又は七時十五分起床、夜は十時必ず就寢。

# 春季合宿日誌

春季合宿の是非は各人に就いて相當意見の差がある。之を否定する者の理由としては部員の最大目的たるリーグ戰は秋季であり、春季に於ける合宿の効果は及ばない事、試驗後で相當身体が疲勞して居る事、シーズンが長過ぎる事等であつたが、三十人の部員を精神的に團結する爲に又豫科リーグ及び綜合選手に對して身体をつくる爲に是非合宿を行ふ必要を認め、部員の絶對多數の賛成を得て四月五日より十二日に亘り合宿を行つた。今回の合宿の特長とする所は個人のプレイ、即 Kick, stop, heading 及走力を向上さす事にある。一週間の中に之だけを完全に修得する事は至難のことであるが、大体天候に恵まれた結果、豫定に略近き程度迄なし得た事は甚だ喜ばしい事と思ふ。

合宿日記に就ては、蹴球部報に未だ書かれてゐない合宿中に覺へた事を、更に忘れない様に文にして讀み返す事は甚だ有意義な事と信ずる。日記の受持は大体本科三年及二年の者で5,6の兩日は村井、それより、大掛、鈴木、荒井、森田、11日及12日は淺枝の諸兄に御願ひした印刷の關係から大体必要と思はれる部分だけ編輯したが此の事に就ては御諒承願ひたい。　　（重　見　記）

昭和11年

4月5日　午後6時新宿集合、7時半新宿發、參加者、淺枝、荒井、森田、鈴木、重見、大掛、村井、小西、熊澤岩崎、後藤、二階堂、米山、池尾、菅瀬、早野、高橋、吉澤、清水、山田、荒川、堀尾、以上二十二名。石割は通ひ練習、其の他の諸兄は種々の事情より不參加。

當夜九時五十五分の列車にて水島前主將大阪に赴任のため淺枝、重見は部を代表して送る。

合宿所一橋館に着きて先づ一室に會す、荒井の訓辭あり、大休遊ぶ時は朗らかに遊び、本科生と豫科生の氣分を一致させ、練習の時にはしつかりやらうとの事、十一時淺枝、重見歸へる。兩君よりの注意大体次の如し。

昨年の先輩をあんな不成績で送り出して非常に心苦しい、兎に角何と言つても、スポーツマンは勝たねば駄目だ、その爲に皆で之の春から一緒に苦しまふ、苦しみを皆で分け合つた後には眞の喜びが待つてゐるであらう。又昨年足をくぢいた經驗あるものは最初より氣を付ける事、合宿日程は隔日に Radio 体操を行ひ、其の他の日は running を行ふ。朝は七時又は七時十五分起床、夜は十時必ず就寢。

4月6日　朝は Radio 体操

午前10時より

1　本間式体操二回（12分）
2　グラウンド迄 running（8分半）
3　straight swerving　一往復
4　dash 速度の變更　二回づつ
5　50m リレー
6　合宿まで running
7　体操　十一時半終了

午後3時半よりの練習は午後の練習に Dash 中方向變換を挿入す。

午前の練習は日光稍強く練習後、のびた者4名、春休みで身体が弱つて居る爲と思ふ。

午後は皆元氣だつた、シーズンの計は春にあり。お互に頑張らう。（村井記）

4月7日　曇　起床7時、本科專門部1週の running を行ふ、所要時間17分、相當の効果ありと認む。

午前の練習は10時より

(1)　体操
(2)　縄飛　1分半2回
(3)　running
(4)　dribble　2回
(5)　short kick　10分
(6)　place kick　20分
(7)　running
(8)　体操

kick の基礎練習をなす、練習を行ふ前に大掛に大体の基礎理論を示して貰ふ。

(1)　Iustep kick

地上に十字形に線を引き、交點に ball を置いて、線上を走り其方向に ball を蹴る、踏切足は ball の眞横、踵は地上より離し足を伸ばして蹴る、腰はひけぬ様、特に注意すべき點は踏切り足が近くなり過ぎぬこと、この kick は 特に goal shoot の時に用ふ。

ball が高く上らず方向は正確で且つ speed がある爲特に効果がある。foward は特別に練習すべきである。然し純粋な instep kick は比較的修得困難であるから各人に相應した型を自ら考へ出すのもよい。一例として front kick を加味する事も出來る。

(2)　side kick

特に注意すべきは腰のひねりを加へる事、踵をグツと前に押し出す様な氣持でやるとよい。side kick は short pass の根本となり、又 dribble stopping 等の基礎とな

るものであるから、左右兩脚完全に修得すべきである。

short kick の練習の際特に心掛くべき事。

(3) front kick

之は主に back よりの feed 、wing の centering inner よりの逆 side の wing への pass 等比較的長距離の pass に有効である。

kick する場合の氣持は足の甲で ball の中心より稍下を地面と平行に切る樣な氣持で蹴ると良い、 ball を上げ樣とする時には稍先で蹴り、下げ樣とする場合はその逆にする。

之の kick は比較的少い力で遠方に ball を飛ばす事が出來る。goal shoot の 場合はボールが上り易いから余り用ひぬ方が良い。

說明後豫科部員より本科生の指導の下に kick の練習をなす。

午後の練習は3時より約2時間午前の place kick の代りに long kickを 入れて、kick の練習をなす。

(付 記)

豫科の部員中大分 kick の伸びて來た人も居るが未だ力が足りない、へばつても强い ball が蹴れる樣練習しよう、相當 running の練習が多いので speed に殆ど差がなくなつて來た、も少し小股で走ればよいと思ふ人が大分多い。

更に short kick に就いて

short kick が如何に効果があるかと云ふ事は今更改めて云ふ必要はない。此の時間を有効に使ふか否かにより上手、下手が分れるのではないかと思ふ。

short kick は side kick の練習臺であり、又正確な kick, stop, pass の練習臺でもある、其の他考へ樣によつては、實戰に於けるあらゆる play は之の中に於て修得出來るものと私は信ずる、只數人が圓を造り其の中で無考へに ball を動かしてゐても何の役にもたゝぬ。

受ける pass の性質により stop すべきか direct pass をするか、誰に pass すべきか、どんな kick を用ふるか色々考ふべき事が多い。

又自分の周圍に來た ball は出來得る限り處理する樣常に緊張して後逸すれば自分の恥だと思はねばならぬ。

實際の練習を見ると未だ考へが足りぬ樣であり、特に pass は rough な事が多く kick も利足のみに偏する傾向が强い、清水、吉澤其の他の諸兄は、最後の傾向の最も强いものであらう。一考を促す次第である。

(大掛記)

4月8日 曇、小雨 7時20分より Radio 体操。

練習始めより3日目、疲勞と筋肉の痛みの絶頂と思は

る。9時20分練習開始、練習は昨日午前と殆ど仝じ。

身体全体の筋肉が非常に痛む、一ケ月余の休みで伸び切つた筋肉はこの合宿練習により、たたき直して試合に見へる爲の基礎工事だ。今日がその絶頂と思はれる、が元氣でグラウンドまで走り ball を蹴る中には、いつしか忘れてしまふ。

午前中の練習の重點は kick である。大体成績良好、枝村兄が菓子折持參で ground まで練習を見に來て下さつた、豫科の狩森も今日から合宿に參加する事となる。

午後の練習は 3時20分開始、雨のため箱根土地グラウンドは泥濘と化してゐるので本科の陸上競技の Field を使用する、大体午前の練習通り。相憎くの雨で思ふ存分の練習は出來なかつたが、寒さと ground の惡 condition にも負けず、豫科の若い諸君が元氣一杯で頑張つて呉れたのは嬉しかつた、商大蹴球部は上級の者が監督して引きつれて行く許りでなく、下のものが先づ頑張つて、意氣で練習して貰ふ事が殊に必要だ。之の點で、今日はとても嬉しかつた。　　（鈴木記）

4月9日　7時20分　体操の後 running 南部線まで。歸りは專門部を廻つて歸る。

往路9分半　復路11分

午前中の練習課程は昨日の練習に更に stopping の練習を附加す。

相當足を痛めた樣子、之は今合宿が kick に重點を置いた爲めと思ふ。

午後は練習休み。

（付　記）

練習中殊に long kick などをして居る場合もつと聲を出して欲しい、又 running の時皆もつと一緒になつて走つたらと思ふ。故障なんかある人は別として長距離を皆仝じ苦しみで仝じ道を仝じ早さで走る所に蹴球部の團体生活としての意義があるのではなからうか。

技術的に見ても、長距離の running では一緒に走ると、余りへばらないが、一寸でも遲れると走るのがとても辛くなるものだ。始めの中一寸辛いと思つた時に辛棒すると後は割に樂に走れるものだ。割合に心臓の强い僕が斯んなことを云ふのはいけないかも知れないが。

（荒井記）

4月10日　朝雨後晴　Radio体操は行はず

午前の練習、10時開始

今日は heading の練習を行ふ、Ball に濕氣ある爲重く頭痛し、後 stop と pass の練習をなす。

十二時半終了、午後空は次第に晴れて絶好の練習日和となる、午後三時箱根土地グランドにて行ふ。

(1) 体操 6分
(2) 縄飛 10分
(3) running 10分
(4) heading 30分
(5) short kick 10分
(6) running pass 三回 7分
(7) goal shoot 15分 (5分づつ)

5人に分れ penalty 邊より、轉せる ball を shoot し狩森、吉澤之を catch す、合宿最初の goal shoot なり foward の shoot は相當の當りを見せた。

(8) long kick 15分

皆疲勞の爲比較的振はず豫科生は寧ろ本科生を壓倒するの勢であつた。

(9) 方向轉換及 dash 10分
(10) running 10分
(11) 体操 6分 (森田記)

4月11日 晴時々曇

今年始めて試みたる、起がけの running も今日が最後だ、走る距離の長さ遠さ、それから期待される効果と云ふ様な事は扨て置き、從來千偏一律だつた合宿の朝のラジオ体操を早朝の running に換へた事は必しも不成功だつたとは言へない様に思ふ。朝食前の一走り、兎に角食事を美味しくするだけの効果はある。

今朝は旭通りを突つ走り途中左にそれ、小高い丘の中の間道を走り中央線上の陸橋に出る、一休み後中央線を南から北へ横斷道を迷ながらも兎に角合宿に歸つた、所要時間十七分。

朝食後重見と最後の scheduleを 作つて居る所へ、東伏見のオリンピツク候補の合宿より試合の申込みあり、小野氏よりの文面にて試合が出來なくて困つて居る様子明かであつたけれど我々も長い休みの後に練習を始めて未だ一週間にもならない事ではあるし、体がやつと元に歸りかけて居るに過ぎない有様で、試合には早過ぎる感深かつたが兎に角練習臺になつてやる心算りで試合に應ずることゝする、從つて明十二日の豫定は變更午前中一旦解散する事とす。

十時過ぎ練習開始

1 体操
2 縄飛 (一分間二回)

二分間續ける事は相當の苦痛である、之耐久力の養成速度方向を變へる事は反射運動の練磨と考へて兩者を完全にこなし得る様になれば縄も滿足するであらうと思はれる。

3 running

4 heading

foward と back に分れてやる、foward は goal 前で行ふ、相當 ball も重く、頭も痛むが、かゝる時 form を崩さない樣練習することが肝要である。

5 running pass　約十五分

6 休

7 short kick

8 shooting

大体三組に別れて行ふ、昨日の午後は相當の當りを見せたが今日はそれ程でなく、之第二回のへばりが來た爲めと思はれる。

9 dash　二回

10 running

11 体操

午後の練習は3時20分より開始、大体午前の練習に formation を加へた程度のものである。

4月12日　曇時々雨

7時20分　ラヂオ体操

今日は午前中小平豫科グランドで紅白試合を行ふ豫定であつたが、オリンピツク候補との試合に應じた爲朝食後一先づ解散して午後試合に出掛けることにした、午前九時解散す。

午　後

我々は練習開始後一週間であり、丁度へばりの絶頂にある時で、部員中故障のあるもの多く試合をするのは尙早の感が深かつたが、manager 小野氏の懇望に依り、試合をする旨を約す。

春尙淺く、練習も少く、雅量を見せて練習臺になる積りとしても果して滿足の出來る樣な試合が出來るかどうか大いに怪しんだけれども、皆精一杯に動いて、その上豫科の若い諸君が大敵を向ふに廻しての試合を經驗する機會を得た事を悅んで居る。

| | 商大 | オリンピツク候補 | | |
|---|---|---|---|---|
| F.W. | 淺枝 | 加茂(兄) | | F.W. |
| | 大掛 | 西邑 | 金 | |
| | 菅瀨 | 松永 | 高橋 | |
| | 荒井 | 川本 | 播磨 | |
| | 村井 | 加茂(弟) | | |
| H.B. | 二階堂 | 種田 | 關野 | H.B. |
| | 後藤 | 右近 | 吉田 | |
| | 高橋 | 立原 | 笹野 | |
| F.B. | 早野 | 竹內 | | F.B. |
| | 鈴木 | 堀江 | 鈴木 | |
| G.K. | 吉澤 | 佐野 | 不破 | G.K. |

オ候補 7{4−0 / 3−0}0 商大

| オ候補 | | 商 大 |
|---|---|---|
| 4 | G.K. | 16 |
| 7 | C.K. | 2 |
| 2 | F.K. | 2 |
| 0 | P.K. | 0 |

勝負を度外視して急に team を編成して對戰したのであるから、勿論我々には精一杯動く外は何等の方法もなかつた、前半はただ ball を追つたと云ふに過ぎなかつたが後半落付きを取り戻すと共に、風上に陣し再三敵 goal を陷れる chance に惠れたれど、遂に一點をも奪取出來なかつたことは殘念であつた。

この一つの試合を以て云々するわけではないが、若い諸君の奮鬪目醒しいものがあつた事は悅びに堪へない。今年は春の中に出來るだけ、この樣な機會を捉へたいと思つてゐる。（以上 淺枝記）

後記 以上で合宿日誌は終つて居る。合宿に就ての淺枝君の感想は是非のせたかつたが誌面の都合上省略しました。

私の編輯の拙さから、無味乾燥に近い日誌としてしまつた事は深く御詫びをする次第です （以上 重見）

（話 の 泉）

○角さん、掛さん、ススキさん、かん平さん、狩さん、米さん、種さんの東京留守隊は富浦へ行つたさうです

○富浦は水が綺麗ださうです。でも人はそれ程でないさうです。

○それでも寛平さんなどお輕と重くなつたさうです。

# 豫科「日誌」より

昭和十一年一月十五日

練習がないと部員が顔を合す機會が少くなる。部室で樂しく話せるとよいのだが、自分の頑張りが足りなくて北側の寒い方へやられてしまつたから、ゆつくり居る氣のしないのは無理はないと思ふ。

部員である以上部室を愛すのが當然だ。一日に少くとも必ず一回は訪ねる心掛けでありたい。自分はこの二三日來、放課後も二三十分は部室へ來て掃除したりしてゐる。だが誰にも會つたことがない。晝休みでさへ部室では誰にも會へない。殘念である。

我々が一二年の頃は、上級部員を見つけると何時でもそこへ寄つて行つたものだ。何にも話をするわけでなくても、一つの目的に心を同じうする我々は、機會ある毎に一緒にゐるといふ事に喜びを感ずる樣でなければならぬ。まだ試驗が迫つたわけでもないのに、こんな風では試驗が近くなつたら部員の連絡が全く絶えるだらう。クラスやその他の交際といふ事があるかも知れないが三度に二度は部を考へて欲しい。

部室を毎日訪れてゐても時間の關係などで行き違ひになるのかも知れぬ。部室にストーブでもあればよいが、この寒さでは永くゐる氣のしないのは無理もない。そこで考へたのがこの日誌である。誰でも部室へ來た者が感想とか報告とか近況とかを書くのである。堅苦しく日誌當番などきめない。その代り眞面目な部員の記錄であつて欲しい。後に殘るものでありたい。誰といふことなくブラリとやつて來た部員の書いたこの日誌がその各人の特色を表はすと共に各人を一貫して流れる部の精神を表はすものでありたい。恰も希臘の建築の樣に。

然しそれは作らうとして出來るものではないと思ふ。又さうして出來たものであつてはならない。要は部を中心としての各員の團結であり精神的一致である。精神的一致は試合や練習の時にのみ限るべきではない。此頃の樣なシーズンオフの時でも或ひは長い休暇の時でも、否！商大を卒業して後も一致して行かうではないか。我が部の理想は其處にある。低い所へ自然と水が流れ込んで行く樣に、心を同じくする者は自然と集るものだ。我が部は是でありたいのだ。

今や商大蹴球部もリーグ第一部に確留し維新の時代である。新入生も程なく入つて來る今日、內に益々省みて强固な精神を保ち、外に光輝ある足跡を殘すやう努力しなければならない。學期試驗には心ゆくまで頑張つて貰ひたいが、閉日月あり、時々部室を訪れて我が意のある



所を汲まれ、日誌に一筆落される樣に。

（熊澤博文）

一月十八日（土）晴

此の企に對して双手を擧げて絶對の讃意を表すると共に、熊の努力に感謝す。早速書くべく開いて見たら「眞面目なもの」の項目が目に映つた。之では到底俺の口に合ひさうにない。併し合はないからとて自分一個の爲に此の事を止すのは罪惡なりと感じて書き始める。書くと言つてもどうせ大した事は書けない。唯今日は水島、神野兩兄の送別會があるので何だか嬉しくて堪らぬ。思へば過去一年寢食を忘れての奮闘、血塗れの戰……汲めども盡きぬこの想出。二兄の警ふるに術なき勞苦、辛酸に對し吾々は深甚の謝意を表し、來るシーズンの健闘を誓ひ心行くまで美酒に醉はん哉。

（十二時五十七分、小西生）

一月二十日（月）晴

近頃部員に風邪引きが多い樣だ。斯くいふ僕も現在風邪氣味で困つてゐる一人だ。長いシーズンが終つて氣が緩んで病氣になる事はあり勝だから大いに攝生しようではないか。

一年の諸君などで一期の試驗成績の思はしくないと考へる人は、遠慮なく先輩の秀才とおぼしき奴によく要領を聞いて、二期には好い成績をとる事だ。學校の成績に心配ない樣にする事は我々の第一の本分であると共に、色々な意味で蹴球部の爲になる事なのだから。

（後藤記）

土曜のアタビン酒で昨日一日變だつた。あの送別會で僕は色々良いことを聞いた。水島、神野兩兄の言はれたことは誠の体驗から出た尊い言葉だ。僕は大いに感服させられた。特に「馬鹿になつて頑張れ」と言はれたことは實に良い言葉だと思ふ。思ふに、小利口になつて大極を忘れることをいましめられたのであらう。

何時でもサッカー部の會は愉快で誠に部の精神が充滿する。ある程度まで、その重要さが平生の練習に勝るとも劣らぬと思ふ。

五時間目のベルがなつた。

（米山）

一月廿七日（月）晴

誰も居ない部室、少しも淋しさを宿してゐない、寧ろやがて超滿員に部員がつめかけて談笑の裡に汗臭いユニホームを着かへるあの愉快さ、朗らかさを期待して、早く皆が集るといゝなあ、と部室は思つてゐる樣だ。此の椅子、あの戸棚、今までの豫科を知つて居り、又此からの豫科を默々と見てゆくだらう。

（H・K・生）

一月三十一日（金）晴

今日は今冬中一番寒くて零下七度二分だ。此の部室など特に寒い。だが今日は何だか嬉しい樣な淋しい樣な氣がする。それは、豫科三年生諸兄の送別會があるからだ豫科を出たつて、まだ本科に三年居るのだから淋しくない樣だが、物足らぬ氣がする。實に今の三年生諸兄はよく團結して、蹴球部の爲に盡して下さつた。この心盡しを、我等は何時々々までも忘れないで、今後益々頑張らう。商大蹴球部は技よりも精神力だ。人の和が何よりも大切なのだ。特に一年の諸君よ。今後大いに團結して蹴球部の趣旨に副ふやうにしやうではないか。

今日は二階で響くヴアイオリンの音も何だか物淋しさうだ。

試驗もあと一ケ月だ。大いに頑張らう。春には大いに愉快に練習が出來る樣に。何を言つたかはつきりせぬが要は團結の一語に盡きるのみ。

（M・K・生）

二月四日（火）雪

後僅か一月で本科へ行かれる三年生の氣持、名殘り惜しさ、後に殘る僕等の淋しさ。しかし一月たてば泣いても笑つても來るものは來るのだ。一二年の諸兄よ、今後一月の間一層よく三年生と交り、話し合ひ、豫科二十名がしつかり一休となつて行かうぢやないか。此が今僕等に殘された唯一の送別、謝恩の道であらう。

（一一、四〇分　米　山）

降りしきる雪を眺めながら部屋で一人震へてゐる。雪の如く冷い頭と、白い心と。そして溫いものにはすぐ溶ける雪。よく見ればその雪には規則正しい結晶があるのだ。僕は雪が大好きだ。

（H・K・）

二月七日（金）曇

朝から曇勝ち、後には雪も降らんと言ふ。ボールの掃除も愈々濟んで、戸棚の中で合宿を待つてゐる。こゝらで部室の大整理をするのも惡くないでせう。

昨日映畫を見て來たが、どうも運動する人は讀書とかさういつたものに緣が遠くなり勝だ。或內容を持つたものが僕等の視野に表れて來る時、矢張り本を讀み思惟してゐる奴の方が、容易に、より多くその內容を取入れるであらう事は否定も出來ない。だから蹴球してゐても、蹴球ばかりでは仕方がない。それと平行して、讀書とかそんなものも伴はしめねばならぬ。とこんなありふれた事を今更でもあるまいが、事改つて感じたから又書きとめる。蹴球部員は、敎養に於て、その思想に於て、體質に於て他部の範とならしめたいなあ。各人のよき部員たる事によつて、蹴球部は何時しかその傳統精神を得るだらうと思へば。

（馱　辯　子）

二月十四日（金）晴

又々學校騷動。先生方の喧嘩だと言つて平氣でゐる奴は居ない。誰だつて夫婦喧嘩の絕えない家に居たら、子供はひがみ根性になるよ。

（一　生　徒）

二月十九日（水）

昨日の暖さに引かへて又寒くなつた。しかしもう春だグランドが、雪に蔽れてゐた肌を漸くあらはした。誰か詩人は居ないかなあ！この日記をドシ〳〵活用すると物凄いものが出來はしないだらうか。一年生諸氏がどうしても部室に現れない。淋しくもないが、四月から斯うだつたら大變だ。相變らず學校の方は落着かない。「學校がいやになる」とか學校に關する變な言葉が頻りに耳にされる。當然だらう。しかし大きな一橋が喘いでゐるとしてこの蹴球部を見れば、我部は實に小さい一橋として圓滑に動いてはゐまいか。敎授團でも助敎授團でも、各組の單位を以つてしても、此等は明らかに一橋を形成する小さな塊だ。この塊が一橋として恥しからざる動きを取れば、一橋は相變ず昔の一橋として今もあるだらう。まあ我々は蹴球部を心ゆくまで愛して成長させたいものだ。長瀨さんの學生時代の戀人が蹴球部であつたといふ戀愛を純粹に考へるとき、この長瀨さんの話は實に我々の現在に於ける一つの良き指針だらう。

（S・N・）

四月十五日（水）曇

一昨日の荒天、昨日の快晴、そして今日は又曇。小金井の堤に櫻の滿開を見るのも近い事だらう、と思つてゐたら、又ぞろ冬へ逆戻りする樣な寒さだ。

丁度正午頃、新入生勸誘の樣子如何にと單身部室に現れた所此の日誌を發見して、之面白やと始めから讀み返して見た。熊公の殘して行つた此の日誌、讀みながらついホロリとさせられる。然し、この日誌を活用して、淋しさを悅びを、苦しみを卒直に書き綴つてゐる者の名が限られて、一度蹴球と言ふ生活に飛び込んで來ながら、自分から固い殼を冠つて居る樣に思へる輩のある事實は遺憾である。蹴球に依つて見出す意義は勝手だ。練習を試合のためばかりだと考へた事もなく、又考へたくもない。だからクタ〳〵に伸びる事も愉快である。

角帽を頭に乘せると誰もが偉くなりたがる。又偉くならせる。此も仕方あるまい。しかし一度飛込んだ生活だ何とかして嬉しい生活にしなければ神樣に對して申譯ない。春も段々深くなつて、萬物活動を開始する。今の所あれこれと色々な事が頭に浮んで萬事消極的になつてゐ

る。しかし何時迄も斯んなどつちつかずの狀態にはして置きたくない。

この日誌、心から嬉しく讀ませて貰ひ、本科生の分際で一寸書かせて貰ひました。今度何時か讀ませて貰ふ時には豫科部員皆の名がある事を期待してゐる。

（一本科生）

四月十七日（金）

練習以外に、互に部に關して考を談じ合ふ事によつて愛部心をそゝり立てられる事は甚だ大である。兎角今の所謂インテリ階級と呼ばるゝものゝうちには、見榮坊的な氣分から徒らに議論を議論としてのみ論じ、對手の言葉尻を捉へて說きふせて、卑しい自己滿足にひたつてゐる者が多い。自分もよくこんな輩に出會つたものだが、その度に非常に憤怒を感じた。はからずも折に觸れ、部員の議論を聞いて、非常に感謝したものであるが、何故部員の言葉が自分に感銘を與へたかは、その言葉が體驗から出てゐるからだと言ふことを近頃悟ることが出來た之に依つて蹴球をやつてゐる事に對する喜びは倍加した。

（吉　澤）

五月五日（火）

菅瀨、金井の兩君が脚を痛めて練習に出られないので豫科の諸君は淋しいだらうが、斯う云ふ時には、一人一人が張切つて、自分のプレイと言ふ樣なものを反省しながら練習して行けば、グランドに立つて張切れないなどゝいふことは無い筈だ。兩君もやがて練習に出られるだらう。

今日は端午の節句だ。大空には悠々と鯉のぼりがひるがへつてゐる。鯉のぼりを見ると、何時でもそれがたゞ子供の節句だと感ずるだけでなく、我々青年の意氣とか熱とか、青春の悅びとかを大きな〳〵古い傳統の力によつて表現してくれてゐる樣に思ふ。

（池　尾）

五月七日（木）

大掛さんと寮で飯を食つて、風呂に入つたりして一年の渡邊、櫻井、松岡、鈴木等を混へて麻雀などやり、十時頃まで愉快に談笑した。斯う云ふ機會を今後たび〳〵作つて一年の人達と多く接したいものだ。ですから本科の人達も、用のない時は練習を終つたら、寮の風呂へ入つて、寮の客膳とか言ふ奴を食つてゆつくり遊んで行つて下さい。

（R・I・）

五月三十日（土）曇

徒然なる儘に、朝ぶらりと豫科へ來て見た。多摩湖電車の中で狩さん、山田と落合ひ、昨日の試合のことなど話し合ふ中、回數券二枚モサられて終つたのには聊かクサツタが後の祭。昨日の試合、相手がオリンピック代表



とは言ひながら敗けた事には變りない。豫科の諸君には此の通り平身低頭（實は舌を出してゐる）して謝る。特に七〇分間、ションボリ立つて、ボール一つ蹴らなかつた僕は、其の敗因の責を一身に負ふものである。

何時きて見ても、部室は親しい香を盛つて居る。土の香、汗の香、特に僕の「タニマゴロク」から發散する香には一種言ひ知れぬ、或ひは深山の百合にも例ふべき香がある。此の點僕のシヤツのホコリとする所である。狩さんと二人、部室で差向ひ、相手が狩さんでは……。余談はさて措き。

稍々もすれば身も心も滅入りさうな天候だ。豫科リーグも後一つだ。玆の所をがつちりしめて、豫科リーグ有終の美を飾らう。餘り日記がつけてないのでついウツカリ書いてしまつた。古狸も時には若い娘に化けて見たいものださうです。本科の僕だつてたまには豫科の日記をつけて見たいのだ。此の氣持分るだらう、アーメン。

（一本科生）

六月十日

梅雨の晴れ間と言ふか、空は晴るれど、風もなけれども、蒸し暑い日だ。本科は今日は練習がないが、何となし汚い部室に憧れを感じてやつて來た。米さんが傍でボールを熱心につめてゐる。もう一時間も經つたのにまだ二つしかつめないぜ。田島兄が特異の聲聲を出して、窓際に青空を見つめながら懷しのラブソングを歌ふ。誰か聞いてゐるのでせうね。淺枝一人冥想にふける。俺はうまくもない紫煙に一人むせてゐる。

思へば既に練習を始めて二月もたつた。春風にのせられてグランドに落ちた無數の花びらを踏んで、春空に大きなボールの輪を畫いたのもつい先だつてだと思ふのに。

あゝ、堤の櫻も綠に映え、グランドの林も新綠にみづ〳〵しい色で包まれてしまつた。初夏なのだ。ぢきに休みだ。そして秋だ。リーグ戰だ。溫和な氣候にめぐまれて來た今迄の練習は樂だつた。之からは暑いぞ。だが、炎熱をも征服してグランドに玉の汗を流す所に、蹴球の醍醐味があるのだ。浦高戰は秋のリーグの第一歩だ。勝たう、勝たう。暑さも何にも超越して、唯、浦高をのそうぜ！

（NT落書生）

六月二十九日（月）

勝つた、勝つた、遂に浦高を二對〇で一蹴した。選手諸君實によく頑張つて呉れた。本當に有難う。愈々春のシーズンも終つた今日、合宿以來の約三ケ月に渡る練習生活を省みて感慨無量だ。色々の場面が眼前に浮んで來る。苦しい事も、殘念に思つた事も、何でもかんでも樂

しい思ひ出となつて浮んでくる。兎に角豫科諸君一人殘らず實によくやつて呉れた。この氣持、この意氣に更に馬力をかけ秋には優勝しようではないか。

（米　山）

◇日誌は豫科の歴史帳だ。書いてあるもの、何れも自分の心からのこと、一つとして讀んで胸にこたへないものはない。全部掲載したいのだが、此を整書する時間がない爲殘念だが此だけ選んだ。（編　者）

（話　の　泉）

○菅瀨君が廣島へ出掛ける時　大阪の近所で寶さがしをしたさうです。その時九州から歸りの某君にバッタリぶつかつてランチをタカつたとは、チヤッカリしてるわ。

○水島兄「歸つたら神野にどうして手紙呉れないのだと言つてくれ。お互に出さうと　卒業式の時約束したくせに」といふので「水島さんはどの位出しましたか」ときくと「ウンニヤ、俺も一回も出さない」



# 昭和十年度試合記録

五月一日　對早稲田大學、午後三時

東伏見グランド、本學先蹴

三對二にて惜敗

早大3（21—20）2本學（七十分ゲーム）

大　掛井　枝田　井
商　大荒　淺林　村　F.W
岩崎　小重　H.B
西見　畠木
水島　鈴田　F.B
大　松邑　本澤　原（加茂）
早　平西　川野　立　F.W
木（立原）　田野　吉笹　鈴　H.B
上野（鈴木）　花田（上野）　F.B
佐野（不破）　G.K

前半風下に陣し壓迫さるバックの好守によく一点で喰止める。

後半風上となり漸く六分四分位におし再三チャンスあれど逸し一——一・二——二と三度び同点となり惜しくも最後の止めをさざる。

五月十一日　對慶應義塾大學、午後三時より

日吉グランド、本學先蹴、曇無風

七對〇で慘敗

應大7（43—00）0本學（七十分ゲーム）

大荒　掛井　淺枝　角田　村井　F.W
宮近　二田　右磨　增崎　播川　駒宮　F.W
森田　小西　水島　H.B
枝村　鈴木　F.B
淺田　G.K
8　G.K
8　C.K
宮川　石川　辻宮　H.B
藤骨　伊乙　F.B
一宮　G.K
20
3　C.K

前後半共押切りに攻めれど入らず敵の逆襲に皆極められて了つた。

續いて二軍同志の試合は二對〇で惜敗

慶大二軍2（11—00）0本學二軍

中村　米田　篠崎　野村　大田　F.W
長谷川（神野）　池尾　熊澤　林田　菅瀨（長谷川）
松本　猪俣　加藤　H.B
岩崎　早野　重見
野邊田　渡邊　F.B
二階堂　米山（高橋）
津田　G.K　狩森

善戰して敗る。

六月三日　對名古屋高商、午後二時より

小平グラウンド、名高商先蹴

四對一で勝つ

本學4（31＝01）1名高商（七十分ゲーム）

| | | |
|---|---|---|
| 掛井 | F.W | 田堂 |
| 大荒 | | 見階 |
| 林田 | | 重木 |
| 角井 | | 水島 |
| 村田 | | |
| 森田 | H.B | 二階 |
| 重見 | | 鈴木 |
| 水島 | | 田島 |
| 掛井 | F.B | |
| 荒枝 | | |
| 浅田（林田） | G.K | |
| 角井 | | |
| 村 | | |
| 森田 | | |
| 小西 | | |
| 水島 | | |
| 枝村 | | |
| 鈴木 | | |
| 田島 | | |

前半名古屋のショートパスに惱まされ苦戰したが後半FWのパスよく流れ三点を離して勝つ。

六月六日　對帝國大學

本郷グラウンド

二對〇で惜敗

帝大2（11＝00）0本學（六十分ゲーム）

本郷の超俊グラウンドの爲か皆調子出ず徒らにミスするのみ。

春季豫科リーグ戰

五月十九日　對法政大學豫科、本學先蹴

代田橋グラウンド　主審　齋藤、浮洲、國分

一對一で引分け

豫科1（10＝01）1法政

| | | |
|---|---|---|
| 清水 | F.W | 崎堂 |
| 池尾 | | 岩階 |
| 熊澤 | | 小西 |
| 金井 | | 二 |
| 長谷川 | | |
| 芝崎 | H.B | 青柳 |
| 小澤 | | 鈴木 |
| 向野 | | 岡山 |
| 金安 | | |
| 高 | | |
| 大河平 | F.B | 早野 |
| 大谷 | | 高橋 |
| 和田 | G,K | 狩森 |
| 35 | G.K | 13 |
| 5 | C.K | 10 |
| 6 | F.K | 4 |

前後半を通じてよく押さへてゐたが入らず惜しい所で引分けとなる。（リーグ戰は凡て九十分ゲーム）

五月廿五日　對慈惠醫大學豫科

代田橋グラウンド　主審　大內

二對〇にて勝つ

豫科2（20＝00）0慈大

| | | |
|---|---|---|
| 水尾 | F.W | 崎堂 |
| 清澤 | | 岩階 |
| 池井 | | 小西 |
| 熊山 | | 二 |
| 金 | | |
| 米 | | |
| 菅村 | H.B | 早野 |
| 小野 | | 高橋 |
| 中玉 | | |
| 佐藤 | | |
| 兒 | | |
| 佐 | | |
| 山田 | F.B | 狩森 |
| 內田 | | |
| 近田 | | |
| 中山 | G.K | 11 |
| 成川 | | 8 |
| 西原 | | 2 |
| 34 | G.K | 11 |
| 5 | C.K | 8 |
| 4 | F.K | 2 |



六月九日　對早稻田高等學院

代田橋グラウンド　主審　齋藤

九對一にて敗る

早高9（54＝10）1豫科

| | | |
|---|---|---|
| 谷川 | F.W | 崎堂 |
| 長尾 | | 岩階 |
| 池澤 | | 小西 |
| 熊井 | | 二 |
| 金山 | | |
| 米 | | |
| 岩 | H.B | 早野 |
| 小 | | 高橋 |
| 二 | | |
| 吉澤 | F.B | 狩森 |
| 2 | G.K | 41 |
| 5 | C.K | 0 |
| 0 | P.K | 0 |
| 2 | F.K | 5 |

小西の好蹴に一点を得たのみ。

六月十五日　對立教大學豫科、立教先蹴

代田橋グラウンド　主審　小山

四對〇で惜敗

立教4（22＝00）0豫科

| | | |
|---|---|---|
| 水尾 | F.W | 川堂 |
| 清澤 | | 谷階 |
| 池井 | | 村野 |
| 熊谷 | | 西橋 |
| 金村 | | 階森 |
| 長西 | | 野狩 |
| 枝階 | | 橋 |
| 小野 | | 森 |
| 二橋 | | |
| 早森 | | |
| 高狩 | | |
| 村 | H.B | 上 |
| 廣 | | 野 |
| 谷 | | 田 |
| 田 | | 藤 |
| 上 | | 田 |
| 野 | | 本 |
| 田 | | 井 |
| 藤 | | |
| 田 | | |
| 本 | | |
| 井 | | |
| 中 | F.B | 伊 |
| 朝 | | 武 |
| 蜂 | | 岡 |
| 國 | | 高 |
| 井 | | |
| 藤 | | |
| 塚 | | |
| 伊 | | |
| 武 | | |
| 岡 | | |
| 高 | | |
| 24 | G.K | 17 |
| 6 | C.K | 7 |
| 8 | F.K | 5 |

本學元氣に戰ひ五分々々の裡に試合を進めたが戰利なく合計四点を取られる。

豫科リーグの戰績は一勝一分二敗A級第三位となる。

六月廿三日　浦和高校春季定期戰　浦高先蹴

浦高グラウンド　審判　荻原

一對一にて引分く（六十分ゲーム）

豫科1（10＝01）1浦高

| | | |
|---|---|---|
| 水尾 | F.W | 崎堂 |
| 清澤 | | 岩階 |
| 池井 | | 小西 |
| 熊藤 | | 二 |
| 金 | | |
| 後 | | |
| 子田 | H.B | 村 |
| 金野 | | 西 |
| 水木 | | 谷 |
| 小馬 | | 神 |
| 鈴 | | 川 |
| 有 | | 松 |
| 石原 | F.B | 早野 |
| 太田 | | 高橋 |
| 伊藤 | G.K | 狩森 |
| 17 | G.K | 8 |
| 5 | C.K | 11 |
| 7 | F.K | 1 |

九月十九日　對農業大學、四時廿分、農大先蹴

天候曇り、雨上り　於明藥グラウンド

本學4（31＝00）0農大（九十分ゲーム）

| | | |
|---|---|---|
| 大 | F.W | 掛 |
| 商 | | 荒 |
| | | 淺 |
| | | 林 |
| | | 村 |
| 森 | H.B | 田 |
| 小 | | 西 |
| 水 | | 島 |
| 枝 | F.B | 村 |
| 鈴 | | 木 |
| 田 | G.K | 島 |
| 17 | G.K | 16 |
| 6 | C.K | 6 |
| 1 | F.K | 2 |

| | | |
|---|---|---|
| 大 | F.W | 野 |
| 農 | | 野 |
| | | 目 |
| | | 井 |
| | | 台 |
| 前 | | 天 |
| 寺 | | 大 |
| | | 見 |
| | | 酒 |
| | | 中 |
| 渡 | H.B | 江 |
| 山 | | 群 |
| 橋 | | 高 |
| 野 | | 山 |
| 井 | F.B | 石 |
| 川 | | 西 |
| 本 | G.K | 川 |

九月廿九日　對明治大學、三時、本學先蹴
天候曇、下稍硬　於石神井グラウンド
本學6（42＝30）3明治大學（九十分）

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 掛井 | | 田川 | | 掛井 | |
| 大荒 | F.W | 小石 | F.W | 大荒 | F.W |
| 淺枝 | | 中島 | | 淺枝 | |
| 林田 | | 松澤 | | 林田 | |
| 村井 | | 朴 | | 村井 | |
| 森田 | H.B | 鈴木 | H.B | 森田 | H.B |
| 小西 | | 立石 | | 小西 | |
| 水島 | | 木内 | | 水島 | |
| 枝村 | F.B | 三島 | F.B | 枝村 | F.B |
| 鈴木 | | 井出 | | 鈴木 | |
| 田島 | G.K | 中村 | G.K | 田島 | G.K |
| 17 | G.K | 20 | G.K | 21 | G.K |
| 3 | C.K | 7 | C.K | 4 | C.K |
| 5 | F.K | 4 | F.K | 3 | F.K |

中般の出足は皆明治に押へられてゐた本學の得点は皆逆襲よりのものなり。
敵のバックは球に吊られるのでやりよかつた。

秋季リーグ戰戰績

十月六日　對早稲田大學、早大先蹴
天候曇、微風　於神宮グラウンド
早大7（43＝01）1本學

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 掛井 | | 松本 | | 掛井 | |
| 大荒 | F.W | 平川 | F.W | 大荒 | F.W |
| 淺枝 | | 末岡 | | 淺枝 | |
| 林田 | | 西邑 | | 林田 | |
| 村井 | | 加茂 | | 村井 | |
| 森田 | H.B | 吉田 | H.B | 森田 | H.B |
| 小西 | | 立原 | | 小西 | |
| 水島 | | 鬼野 | | 水島 | |
| 枝村 | F.B | 鈴木 | F.B | 枝村 | F.B |
| 鈴木 | | 柴田 | | 鈴木 | |
| 田島 | G.K | 不破 | G.K | 田島 | G.K |
| 28 | G.K | 16 | G.K | | |
| 4 | C.K | 8 | C.K | | |
| 2 | F.K | 3 | F.K | | |

審判　濱田、宮本、神寶

十月廿八日　對慶應義塾大學、本學先蹴
天候晴、強風　於小平グラウンド
慶應5（32＝10）1本學

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 掛井 | | 宮近 | | 掛井 | |
| 大荒 | F.W | 二右 | F.W | 大荒 | F.W |
| 淺枝 | | 增田 | | 淺枝 | |
| 林田 | | 播磨 | | 林田 | |
| 村井 | | 駒崎 | | 村井 | |
| 森田 | H.B | 松元 | H.B | 森田 | H.B |
| 小西 | | 石川 | | 小西 | |
| 水島 | | 辻 | | 水島 | |
| 枝村 | F.B | 伊藤 | F.B | 枝村 | F.B |
| 鈴木 | | 加藤 | | 鈴木 | |
| 田島 | G.K | 二宮 | G.K | 工藤 | G.K |
| 25 | G.K | 12 | G.K | | |
| 5 | C.K | 6 | C.K | | |
| 4 | F.K | 3 | F.K | | |
| 0 | P.K | 1 | P.K | | |

審判　西村　不破

十一月七日　對立教大學、立教先蹴
天候晴、無風　於石神井グラウンド
本學4（31＝12）3立教

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 掛井 | | 村廣 | | 掛井 | |
| 大荒 | F.W | 中朝 | F.W | 大荒 | F.W |
| 角田 | | 灰田 | | 角田 | |
| 林田 | | 久保田 | | 林田 | |
| 村井 | | 井上 | | 村井 | |
| 森田 | H.B | 宮崎 | H.B | 森田 | H.B |
| 小西 | | 飯島 | | 小西 | |
| 水島 | | 駒崎 | | 水島 | |
| 枝村 | F.B | 藤野 | F.B | 枝村 | F.B |
| 鈴木 | | 岡本 | | 鈴木 | |
| 田島 | G.K | 山口 | G.K | 田島 | G.K |
| 17 | G.K | 15 | G.K | | |
| 5 | C.K | 3 | C.K | | |
| 15 | F.K | 12 | F.K | | |

審判　竹内（虎）　木村、阿部

浮沈の一戰！思へば危い試合だつたよく勝つたものだ

十一月十五日　對帝國大學、帝大先蹴



曇（暖）強風　於神宮グラウンド
帝大5（32＝11）2本學

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 掛井 | | 川 | | 水 | |
| 大荒 | F.W | 小沖 | F.W | 清池 | F.W |
| 金井 | | 高橋 | | 菅瀨 | |
| 林田 | | 川原 | | 金井 | |
| 村井 | | 濱田 | | 熊澤 | |
| 岩崎 | H.B | 森 | H.B | 二階堂 | H.B |
| 小西 | | 田 | | 小西 | |
| 水島 | | 種内 | | 岩崎 | |
| 枝村 | F.B | 岡大 | F.B | 早野 | F.B |
| 鈴木 | | 藤原 | | 高橋 | |
| 田島 | G.K | 川島 | G.K | 狩森 | G.K |
| 21 | G.K | 18 | G.K | 7 | G.K |
| 4 | C.K | 13 | C.K | 5 | C.K |
| 3 | F.K | 5 | F.K | 2 | F.K |

審判　井出、上野、柴田

この一戰に依つて商大のファイトは世に知られた。

十一日廿三日　對文理大學、文理大先蹴
曇、小雨、濕潤　於石神井グラウンド
文理大2（11＝01）1本學

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 水井 | | 堀島 | | 水尾 | |
| 清荒 | F.W | 長下 | F.W | 清池 | F.W |
| 金井 | | 久林 | | 菅瀨 | |
| 林田 | | 小川 | | 金井 | |
| 村井 | | | | 熊澤 | |
| 後藤 | H.B | 木村 | H.B | 二階堂 | H.B |
| 小西 | | 原崎 | | 小西 | |
| 水島 | | 藤田 | | 岩崎 | |
| 鈴木 | F.B | 三塚 | F.B | 早野 | F.B |
| 早野 | | 阿部 | | 高橋 | |
| 田島 | G.K | 中恒内 | G.K | 狩森 | G.K |
| 24 | G.K | 11 | G.K | 7 | G.K |
| 6 | C.K | 10 | C.K | 5 | C.K |
| 5 | F.K | 6 | F.K | 2 | F.K |

審判　岩崎、野邊田、渡邊

十二月一日　對一高戰、於本郷
曇、無風

一高3（21＝20）2本學豫科

對浦和高等學校定期戰

十二月七日　三時　於小平グラウンド
曇、無風

審判　小野

本學3（21＝10）1浦高

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 水 | | 井 | | 水 | |
| 清後 | F.W | 永小 | F.W | 清後 | F.W |
| 菅瀨 | | 野田 | | 菅瀨 | |
| 金井 | | 水木 | | 金井 | |
| 熊澤 | | 鈴馬 | | 熊澤 | |
| 二階堂 | H.B | 有村 | H.B | 二階堂 | H.B |
| 小西 | | 松西 | | 小西 | |
| 岩崎 | | 川子 | | 岩崎 | |
| 早野 | F.B | 金谷 | F.B | 早野 | F.B |
| 高橋 | | 神澤 | | 高橋 | |
| 狩森 | G.K | 川島 | G.K | 狩森 | G.K |
| 7 | G.K | 11 | G.K | | |
| 5 | C.K | 3 | C.K | | |
| 2 | F.K | 6 | F.K | | |

## 三　商　大　戰

十二月廿四日　大阪商科大學、大阪先蹴
晴、無風　於本郷グラウンド
審判　井出、神野、松宮
本學9（54＝00）0大阪

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 掛井 | F.W | 階堂 | 早野 | 吉澤 |
| 大枝 | | 二西 | 鈴木 | |
| 荒井 | | 小島 | | |
| 淺井 | | 水 | | |
| 金井 | | | | |
| 村 | | | | |
| 川 | F.W | 本 | 月田 | 河盛 |
| 戸鶴 | | 富木 | 大濱 | |
| 竹村 | | 柏木 | | |
| 松野 | | 大井 | | |
| 佐坂 | | | | |
| 小 | | | | |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 掛井 | F.W | 田 | 鈴木 | 狩森 |
| 大瀬 | | 西 | 早野 | |
| 荒井 | | 島 | | |
| 菅井 | | 小 | | |
| 金井 | | 水 | | |
| 村 | | | | |
| 谷川 | F.W | 森 | 鈴木 | 狩森 |
| 大橋 | | 小 | 早野 | |
| 前田 | | 水 | | |
| 島 | | | | |
| 高橋 | | | | |
| 神田 | | | | |
| 村 | H.B | 村 | 野 | 行田 |
| 今西 | | 西 | 田 | |
| 川村 | | 村 | | |
| 北 | | | | |
| 野 | F.B | 川 | 月田 | 行田 |
| 川田 | | 野 | 大濱 | |
| 平 | | 平 | | |
| 田 | | | | |
| 行田 | G.K | 行田 | 月田 | 河盛 |
| | G.K | 13 | 34 | 11 |
| | C.K | 7 | 0 | 10 |
| | F.K | 5 | 6 | 1 |
| | P.K | 0 | | |

十一月廿九日　神戸商業大學、神戸先蹴

晴、無風、泥濘　於石神井グラウンド

審判　井出、富本、戸川

神戸 6（24—13）4 本學

常に攻勢を保ちて勝つ。

徒にエキサイトして敗る。

斯くして本年度の戰を總決算すれば

廿四戰中八勝十四敗二分

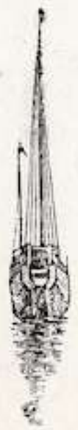
本科　十四戰五勝九敗

豫科　十戰三勝五敗二分

スコアは平均三對二の負である。本科豫科を別々に計算すると、

本科　四十四對三十

豫科　三十對二十二





# 一橋蹴球部部員名簿錄

（昭和十一年八月現在）

## ◇役員

部長　佐藤弘　教授

主將　淺枝彦太郎（本三）

委員長　重見敏之（本二）

豫科主將　二階堂晴三（豫三）

豫科委員長　米山大三（同）

部長　佐藤弘

世田谷區北澤三ノ九九〇

（電　松澤六〇六）

## ◇先輩

（右住所　左勤務先）

大正十四年度卒業

進藤靜太郎

兵庫縣武庫郡住吉村反高林一、八七六（電　御影五、六七八）

大阪市北區東梅田町二八　プリミヤハウス合資會社進藤商店（電　北一、〇二九）

大正十五年

松本正雄

杉並區西高井戸一ノ一三九

東京市京橋區銀座西一丁目　實業ビル內花岡法律事務所（電　京橋六、〇八六）

川村通

大森區田園調布四ノ二

（電　田園調布八三五）

調布高等女學校（電　田園調布五二一）

昭和二年

高橋朝次郎

麻布區廣尾町五九

麒麟麥酒株式會社（電　京橋六、一二一）

明石毅

兵庫縣武庫郡東芦屋藤ヶ谷莊園

大阪瓦斯株式會社上本町營業所（電　南一八〇）

編輯部調査

大正十三年（專）　北尾義人
C/o 10 Osaka Shosen Kaisha Ltd.
Connaught Road, Central, Honkong.

大正十四年（專）　三宅定夫
廣島縣廣島市堺町一ノ二一
自營

大正十五年（專）　藤井泰
横濱市中區北方町宇上野六三七
（電本局三、四七四）
京橋區寶町三ノ六集成社（電京橋四、一七一—四）

昭和二年（專）　山下保
京城府蓬萊町三ノ二二二
朝鮮鐵道局
朝鮮ホテル（京城府長谷川町）

昭和三年　三宅弘方
和歌山市湊北町一丁目　峯萬吉方
（電和歌山四三五）
大日本製氷株式會社大阪出張所
（電櫻川六三八）

昭和四年　瀨社・家力
小石川區小日向臺町一ノ六四

（村吉改メ）
渡邊甚吉
岐阜市松屋町一（電岐阜三八）
渡邊殖産株式會社

城島鎭雄
豊島區長崎仲町一ノ二、四七六
東邦火災保險株式會社

伊藤健吉
大森區馬込東一ノ一、〇八四

森綠
岐阜市松屋町一渡邊方（電岐阜三八）
名古屋市南區稲永新田
築地電軌株式會社（電南四四七）

近藤豊太郎
牛込區津久土町二
自營



昭和五年　豊田達治
大阪市住吉區北田邊九七
大阪市西區立賣堀北通一ノ三四　花王石鹼株式會社大阪支店（電新町四、四四〇）

平松宣夫
麴町區紀尾井町六
株式會社三越本店

津田弘精
大連市山城町第二アパート
三井物産株式會社大連支店

昭和七年　西川善一
名古屋市中區新榮町一
ライジング石油株式會社名古屋營業所
（電東局三、三三五—七）

高橋啓二郎
小石川區丸山町一一

高橋重彌
四谷區愛住町四〇（電四谷九七九）
明治生命保險株式會社營業部
（電丸ノ内一、一〇二—六　專用銀座四、九二二）

栗山健三
横濱市神奈川區宮ヶ谷七

（貞治改）
安野元章
本郷區湯島天神町二ノ一三

昭和八年　小林昌一
小石川區高田老松町一、〇〇七
片倉製絲

（敏介）
西田嘉兵衛
日本橋區横山町七ノ一
（電浪花二、一六一—五）
西田嘉兵衛商店

勝田一郎
赤坂區表町二ノ一一
庄川水力電氣株式會社

橋本林三
世田谷區代田一丁目六、五二ノ七
古河石炭鑛業株式會社

昭和九年

長瀨東作
福岡縣戸畑市千防三菱明和寮（電戸畑五三）
三菱鑛業株式會社若松支店（電若松二八）

吉村豊三
丸ノ内株式會社高田商會

昭和十年

二階堂謹司
廣島第十一聯隊第五中隊
三菱商事東京本店

後藤博基
滿洲派遣軍長谷川部隊第三中隊
三菱商事大連支店

昭和十一年

水島茂
西宮市上葭原三菱甲陽寮
三菱商事大阪支店

神野光司
品川區五反田六ノ一九一（電高輪一、五三三）
日本橋區堀留町二市田商店



## ◇在學生姓名

（）内は出身校　〔右現住所　左歸省地〕

（廣一中）
本科三年　淺枝彦太郎
中野區千光前二四　世木方
廣島市廣瀨元町二三一ノ一
（電　廣島　五八一）

（埼玉松山中）
荒井文雄
埼玉縣松山町松葉町

（四中）
田島輝重
世田谷區池尻町四三〇

（五中）
角田昇
小石川區林町一六

（一中）
森田昭之
淀橋區諏訪町一九九

（一中）
二年　鈴木彰
赤坂區青山南町四ノ二二
（電　青山　一、〇五六）

（附屬中）
大掛隆久
豊島區堀之内町三三

（京一中）
淺田英暉（英三改メ）
杉並區清水町三〇　岡本方
京都市富小路通綾小路下ル　澤田方

（神戸一中）
重見敏之
杉並區荻窪四ノ五二　田野邊方
岡崎市八帖町向田九〇

（青島日本中）
林田毅
杉並區天沼三ノ六〇五　野口方
長崎縣島原町釣鐘丁

（一中）
村井恒典
世田谷區玉川奥澤二ノ五四七
長野縣輕井澤千ヶ瀧一七一號（夏）

（二中）
一年　岩崎寛貞
城東區亀戸町二ノ七〇

（廣附中）
小西正夫
杉並區大宮前六ノ三五三　丹野方
廣島縣尾道市土堂町二一五

（湘南中）
後藤虎雄
四谷區三光町一ノ一　宮代方
神奈川縣平塚市本町三ノ七〇九

（埼玉松山中）
熊澤博文
豊島區西巣鴨二ノ二六三五　古積方
埼玉縣松山町本町三丁目

（五中）
米山大三
豊島區池袋五ノ二一〇
豫科三年

（廣一中）
二階堂晴三
府下小平村　豫科一橋寮内北寮十一號
廣島縣大竹町五三二ノ三

（五中）
池尾隆二
北寮四號
千葉市向寒川町二六二

（五中）
菅瀬十朗
小石川區久堅町七四

（上野中）
狩森正雄
府下吉祥寺五六七（吉祥寺四一八）

（神戸一中）
金井雄吾
南寮八號　二年
神戸市灘區篠原本町一ノ三二

（神戸一中）
堀尾貞一
杉並區上荻窪一ノ三一

（宇都宮中）
荒川守之助
瀧ノ川區田端三五（電宇都宮二三二三）
栃木縣宇都宮市大町一二二

（五中）
早野廣太郎
小石川區駕籠町四六



（神戸一中）
吉田富彦
豊島區池袋三ノ一四〇　藤野方
神戸市灘區高羽ヲヲ山一ノ二（電大塚八五二）

（開成中）
石割知之
杉並區高圓寺三ノ二一八

（八中）
清水睦（睦美改メ）
澁谷區圓山町三

（四中）
山田秀雄
杉並區荻窪三ノ一九七

（飯田中）
吉澤貞雄
中寮三號
長野縣飯田町知久町二

（五中）
高橋道太郎
小石川區指ケ谷町二（電小石川七二九四）

（一中）
鈴木英二　一年
北寮十五號
杉並區馬橋二ノ一七〇（中野二七七三）

（四中）
折下章
中寮十八號
杉並區中通リ町六〇

（五中）
茂木利孝
中寮二號
千葉縣東葛飾郡野田町中ノ台二一二

（廣一中）
片山光夫
杉並區阿佐ケ谷四ノ四三一　福壽莊内
廣島市河原町九

（神戸三中）
丸山好勝
北寮十七號
神戸市葺合區熊内町四ノ二〇三

（廣一中）
大上戸幸登
北寮十二號
廣島縣安藝郡奥海田村（海田市一二一）

（神戸一中）　渡邊　健
北寮十四號
神戸市須磨區大手町三丁目二六

（神戸一中）　櫻井孝次
北寮三號
杉並區上荻窪二ノ一三一

（八中）　松岡義彦
中寮七號
澁谷區榮通一ノ三五（電青山三七四五）

（五中）　松本信喜
北寮十六號
本郷區東片町六六

（廣一中）　高木正治
中寮三號
兵庫縣武庫郡御影町平野一、五八一ノ一

（二中）　宮崎豊治
立川町二、六四三

## 追補訃報

昭和七年卒業　栗山健三氏　病氣療養中の處去る七月二十七日午前六時半死去され、翌二十八日假葬に附せられた。

物故部員
昭和二年卒業　檜垣延樹

## 編輯後記

熊澤記

◇始めての私が己の時間に囚れて、田島さんの意見もろくに敲かず、連絡を絶つて編輯した結果は此んな部誌になつてしまつた。私の責任と深くお詫びする。

◇例によつて原稿集らず、終ひには發行の遲れるのを仕方がないと諦めてしまつたが、一方からは「部誌を早く送つて呉れ」と催促される仕末。編輯人のつらさを始めて經驗しました。

◇部誌は蹴球部の鏡である。內容は我々の心である。そんな氣持でもつと全部員が部誌に熱意を持つことも、此からの部を强くする所以ではなからうか。

◇特別寄稿はもつと多く集めて、諸君に大いに熱讀して戴かうと思つたが、種々の都合で二篇に留つたのは殘念だ。然し、二先輩の寄稿は內容豊なもの、早速讀まれたし。

◇頭初の三篇、本科各學年の選手が競うて感想を語つてゐる。傾聽すべきだ。

◇追想感想集にはなか〳〵立派なのが集りました。讀めば讀む程深いものがあります。それはやつぱり本科生に多いが、豫科生も斯うして次第に己の考を進めて行くのかと思ふと頼しい。願はくは先輩の良き指導に依つて獨斷と邪道に陷らざらんことを。

◇米山君の送別文を讀んで編者はホロリとさせられた。經驗なき者には解し得ざる境地。

◇部員漫評は第一號に倣つて編輯室で數人に依頼して集めたもの。笑ひの種にされ給へ。

◇種さんの「名物男紹介」はサトウハチロウに優るとも劣らざるメイ文だ。

◇寫眞の少なかつたのは何より惜しいが、次號には諸兄の後援に依頼して珍らしいのをのせたいと思つてゐます

◇卷頭言は、春の終りの會で淺枝さんが言はれたことゝ豫科の日誌に書かれたことゝを綜合して編者が勝手に載せました。お免し下さい。

◇十年度の記錄は試合のそれに止つた。それも凡て村井氏の好意と熱意によるもの。

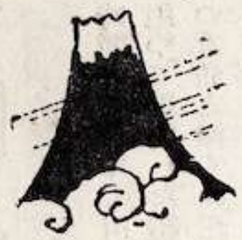
◇とにかく田島、村井兩兄にはお世話になつてゐる。紙上を借りて深謝します。

◇合宿は近づく、試合は迫る。お互に身体を作つて置かう。

◇それでは失禮、此から第四號の特種を集めにかゝる。

## 一橋會會歌

長煙遠く棚引きて　入相の鐘暮れてゆく
隅田のながれ夕潮に　オールを輕く浮ばせて
秋西風に嘯きし　その豪懷のあとかたや
あゝ一ツ橋空高き　母黌の春の朝ぼらけ
銀杏の梢青葉して　若き光の冱ゆるとき
梧桐の蔭に語らひし　その歡樂のあとかたや



瘴煙こむる南洋に　曉天の星さゆるとき
寒風むせぶ西比利亞の　荒涼の月仰ぐとき
思ひを馳せて一ツ橋　母黌の姿君見ずや
狂瀾山と湧くところ　清き理想の海原に
希望の星を涵すべく　さらば我友諸共に
蛟龍の意氣胸にして　いざ雄飛せむ五大洲

（以上）



昭和十一年九月一日印刷
昭和十一年九月三日發行
【非賣品】
東京商科大學內
編輯兼發行人　田島輝重
熊澤博文
埼玉縣浦和市一〇七
印刷所印刷人　栗原勘三郎
發行所　東京商大蹴球部